

縄文時代後期注口土器の 残存状況に基づく分析

—豊田市今朝平遺跡出土資料より—

● 川添和暁

縄文時代後期の注口土器について、使用・廃棄の痕跡から、その活動行為の復元を論じたものである。今回、部位と残存状況について特に注目して、分析を行った。注口土器自体の分析はもちろんのこと、加えて、注口土器とは歴史的脈略が全くなく、かつ形態的に類似する、中世陶器古瀬戸類の水注との比較・検討を行った。その結果、両者には、残存部位および欠損状況において大きな相違が認められ、注口土器では、注口部を意図的に根元から切断する行為がしばしば行なわれたものと推定した。遺跡から出土する注口土器は、注口部、注口部が除去された胴部、注口部のついたママの完品、胴部片の4群の状態に分けることができ、特に他の破片とは接合しない注口部の存在など、祭祀行為や遺跡間関係を考える上で重要になることを指摘した。

はじめに

本稿の目的は、縄文時代後期の注口土器に関する使用・廃棄の痕跡から、人為的行為について論じるものである。土製である資料では、破断面の観察に限界があり、別の視点からの検討が必要と、筆者は考えた。

今回、資料の分析の方法として、歴史的脈略がなく、かつ形態的に類似する資料を比較・検討する方法を採用した。考古資料が当時の道具として使用されていた場面では、その意義などにより、使用法がある幅で一定しているならば、異なる二者（あるいはそれ以上）を比較した場合、使用痕や欠損状況などで、パターンの差が指摘できるのでないのか、という仮定からである。さらに、もしこの仮定に蓋然性が認められるとなれば、ここから新たな人為的行為の復元を行なうことができる道が開けると、筆者は考えているのである。

研究小史

注口土器の名称および地理的な分布の提示など、現在の注口土器研究の基礎には中谷治宇二郎の記念碑的な論考がある（中谷1926、1928）。それ以降、戦後から高度経済成長による大規模開発に伴う資料的増加を背景として、編年的研究、系統的研究、遺跡における出土偏

差など、研究が精緻さを増した状況が、先学により多くまとめられている（我孫子2008、鈴木1997など）。ここでは、注口土器の欠損および残存状況などについて述べた研究を中心に概観する。

藤村東男は、東北地域晩期、青森県是川遺跡の注口土器について、注口部着脱率という統計的結果を提示した。注口部には口縁が肩部に直接連なるA型と、口縁が外反し二段にくびれた頸部を経て肩部に続くB型があるとして、それぞれ胴部への接合方法が異なるものの、注口部の形態および注口土器自体の形態に関わらず、注口部着脱率は25%前後でほぼ一定しているとした（藤村1972：198頁）。

1990年代末になって、この視点の言及に鈴木克彦の研究がある。鈴木は注口土器について総合的な研究を行っており、特に「注口土器の用途」で研究姿勢などについて述べた（鈴木1999）。鈴木は、注口土器の製作目的・使用目的・廃棄目的など考古学的検討を行なうためにも、発掘調査時の出土状況にも注目すべきと、実証的な研究の必要性を論じた。遺物自体の観察では、底部の擦れ痕や、剥離した注口部の補修の仕方のほか、製作上の弱点ではない部分の損壊など意図的な破壊をしているような事例の存在を指摘した（同：57頁）。用途としては墓に関わる出土が多いことから、慶弔時の儀礼に使うことを念頭に作られた器だとした。

西田泰民は西日本域の注口土器について、東



図1 今朝平遺跡の位置
(国土地理院刊行 2万5千分の一地形図「足助」より)

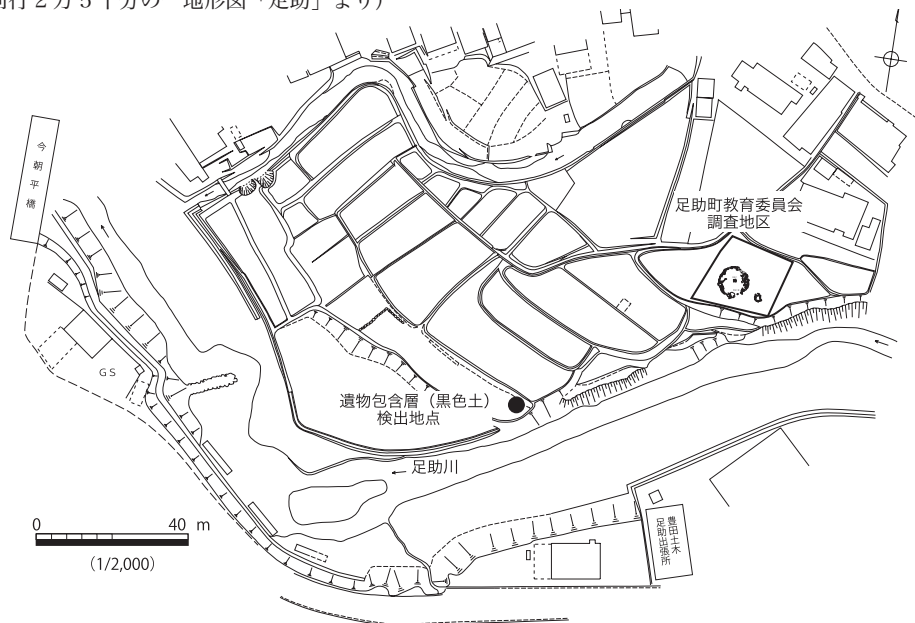
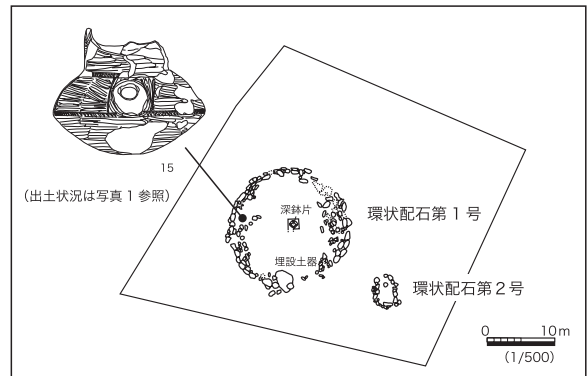


図2 今朝平遺跡調査地区・遺構配置図

日本域からの流入による西日本域での様相という視点から述べた。その中で、関東以北においては、加曾利B式期以降、注口部分下に突起物が付き男性器と見立てたことを具体的に認められるもので、東日本では注口部が特別視されたことを簡潔に述べている（西田 2010：226頁）。これまで遺跡出土の注口土器の数量を論じる際にも、どの部位なのか、あるいは完形なのかなどの議論はあまり見られないようである。注口部の特別視という言葉による西田の記述は、遺跡からの出土様相を端的に示す言葉として重要である。

祭祀や葬送儀礼などに用いられることが想定されている注口土器であるが、注口土器に対す

るヒトの行為の復元という点において、まだ説明すべき問題が多いといえる。

今朝平遺跡について

今朝平遺跡は、豊田市足助町久井戸に在り、足助川と久井戸川が合流する地点に形成された舌状の河岸段丘上に立地して、標高は約140mである（図1）。報告によると（天野・鈴木茂・鈴木昭 1979）、もともと水田であったが愛知県足助保健所の建設予定地となったため、昭和53・54年（1978・79）造成による削ぎ取り工事部分（約450㎡）を対象にして、足助町教育委員会による発掘調査が行われた（図2）。

調査では、環状配石と報告された礫を配した遺構が2基検出され、いずれも縄文後期加曽利BII式期としている。出土遺物は、土器（後期中葉～晩期）・土製品（土偶・動物形土製品・耳飾り）・石器（石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・石錘・凹石・石皿）・石製品（石棒石剣類・大型石棒・玉類）が出土したとある。また、檜王式期の土器棺墓も2基検出された。

出土土器の総体については、正式な報告書が出ていないため、確実なことを述べることはできない。しかし、概報によると、後期中葉の八王子式～西北出式を中心として、晩期前半の半截竹管文系条痕土器や突帯文土器・条痕文土器の出土がある。このうち注口土器は八王子式～西北出式、およびこれに併行する時期を中心とした、縄文時代後期中葉に概ね属するものと考えられる。

注口土器の分析

今回、今朝平遺跡出土注口土器のうち、注口部およびその付近の破片について、欠損状況を検討した。検討資料は94点で、調査で出土した注口部のすべてである。注口部とその付近について部位を記号化して、その範囲を示す形で残存範囲を示す方法をとった。主な欠損傾向を示すものを図3・4に、分類を図5に、統計的結果を表1に示す。

まず、残存部分について、注口部のみの資料が67点(71.27%)、胴部へ続く資料が26点(27.65%)と、注口部のみの資料が圧倒的に多い。その中でも最も多いのが、注口部全体が残存しているP-Cであり、39点、全体の41.49%を占める(図3・4の5・6・9・11・12・14など)。統計的には胴部へと続く資料に入れているP-Dにも胴部片の残存が極めて極若干のものがある。この中の一部も、図3・4の2・3・13のように実質的にはP-Cと同質であったとすれば、P-Cの比率はさらに高くなると考えられる。また、Cの部分の欠損には、注口部下端に貼付けられている凸部分も付着しているものも複数確認することができ(同図の5・10)、破損は、貼付けと根元部分で生じる頻度

も高かったものと考えられる。このC部分の欠損に対応する胴部側の状況を示しているものが図4の15である。この資料は、注口部のほか口縁部側にも欠失が認められるがこれは後世の欠損と考えられ、注口部以外のほぼ完形資料といえる。特に、注口部周囲の胴部側には欠損がなく注口部のみ削ぎ落ちたような欠失状況が特徴といえ、対応する注口側としては、型式・文様は不問として欠損状況のみからいえば、図3の11・12などの状態のものとして推定できる。

図3の7はP-B、図4の16・17はB-Qとしたものである。これらは今回の資料の中では極めて資料数が少ないものとなっている。

遺跡からの出土状況は、配石遺構とされた遺構上面の遺物包含層からの出土であり、現状では、出土遺物の集中などを検討する方法は見当たらない。しかし、図4の15は正位で出土しており、遺跡内に置かれた状態を示すものとして注目できる(写真1)。

なお、注口部の胴部側欠損の要因は、破断面の状況からでは分からない。素材が土製であり、破壊などの力学的効果などの検討を確実に行うことができない。このため、本稿では、形態が類似する、他資料の比較・検討を試みる次第である。

対比資料の提示

歴史的脈絡の関係が認められず、かつ形態的に類似している資料に、中世古瀬戸窯で生産された水注がある。本稿では、瀬戸市塚原1号窯跡出土資料を用いて、水注の分析を行いたい。

塚原1号窯跡は、瀬戸市若宮町1丁目に所在する、中世の窯跡である。平成18年(2006)にわたって、愛知県埋蔵文化財センターによって窯跡全体の調査が行われた。調査面積は970㎡で、窯体2基・作業施設などの遺構群・灰原などが調査された。本窯の製品としては、無釉陶器の山茶碗類と施釉陶器の古瀬戸類があり、山茶碗類は第7型式、古瀬戸類は古瀬戸前期第III～IV段階に属するのと考えられる。ここでは、古瀬戸類のうち、水注と呼ばれる、注口部のついた器種を検討対象とした。これらの資料

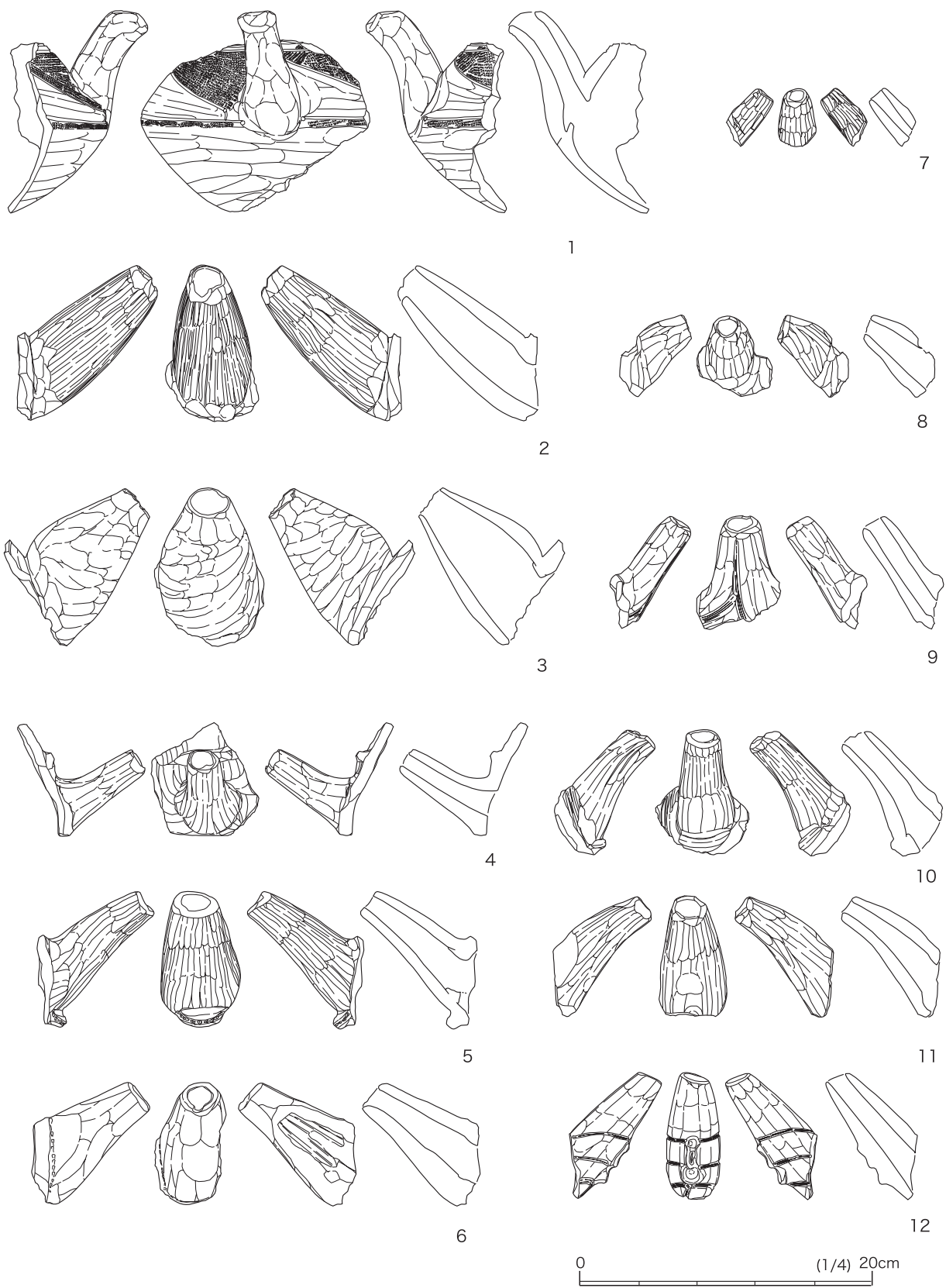


图3 今朝平遺跡出土注口土器 1

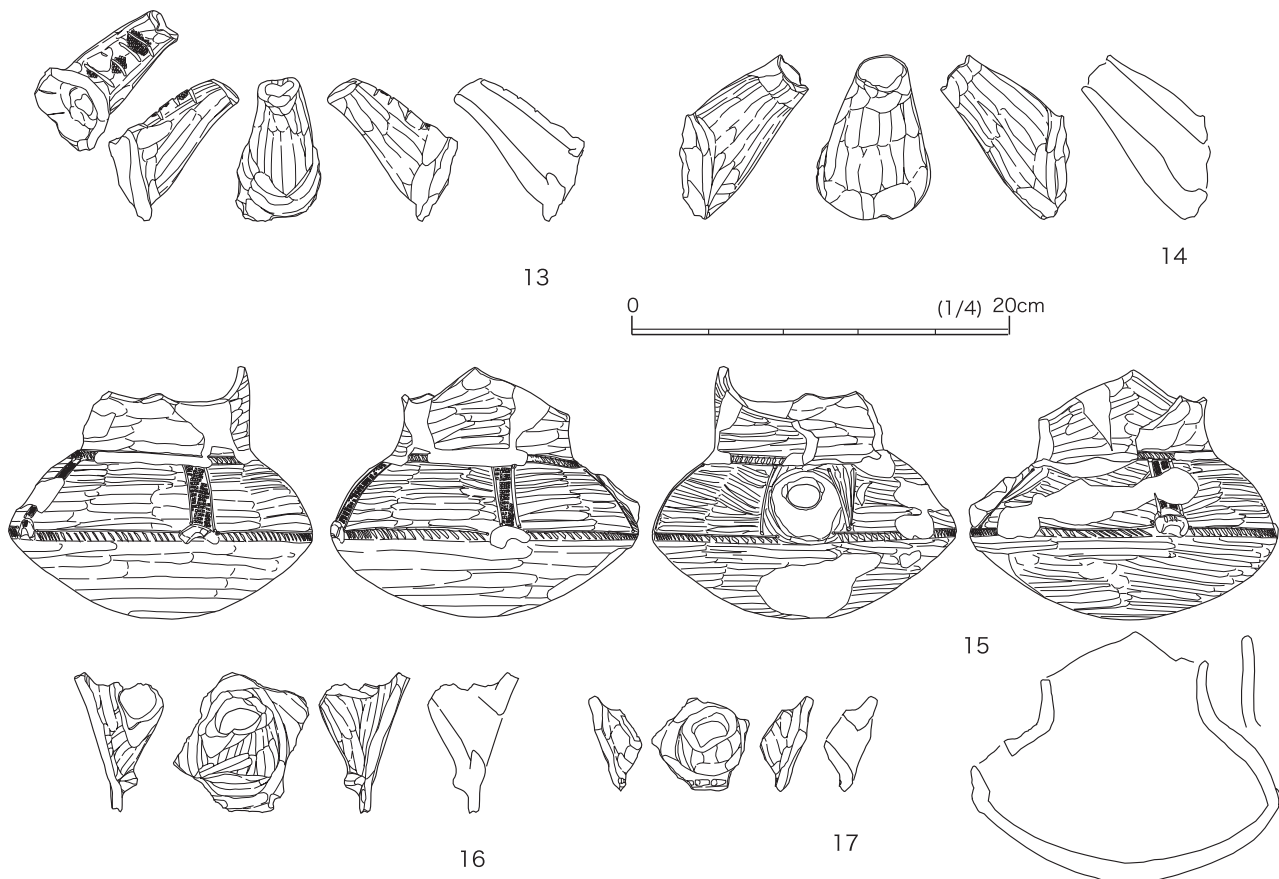


図4 今朝平遺跡出土注口土器 2

表1 今朝平遺跡注口土器注口部付近欠損傾向一覽

注口部残存状況	点数	全体比率 (%)
全周 P-D	16	17.02
全周 P-Q	1	1.06
全周 B-Q	2	2.13
全周 C-Q	1	1.06
全周 D-Q	1	1.06
全周 C-D	2	2.13
半欠 C-D	3	3.19
全周 P-A	0	0.00
全周 P-B	1	1.06
全周 P-C	39	41.49
全周 A-B	2	2.13
全周 B-C	3	3.19
全周 A-C	3	3.19
半欠 B-C	15	15.96
半欠 P-C	1	1.06
半欠 A-C	3	3.19
X	1	1.06
計	94	99.98

注口土器注口部欠損点名称

- A: 注口部先端部下
- B: 注口部中ほど
- C: 注口部根元
- D: 注口部+ごく若干の胴部
- P: 先端部分
- Q: 胴部側
- X: 分類不能

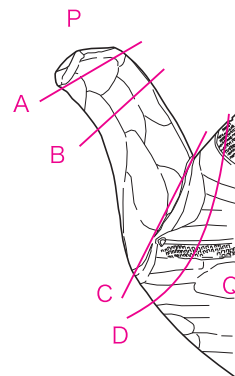


図5 今朝平遺跡出土注口土器欠損傾向分類図



写真1 注口土器出土状況(天野・鈴木ほか 1979より引用)



写真2 今朝平遺跡出土注口土器

は、作業場としての整地面や土坑内、斜面に廃棄された灰原からの出土である。

調査では水注は総計 447 点出土した (図 7)。これを上述した注口土器同様に、注口部とその付近についての部位を記号化して (図 6)、その範囲を示す形で残存状況を表現した (表 2)。第 1 に注目できる点としては、注口部側のみの残存資料が 94 点 (21.03%) に対して、胴部側まで含めた残存を示す資料が 335 点 (74.94%) と、圧倒的に後者が多い点である。今朝平遺跡出土注口土器の事例とはいわば全くの正反対の状況を示しているといえる*。第 2 に、主に胴部側につながる資料を観察すると、図 5 の 21 ~ 24 のように注口部の根元部分の盛り上がりが残存している資料 (C1-Q・C2-Q) が 214 点 (47, 87%) と、全資料の半数を占めるまでに存在していることである。これも今朝平出土注

*本来、生産遺跡では、両者は同数かそれに近い点数であることが想定される。この点数差は、窯業遺跡の遺跡形成過程を検討する上で、留意する点になるかもしれない。

口土器には認められない傾向であり、大きな相違点として取り上げることができる。

水注の欠損要因としては、1. 窯焼成段階のひずみなどによるもの、2. 窯焼成後の廃棄・二次的移動などによるものに分けられる。この両者を識別するために、破断面上の自然釉の降着の有無を識別し、別個に統計的処理を行なった。表 2 の記号 U・O がこれを示す。自然釉の降着が認められない O の C1-Q・C2-Q では合わせて 61.29% と、それ以外の欠損状況と比べてより比率が高くなり、この欠損状況がより常態化したものと考えてよいであろう。

若干の考察

上述したように、今朝平遺跡出土注口土器と、塚原一号窯跡出土古瀬戸水注の各注口部欠損状況は、両者に大きな違いが認められる。このことから、注口土器の使用・廃棄に関する考察を行ないたい。

表2 塚原1号窯跡古瀬戸類水注注口部欠損傾向一覽表

注口部残存状況	点数	全体比率 (%)	Uのみ点数	同比率 (%)	Oのみ点数	同比率 (%)
A-Q	24	5.37	10	5.18	14	5.65
B-Q	54	12.08	11	5.70	43	17.34
C1-Q	70	15.66	24	12.44	46	18.55
C2-Q	144	32.21	38	19.69	106	42.74
D-Q	9	2.01	4	2.07	5	2.02
P-Q	34	7.61	26	13.47	8	3.23
P,A-B	26	5.82	21	10.88	5	2.02
P,A-C1	46	10.29	40	20.73	6	2.42
P,A-C2	6	1.34	5	2.59	1	0.40
P,A-D	5	1.12	4	2.07	1	0.40
P-A	10	2.24	7	3.63	3	1.21
P-D	1	0.22	0	0.00	1	0.40
S	12	2.68	3	1.55	9	3.63
X	6	1.34				
計	447	99.99	193 (447)	100.00	248 (477)	100.01

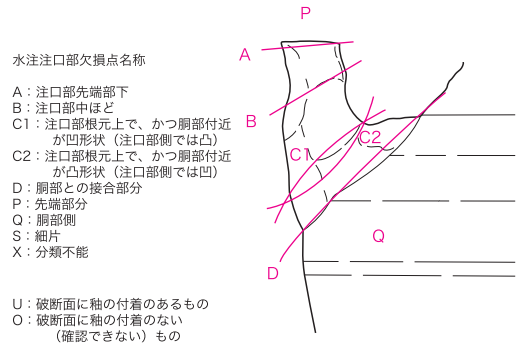


図6 塚原1号窯跡古瀬戸類水注欠損傾向分類図

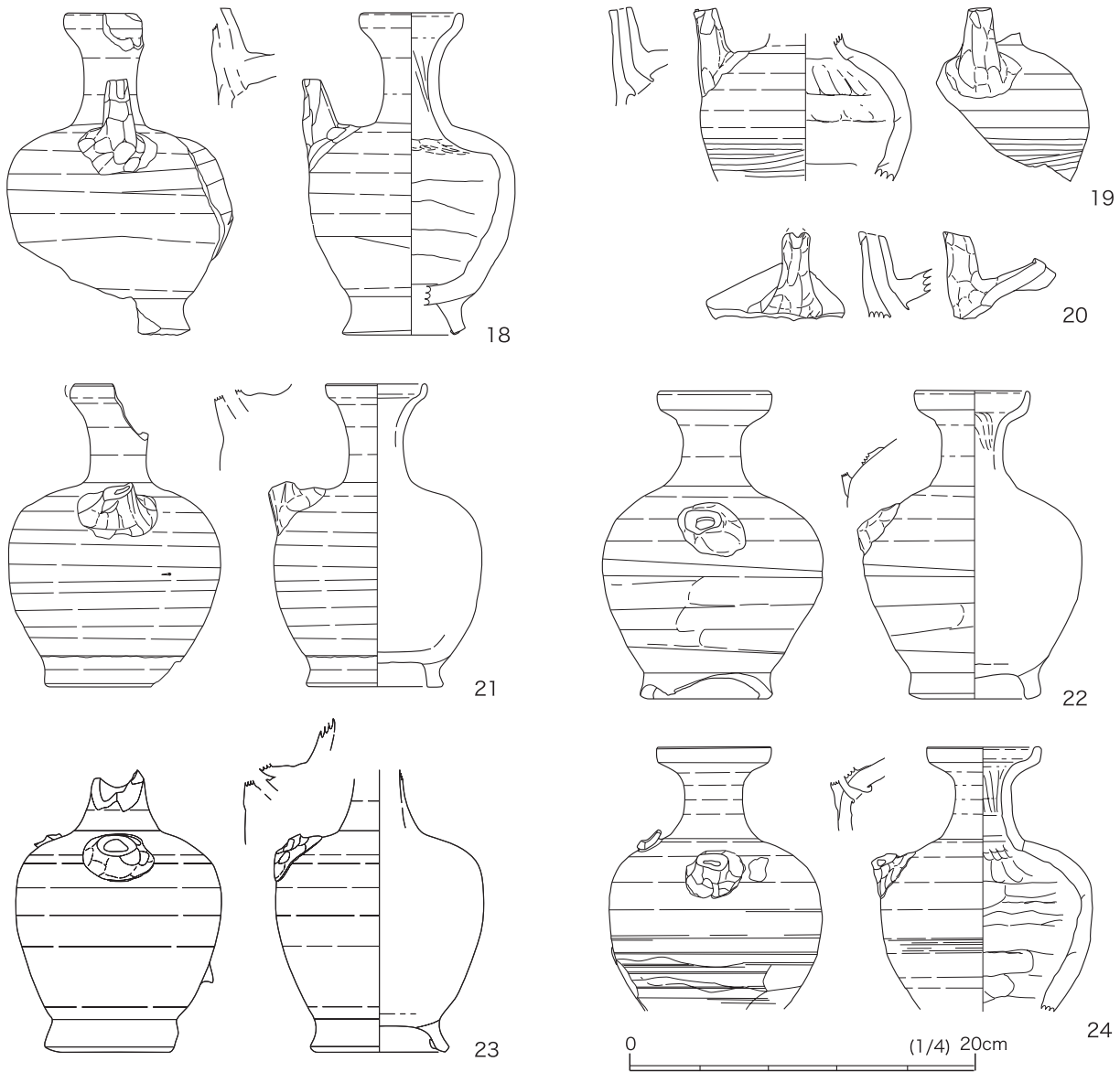


図7 塚原1号窯跡出土古瀬戸類水注

塚原一号窯跡の廃棄は、窯業生産に伴うもので、出土した資料は、当時の製品としては、失敗品など製品として流通しえなかったものである。特に灰原から出土した資料は、斜面廃棄されたものと考えられ、そこには廃棄行為以上の意図は認められないと考えてよいであろう。特に、破断面に自然釉の降着が認められない一群は、このような廃棄行為による欠損状況をよく示しているものと位置づけられる。注口部残存状況 C1-Q・C2-Q がこの状況を反映したものととして良いであろう。

一方、今朝平遺跡出土の注口土器は、1. 注口部残存状況において P-C が半数近くを占めること、2. この P-C の中で注口部下に貼付けられている凸部分も注口部に付着した状態が散見されること、に注目したい。また、注口土器に関して言えば注口部先端部の欠失資料が少ないこと (P-A・P-B など) が挙げられる。図 3 の 6 は、欠損の力が注口部根元により集中した状況を如実に示しており、偶発的な欠損で生じる頻度はより低いのではないのかと考えるのである。さらに塚原一号窯跡の水注同様に、偶発的な欠損が多いならば、P-A・P-B (図 3 の 7) や B-Q (図 4 の 16・17) を示す事例がより多くなることが想定できる。以上のことから、今朝平遺跡出土注口土器は、注口部根元に向って欠損する力が重点的に掛かった、換言すれば当時のヒトの活動の中で、注口部を根元から切断する行為がしばしば存在したことを裏付けられるといえよう。根元から除去された注口部はそれのみが遺跡内に廃棄 (埋納) され、一方で注口部が除去された側の胴部も特殊な遺構内に埋納されたと考えられる。これは、注口土

器の持つ祭祀行為の一場面なのかもしれない。従って、注口土器については、祭祀行為によって、注口部、注口部が除去された胴部、注口部のついたママの完品、胴部片の、大きく四群に分類できると考えられる。このうち胴部片を除いた前三者は、当時の祭祀行為の結果としてこの状況で今朝平遺跡では共存している可能性がある。

まとめと今後の課題

今回は、注口土器は今朝平遺跡を古瀬戸水注は塚原一号窯跡という限られた資料からの比較・検討である。両者は歴史的脈絡につながりがなく、比較・検討による相違点が、当時のヒトの活動様相の差につながると考えられる。水注は陶器で注口土器は土器であるから、両者の硬度は異なるというのは承知しているものの、注口土器の注口部の方が、水注の注口部に比べ、保存状況が良い、ということは、この素材上の問題をまずは保留にできる事情を満たしているといえる。

今朝平遺跡に関わらず、縄文時代後期の注口土器では、他の土器片は接合しない注口部のみが単独で出土する事例がしばしば認められる (川添編 2009 など多数)。除去された注口部の性格・位置づけは今後の課題であり、祭祀行為の復元はもちろん、遺跡間関係を検討する上での重要な糸口になると考えられよう。

謝辞

本稿を草するにあたり、新修豊田市史編纂室の鈴木昭彦氏には、多大なるご協力とご教示を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

資料の所在

1～17：豊田市教育委員会、18～24：愛知県教育委員会岩瀬彰利編、1995『大西貝塚』豊橋市教育委員会。

参考文献

- 我孫子昭二, 2008『注口土器』『総覧 縄文土器』1043～1048頁。東京 株式会社アム・プロモーション。
 鈴木克彦, 1997『注口土器の研究』『研究紀要』2.1～38頁。青森県埋蔵文化財調査センター。
 鈴木克彦, 1999『注口土器の用途』『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』56～60頁。日本考古学協会。
 鈴木克彦, 2007『注口土器の集成研究』東京 雄山閣。
 須原 拓, 2003『住居址内出土の注口土器—出土状態からみた注口土器の機能・用途について—』『史叢』68.21～44頁。日本大学史学会。
 中谷治宇二郎, 1926『注口土器の分布に就て』『人類学雑誌』41.5.240～250頁。東京人類学会。
 中谷治宇二郎, 1928『注口土器ノ分布ト其ノ地理的分布』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告4。
 西田泰民, 2006『注口土器の用途』『考古学ジャーナル』550.6～9頁。東京 ニューサイエンス社。
 西田泰民, 2010『注口土器』『西日本の縄文土器 後期』京都 真陽社。
 藤田東男, 1971『東北地方における晩期縄文時代の注口土器について』『史学』44.2.53～72頁。三田史学会。

報告書など

- 川添和暁, 2009『大坪西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
 天野暢保・鈴木茂夫・鈴木昭彦, 1979『今朝平遺跡概報』足助町教育委員会。

朝日遺跡から出土した 石鏃の刺さったシカ腰椎について

宮腰健司・山崎健*
大河内隆之**・原田幹***

* 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター 環境考古学研究室
** 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター 年代学研究室
*** 愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室

本文で取り上げる石鏃の刺さったシカ腰椎は、朝日遺跡の昭和 60 年度調査において出土した遺物であるが、未報告になっていたものである。これまでの X 線撮影では、石鏃の形態や陥入状況が不明であったが、奈良文化財研究所の X 線 CT 撮影によって、それらが明らかになったので報告する。この腰椎は、朝日遺跡の谷 A の左岸（南岸）の貝層内より出土しており、時期は弥生時代中期前半に比定される。部位はニホンジカの第 6 腰椎にあたり、立位姿勢であれば右斜め前から水平に矢が打ち込まれたと推測され、骨増殖も認められた。石鏃はチャート製の小型の五角形を呈する有茎鏃で、3 箇所に衝撃剥離痕がみられる。これらのことから、具体的な狩猟の様子や石鏃の刺突時の状況が判り、骨増殖が認められることにより、本資料の石鏃が弥生時代に行われていたとされる儀礼的な狩猟で使用されたものではなく、狩猟に用いられたものであると推測された。

はじめに

今回紹介する朝日遺跡出土の石鏃の刺さったシカ腰椎は、昭和 60 年度に財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が行った名古屋環状 2 号線建設に伴う発掘調査において出土したものである。この調査の報告として、『朝日遺跡 I』～『朝日遺跡 V』の 5 冊の報告書が、1991 年～1994 年にかけて愛知県埋蔵文化財センターより刊行されているが、その中では本資料は掲載されていない。本文では改めてこの資料を報告し、弥生時代における狩猟の一端を示したいと思う。また従来の X 線写真・映像では明瞭ではなかった石鏃の形態等が、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所の X 線 CT 撮影によって明らかになったことが、本文の成果の大きな要因となっている。

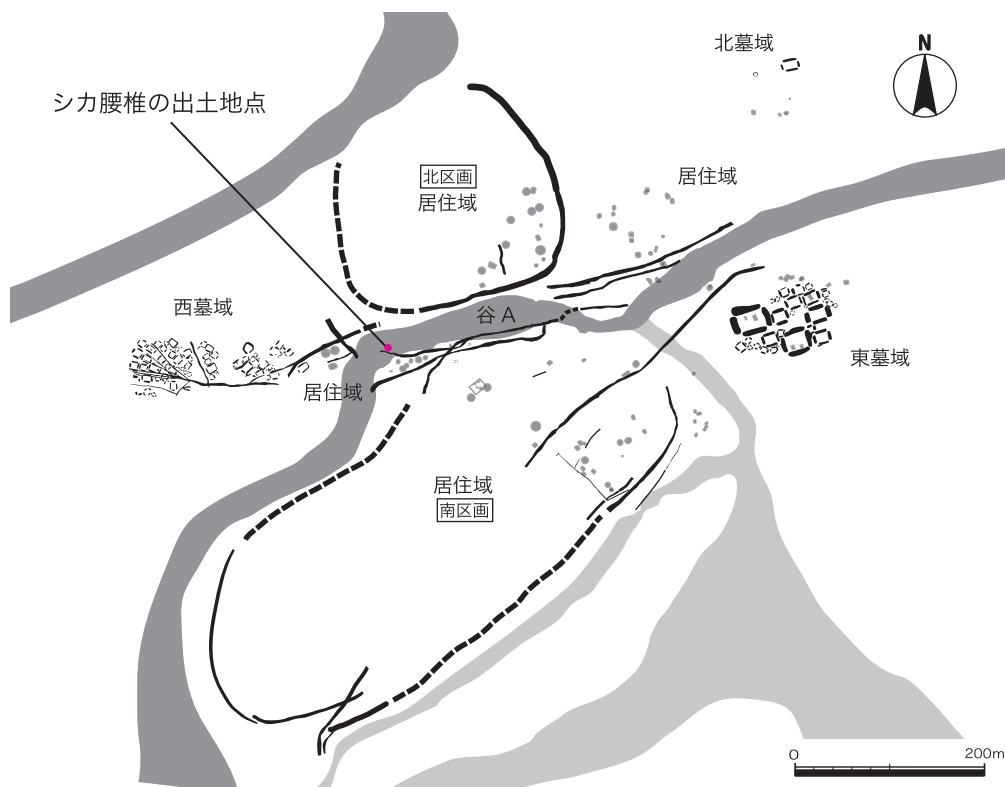
資料の概要

シカ腰椎の大きさは長径 5.8 cm、短径 4.8 cm、厚さ 3.7 cm、重さ 29.3g を測る（図 2・写真 1・2）。昭和 60 年度に行われた A～G 調査区のうち、60E 区で出土しており*、出土データとしては、出土地点が VIIG151 グリッド、層位が検出 IV 貝層、出土日が 851126（1985 年 11 月 26 日）という項目が確認される。出土地点は朝日遺跡を北東から南西に横切る谷

A の中にあたり、谷が北東から南へ向きを変える場所の左岸（南岸）になる（図 1）。シカ腰椎は谷に廃棄されたハマグリ・カキを主体とする貝層内より出土しており、調査日誌などによると VIIG151 検出 IV 貝層は、中部貝層にあたると思われる、およそ標高 0～0.5 m の高さで出土したと推定される。この地点の貝層の様相は、東に隣接する 60D 区における報告書での記述を引用すると「・・・谷 A 内部でも貝層が検出された。そのうち、調査区西部では砂層と互層をなす砂を含む破碎貝層の分布が顕著であり、しかもそれらは非常に薄い層の累重であって、規則的な強弱のある水流によって形成された二次堆積であることが窺われた。それらは、SDIIa 構築に前後しているので、II 期から IIIa 期にかけて形成されたことがわかる。こうした堆積状態は下流部にあたる 60E 区でも確認されているが、・・・」** とされ、水流によって形成された薄い層で、

*1986 年に刊行された概要報告 丹羽博 1986『朝日遺跡』『年報 昭和 60 年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター P5 では、60A 区の貝層中から「石鏃が刺さったシカの腰椎」が出土したとの記述がある。朝日遺跡では他に石鏃が刺さったシカ骨は出土しておらず、このシカの腰椎が本報告資料と同一のものの可能性があると思われたので、今回改めて調査日誌・図面等を調べたが、確実に 60A 区で出土しているという記録は確認できなかった。同様に 60E 区から出土したという記録も残されていないが、1988 年 11 月 9 日に作成された実測図にはすでに本文で取り上げたデータが記述されており、遺物に付されたカードに基づいたデータを出土地点として採用した。

** 石黒立人他『朝日遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集 P48



※遺構配置図は朝日遺跡II期

図1 石鏃の刺さったシカ腰椎出土地点

幾重にも重なっていることが判る。また貝層はII期からIIIa期、土器編年の朝日式期から貝田町式期前半に形成されており、貝層内から出土した本資料も同じ弥生時代中期前半に比定できると思われる。(宮腰健司)

X線CT撮影による石鏃の観察

獣骨に陥入した石鏃の形態を非破壊的に解析することを目的として、マイクロフォーカスCT装置を用いてX線CT撮影を行ない、陥入した石鏃の3次元立体画像を構築した。撮影にあたっては、奈良文化財研究所と島津製作所株式会社が共同開発したマイクロフォーカスX線CT装置(SMX-100CT-D)を使用した(写真3)。撮影条件は、管電圧85kV・管電流117 μ Aの20分間照射である。撮影した画像データを基に、オフセットのフルスキャン方式で装置の受像素子の解像度を有効に利用し、コーンビーム方式による三次元再構成を行なった。その結果、獣骨に陥入した石鏃の形態や法量などを把握することが

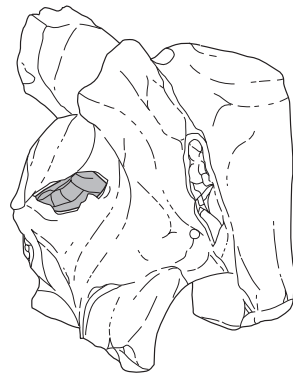
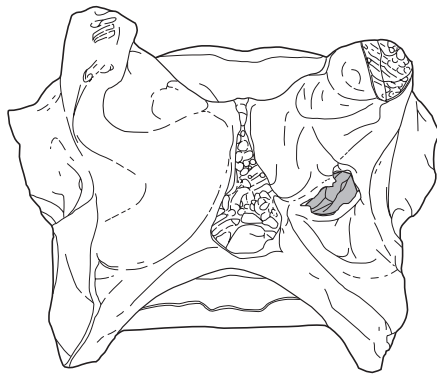
できた(写真4、図3)。(大河内隆之・山崎健)

獣骨について

同定 石鏃の刺さった獣骨はニホンジカ(*Cervus nippon*)の腰椎で、椎体遠心側の椎窩が扁平であることから、最も尾側の腰椎である第6腰椎と考えられる(図4)。椎頭(近心骨端盤)と椎窩(遠心骨端盤)は癒合が完了している。棘突起と左右の横突起、右側の乳関節突起が破損していた。計測値は、椎頭最大幅(BFcr)が30.21mm、椎頭最大高(HFcr)が15.98mm、椎体前後径(PL)が33.91mmである*。

骨増殖 石鏃の陥入部を肉眼観察すると、治癒過程で見られる骨増殖による棘状の突起が形成されている。またCT撮影による観察により、石鏃を覆うように骨増殖が進行していることが明らかとなった。石鏃の先端は椎弓の中央部まで刺さっていたが、脊髄が収ま

*解剖学用語は加藤・山内(1995)、計測部位はDriesch(1976)に従った。



※アミ部分が石鏃

図2 石鏃の刺さったシカ腰椎実測図



写真1 石鏃の刺さったシカ腰椎*



写真2 石鏃の刺さったシカ腰椎と現世標本*

*撮影：奈良文化財研究所 中村一郎

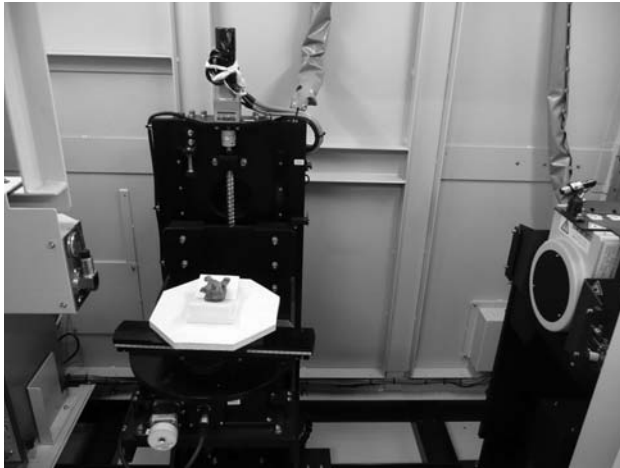


写真3 マイクロフォーカスX線CT装置による撮影風景

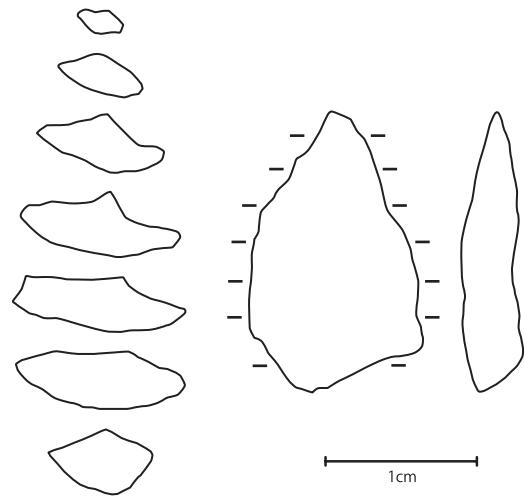
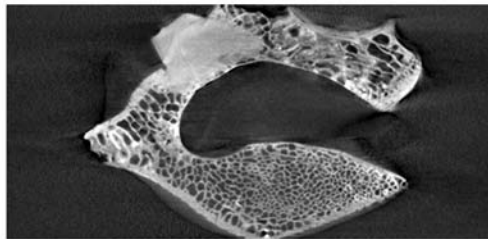
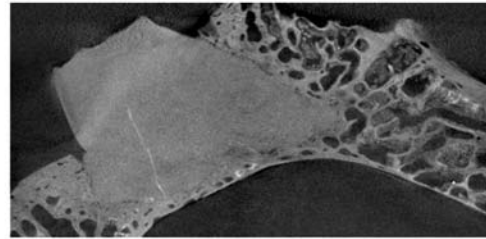


図3 石鏃の平面・断面形 (CTから復元したもの)



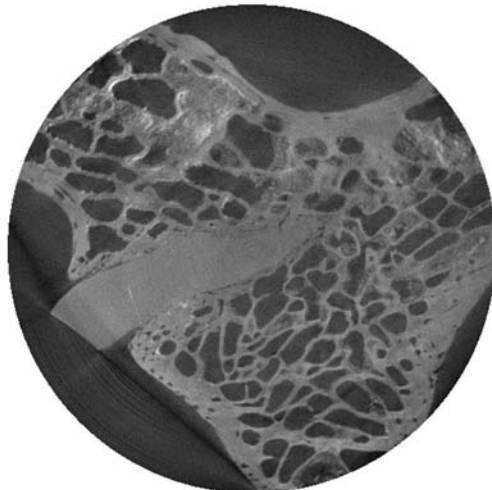
横断面



横断面 (拡大)



背断面



背断面 (拡大)

写真4 X線CT装置による撮影画像

る椎孔には到達していなかった。骨増殖が認められる点と石鏃が脊髄まで損傷を与えていない点から、この陥入した石鏃では致命的な傷とならず、シカはしばらくの間生きていたものと判断できる。

入射角度 石鏃は、椎弓の右側に刺さっていた。第6腰椎の正中軸（頭部から尾部へと至る体軸）に対して右前約60°の入射角度で、水平方向は椎弓の真横（約90°）から石鏃が打ち込まれている（図5）。すなわち、ニホンジカが立位姿勢であれば、右斜め前の方向から、ほぼ水平に矢が発射されたものと推測される。

肉眼による観察では、石鏃がやや上方から入射したように見える。しかし、CT撮影による観察により、石鏃を覆うように骨増殖が進行していることが判明し、より正確な入射角度を推定することができた。

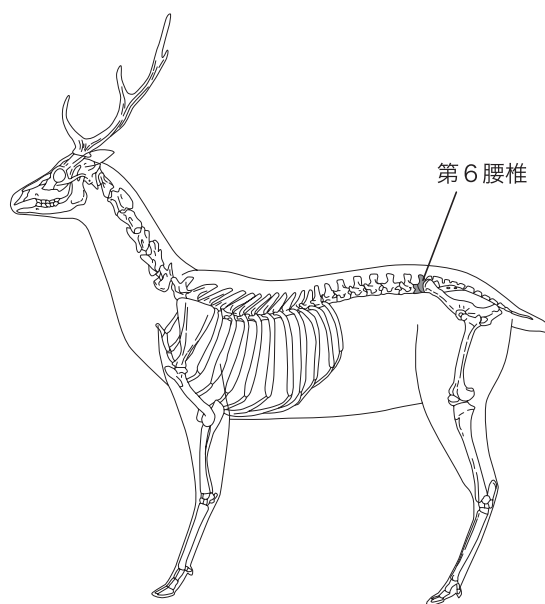


図4 石鏃の刺さった骨格部位

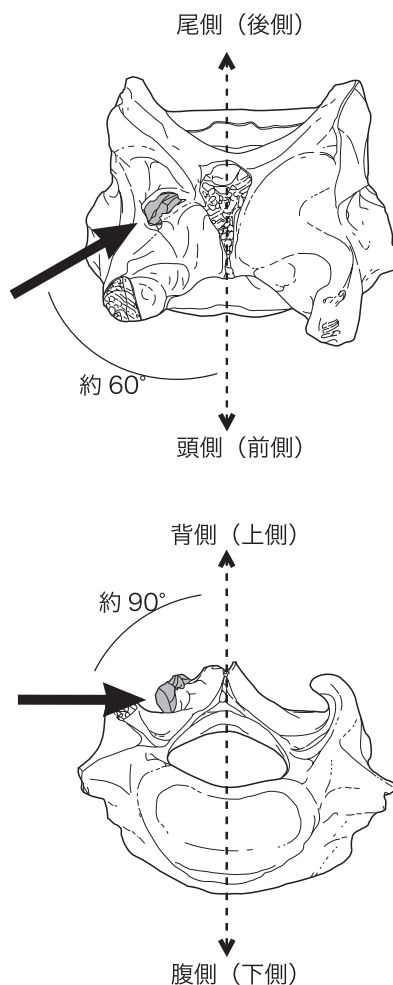
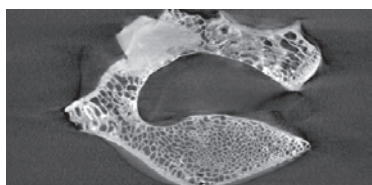


図5 石鏃の入射角度

石鏃について

伊勢湾周辺地域の石鏃は身が五角形を呈する有茎鏃が多く、なかでも「朝日型長身鏃」(中村 1996) と呼ばれる長大で精緻な加工が施された石鏃が有名である。しかし、実際には小型・中型の石鏃も含め、大きさ・形態ともバラエティーに富んでいる。以下、今回骨に刺さった状態で出土した石鏃について、当地域における石鏃のあり方と対比させながらみていきたい。

石材 石材は、青灰色を呈するチャートである。朝日遺跡の石鏃は、下呂石が最も多数を占め、次いでチャートとサヌカイトが多い。濃尾平野全般では、下呂石、チャート、サヌカイトの順で、朝日遺跡は周辺の他の遺跡に比べサヌカイトの占める率が若干高いのが特徴である(原田 2003)。一方、尾張地域の丘陵地から山間部、西三河に位置する遺跡では、チャートが主要な石材として用いられている。

形態 CT画像では身中程に段が確認できることから、伊勢湾地域特有の五角形鏃だと判断できる。身はそれほど長くなく、やや幅広の形態である。側縁の一部と基部は欠損しているが、外部から観察可能な部分には押圧剥離による加工が観察され、逆刺部から茎部へのラインがわずかに残っている。CT画像から判断すると、図6のように有茎鏃として復元できる。断面形をみると、図の上面は中心の稜が明瞭で、下面の基部側に近い部分はなめらかな局面を描いている。これは石鏃の素材剥片の形状を反映したものと推定され、下面側が主要剥離面である可能性が考えられる。

大きさ 現存部分で、長さ 18.5 mm・幅 11.4 mm、厚さ 4.3 mmを測る。欠損部を復元すると、長さ 21 mm、幅 12 mm前後の大きさが推定される。図7は朝日遺跡で出土した石鏃の長さ・幅をプロットした散布図、図8は有茎鏃の形態を大きさごとに比較した図である。長さは 2 cm弱から 7 cmぐらいまで、幅は 1 cm前後から 2.5 cmぐらいまでの間に間断なく分布しているが、本資料はこのなかでも最も小型のサイズに位置づけられる。

破損(使用痕) 石鏃や尖頭器の刺突実験では、刺突時の衝撃で先端、基部、逆刺部などに衝撃剥離痕が生じることが確認されている(御堂島 1991)。本資料では、3箇所(箇所)に刺突時またはその後に生じたと思われる破損が認められた。①CT画像では、陥入した石鏃の先端に暗いラインが写されている(写真6)。これは折れや剥離などの破損の可能性があり、そうであれば、刺突時に生じた衝撃剥離痕が内部にそのまま保存されていることになる。②逆刺部の破損は先端側から生じており、彫器状剥離(槌状剥離)とみられる(写真5-1・3)。これも刺突時に生じた衝撃剥離痕の可能性はある。③基部は折れによる欠損とみられる(写真5-1・4)。これは、刺突時または矢が抜け落ちた際に生じた破損と考えられる。

以上シカの腰椎に刺さった石鏃についての観察所見を述べてきた。石鏃の石材や大きさからみると、この石鏃は必ずしも朝日遺跡のなかで主体的なものとはいえない。他にも大きな石鏃が作られているなかで、実際に狩猟に使われたと特定できた石鏃は最も小さなサイズであった。弥生時代の石鏃の大型化は、人に対する戦闘用武器の発達と考えられてきたが、このことを逆説的に支持する資料となるかもしれない。また、この石鏃には複数の破損箇所があり、刺突時の状況と使用痕を関連づけられる貴重な情報を有した資料である。(原田幹)

考察

朝日遺跡ではイノシシ、ニホンジカ、イヌの3種以外の哺乳類がほとんど出土しておらず、イノシシとニホンジカが狩猟対象獣として重要であった。(西本ほか 1992、新美 2000、山崎・織田 2007a、b)。とくにシカの角や骨は骨角器の素材として多用されており、食料資源としてだけではなく、前頭骨のついた角が搬入されるほど道具素材としても重要であったと考えられる(山崎 2007)。

そこで獣骨に刺さった石鏃から当時の狩猟を検討してみたい。まず、入射角度を検討すると、シカの下腹部に向かって、右斜め前方

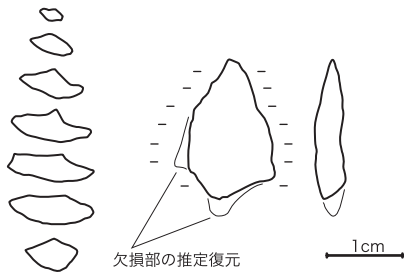
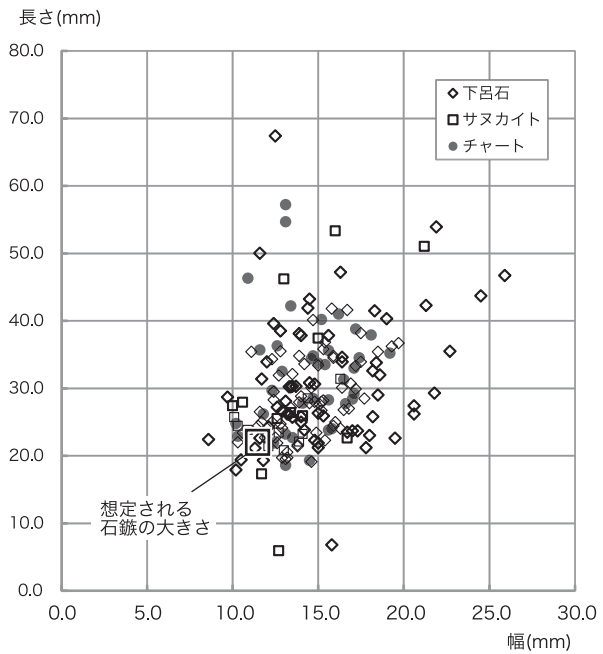


図6 CT画像から復元した石鏃の形態



愛知県埋蔵文化財センター 2007、2009 報告書掲載の一覧表から、下呂石・チャート・サヌカイトを石材とし、完存する石鏃を抽出して作成した。

図7 朝日遺跡出土石鏃の法量分布

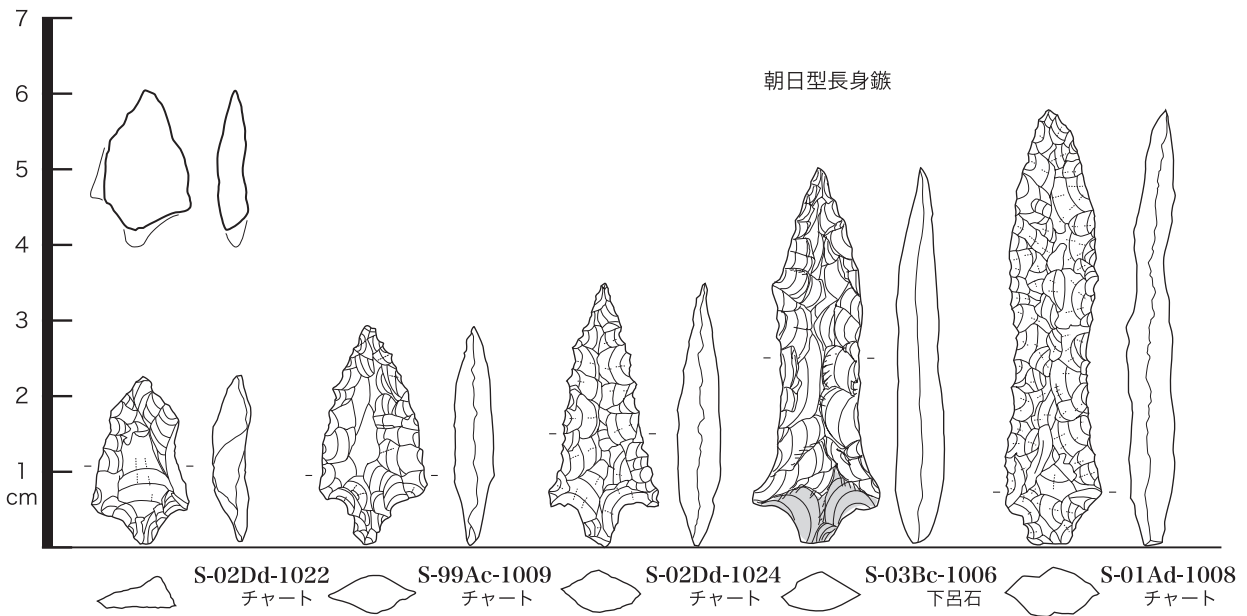
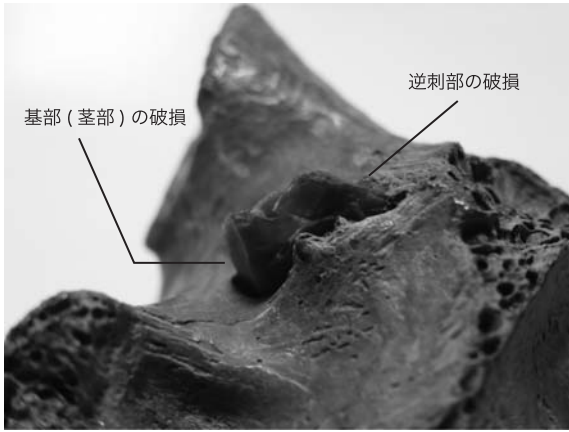
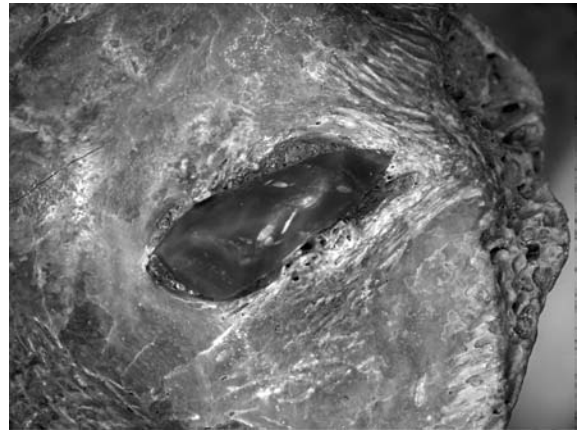


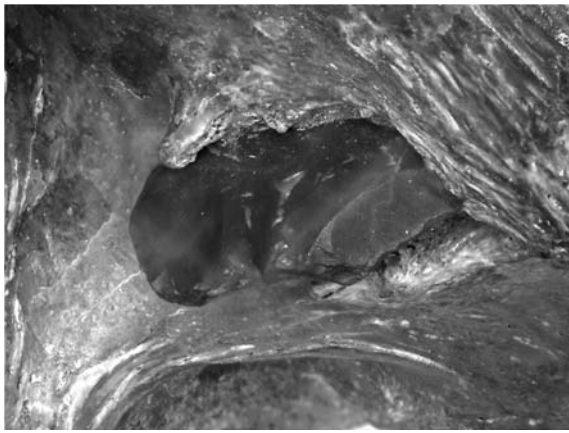
図8 朝日遺跡出土石鏃実測図



1. 石鎌拡大



2. 石鎌拡大



3. 逆刺部の破損



4. 基部(茎部)の破損

写真5 石鎌の拡大写真

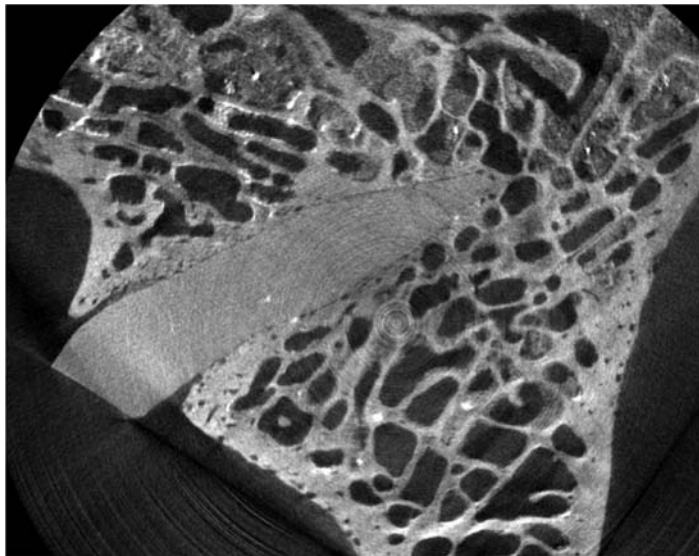


写真6 石鎌先端部の破損

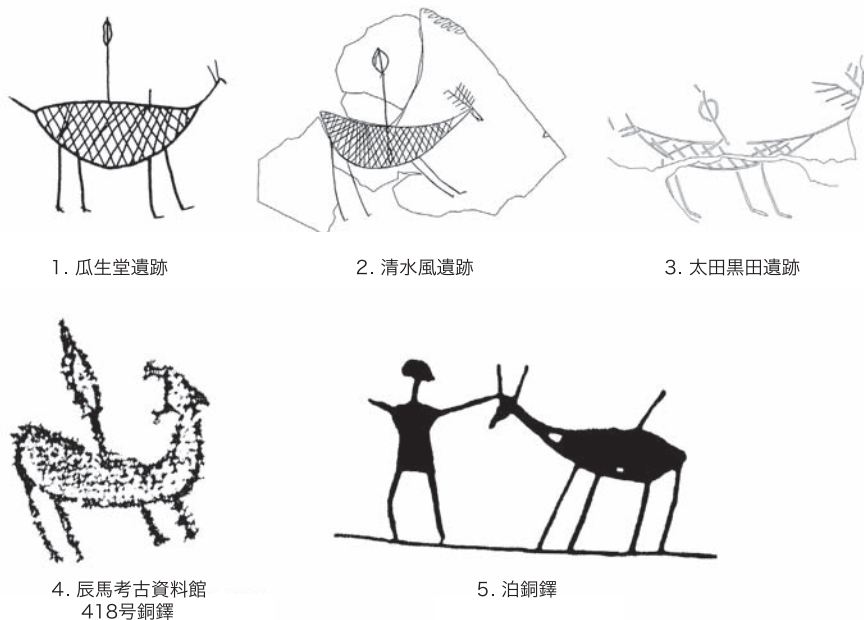
から、ほぼ水平に矢を射たものと推測される。さらに、骨増殖が認められることから、この矢では致命傷にならずに、射られた後も矢を受けたまま逃げ去ってしばらく生存したものと考えられる。そのため、この矢は毒矢ではなかったことも示唆される。そして、この骨自体が朝日遺跡から出土していることから、その後別の機会に狩猟されて、遺跡内に持ち込まれたものと推測される。

石鏃の刺さった獣骨の出土事例は、縄文時代に多く認められる(阿部 1985、金子 1984、1994、熊谷 1996、2001)。石鏃の刺さった部位を検討すると、頭骨、肩甲骨、肋骨の事例が多く、頭部や胸部に向けて弓矢を射撃したことが多かったものと推測されている(熊谷 1996、2001、岡村 1984)。弥生時代の事例は少ないものの、鳥取県青谷上寺地遺跡において石鏃の刺さったイノシシ肩甲骨が出土している(井上編 2007)。本文で報告する朝日遺跡の事例は、これまでの傾向とは異なって、シカの下腹部に向けて射撃されていた。弥生時代における狩猟の実態を示す貴重な資料で

あるといえよう。

また弥生時代になると、弥生土器や銅鐸にシカが描かれることが多くなる。その中に「矢負いのシカ」も描写され、矢がシカの体部に上から刺さった表現で描かれている(図9)。春成秀爾氏は、弥生時代になるとシカが神聖視されるようになり、シカが狩人に取り押さえられている描写も見られることから、描かれた矢負いのシカは実際の狩猟ではなく儀礼の場を示したものと解釈した(春成 1991、1992)。今回の分析資料は、骨増殖が認められるため、このシカは矢を受けたまま逃げ去り、その後別の機会に狩猟されたものと考えられた。したがって、射られた石鏃は、儀礼に用いられたものではなく、狩猟に用いられたものと推測することができる。

この石鏃は、チャート製の五角形鏃であり、複数の剥離痕跡や欠損が認められた。こうした破損は矢が刺さった衝撃による痕跡と推定され、石鏃の使用痕という「考古学資料」とシカの狩猟という「人間行動」を対応させることができる重要な資料であるといえる。ま



※以下の文献の図に加筆修正した。

瓜生堂遺跡(瓜生堂遺跡調査会1972)、清水風遺跡(田原本町教育委員会1997)、太田黒田遺跡(大野・井馬2001)、辰馬考古資料館418号銅鐸(国立歴史民俗博物館1995)、泊銅鐸(国立歴史民俗博物館1995)。

図9 弥生土器や銅鐸に描かれた「矢負いのシカ」

た、石鏃の法量をみると、欠損部を復元したとしても長さが約 21 mm、幅が約 12 mm と推定された。これは朝日遺跡から出土した石鏃の中でも、最も小型のサイズである。弥生時代の石鏃は、狩猟具と武器の機能分化が起こったとされ、全長 3 cm もしくは重量 2 g 以上の石鏃は武器としての用途が想定されている（佐原 1964、松木 1989）。本事例のみでは、弥生時代から出土した石鏃における機能と法量の関

係性を結論づけることはできないが、本論で試みた方法により、石鏃の機能に関する解釈は、検証可能な議論になりうると考えられる。

弥生時代における石鏃研究は、時代観を反映して武器としての議論が中心である（山崎 2009）。本稿のような事例を蓄積させたいうで、弥生時代における狩猟活動や狩猟具を考察していく必要がある。（山崎健）

参考文献

- 阿部恵 1985 「石鏃のささる獣骨—宮城県田柄貝塚」『季刊考古学』11、8-9 頁
井上貴央編 2007 『青谷上寺地遺跡の動物たち』青谷上寺地遺跡パンフレット
瓜生堂遺跡調査会 1972 『瓜生堂遺跡資料編』
大野左千夫・井馬好英 2001 「太田黒田遺跡出土の弥生絵画土器」『紀伊考古学研究』4、95-102 頁
岡村道雄 1984 「鹿の肩甲骨にささったエイ尾棘製のヤジリ」『東北歴史資料館報』13、2 頁
金子浩昌 1984 『貝塚と獣骨の知識—人と動物とのかかわり—』考古学シリーズ 10、東京美術
金子浩昌 1994 「狩猟対象と技術」『生業』縄文文化の研究 2、78-102 頁
加藤嘉太郎・山内昭二 1995 『改訂 家畜比較解剖図説』、養賢堂
熊谷賢 1996 「三陸町宮野貝塚出土狩猟の痕を残すイノシシ頭骨について」『陸前高田市立博物館紀要』1、19-22 頁
熊谷賢 2001 「狩猟具の貫入した動物遺存体」『考古学ジャーナル』468、9-12 頁
国立歴史民俗博物館 1995 『銅鐸の美』毎日新聞社
財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集
財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2007 『朝日遺跡 VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集
財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 154 集
佐原真 1964 「石製武器の発達」『紫雲出』、131-145 頁
田原本町教育委員会 1997 『田原本町埋蔵文化財調査年報 6 1996 年度』
中村友博 1996 「朝日形長身鏃について」『ヒト・モノ・コトバの人類学—国分直一博士米寿記念論文集』557-569 頁
原田幹 2003 「弥生石器の石材選択と製作技術」『中部弥生時代研究会第 7 回例会発表要旨集 弥生石器の再検討—器種・製作技術・石材—』23-26 頁
春成秀爾 1991 「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集 II、442-481 頁
春成秀爾 1992 「鳥・鹿・人」『弥生の神々—祭りの源流を探る—』大阪府立弥生文化博物館図録 4、53-59 頁
西本豊弘・佐藤由・新美倫子 1992 「朝日遺跡の動物遺体」『朝日遺跡 II（自然科学編）』、207-212 頁
新美倫子 2000 「朝日遺跡出土の動物遺体」『朝日遺跡 VI—新資料館地点の調査—』、438-457 頁
松木武彦 1989 「弥生時代における石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』35-4、69-96 頁
御堂島正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第 92 号 79-97 頁。
山崎健 2007 「角のある鹿—愛知県朝日遺跡におけるニホンジカの資源利用—」『考古学論叢』、389-407 頁
山崎健 2009 「「政治」と「政治性」—弥生時代の狩猟研究を事例として—」『中部の弥生時代研究』、291-296 頁
山崎健・織田統一 2007a 「動物遺存体」『朝日遺跡 VII（第 2 分冊）』、264-291 頁
山崎健・織田統一 2007b 「朝日遺跡における動物資源利用」『朝日遺跡 VII（第 3 分冊）』、24-34 頁
Driesch, A. (1976) 『A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites』、Peabody Museum Bulletin 1.

愛知県一色青海遺跡における 昆虫化石を用いた古環境復元

● 奥野絵美

本研究では昆虫化石分析の結果をもとに、一色青海遺跡(愛知県稲沢市)における弥生時代中期の古環境について述べる。一色青海遺跡で弥生時代中期後葉の河道400NR、大溝200SD・600SDから試料を採取し、昆虫化石分析を行った。200SDから得られた合計135点の昆虫化石群集には、ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* やコガネムシ *Mimela splendens* など、食葉性のコガネムシ群を中心とした食植性昆虫が多く認められた。この結果から、一色青海遺跡とその周辺に広葉樹を中心とした木本類や、マメ科植物・ブドウなどの果樹からなる植生が広がっていたと推定できる。また、200SDから見つかったコガネムシのAMS¹⁴C年代測定を行ったところ、162calBC-2calADの値を示した。

研究の目的

愛知県埋蔵文化財センターの自然科学分析室では、遺跡とその周辺の古環境を復元すること目的に、当センターが発掘調査を行った遺跡を対象として1990年代から自然科学的手法による研究を積極的に行ってきた(鬼頭2009ほか)。遺跡における昆虫化石(遺体ともいう)の分析もその一環として継続的に行われており、先史～歴史時代に至る愛知県の古環境変遷の研究に大きな成果をあげている(森1996)。

遺跡における昆虫化石の研究は1979年に日浦(日浦1979)によって本格的に開始された。昆虫の生息場所は実に様々であり、池沼や河川などの水中や水面に棲むもの、林床や獣の糞・屍体などの地表面に棲むもの、森林や草原などの植物上に棲むものなど多岐にわたっている。食性についても、食植性から、食肉性・食糞性・食屍性・食菌性・雑食性など非常に多種多様である。よって遺跡から昆虫の化石が見つければ、それらの生態学的な特徴に基づいて遺跡の古環境を非常に詳細なレベルで復元することが可能である。

弥生時代の集落遺跡については、人為的な活動によって高度に汚染された環境下にあったことが明らかになっている(森1992ほか)。また近年では、新たに追加された研究結果から、弥生集落の廃棄形態についての提言も行うなど、弥生時代の居住環境を詳細に解明するため

の新たな試みも行ってきた(奥野・森2009)(奥野2010)。そこで今回の研究では、濃尾平野南西部の拠点的な遺跡だと考えられている一色青海遺跡を対象として、昆虫化石分析および昆虫化石のAMS¹⁴C年代測定を行う。その結果得られた一色青海遺跡とその周辺の古環境について報告する。

分析試料および分析方法

(1) 調査地点の概要

一色青海遺跡(愛知県稲沢市)は愛知県西部、濃尾平野の南西に位置し(図1)、木曾川の旧河道である三宅川と日光川に挟まれた沖積微高地上に立地する。1991年から愛知県埋蔵文化財センターによって行われた発掘調査の結果、一色青海遺跡の所属時期は弥生時代と鎌倉～江戸時代の2時期であることが解明されている(愛知県埋蔵文化財センター1998)。弥生時代の遺構については弥生中期後葉に属するもの限られており、それ以前や以後は全く人間の居住した形跡がないことが明らかになっている(樋



図1 一色青海遺跡の位置

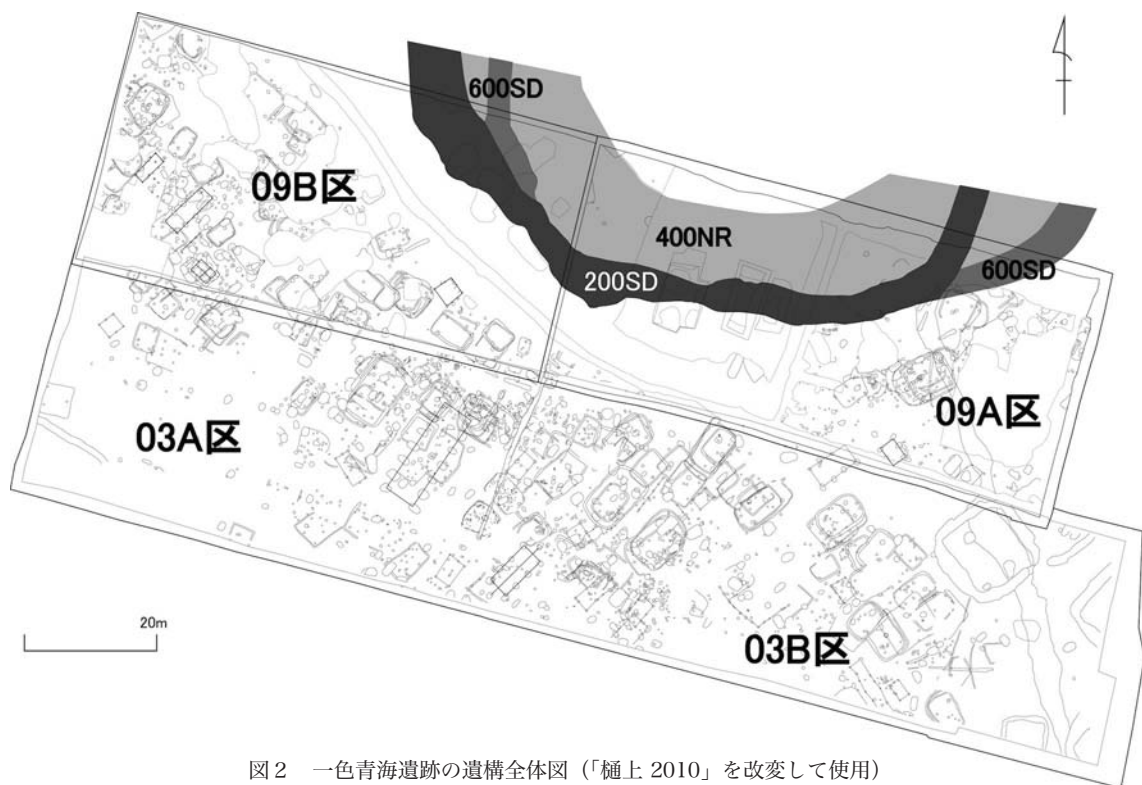


図2 一色青海遺跡の遺構全体図（「樋上 2010」を改変して使用）

上 2010b)。一色青海遺跡は微高地上に立地しており、おおむね東に墓域・西に居住域が広がる構造となっている。

特に 2008 年度の発掘調査では、100 棟以上の建物遺構の他に東日本最大級の掘立柱建物 (SB077) と大型竪穴建物 (SB017) が見つかり、一色青海遺跡が弥生中期後葉の濃尾平野南西部において核となるべき大規模な集落であったことが指摘されている (樋上・黒坂 2008)。2010 年度に新たに行われた発掘調査では、居住地の北側に竪穴住居が密集していることが確認され、居住域の北側には、大きく蛇行して流れる弥生中期後葉の河道 400NR と大溝 200SD・600SD が確認されている (図 2)。河道や溝の周辺からはカゴ類や木製品の未成品などが見つかり、当時の人々が河道や溝を木製品作成の場として利用していた可能性が指摘されている (樋上 2010b)。また、遺構の変遷に関しては、400NR が洪水層によって埋没したのち 400NR の南肩に沿う様に大溝 600SD が掘削され、さらに 600SD が洪水層で埋没した後、200SD が掘削されたと考えられている (樋上 2010a)。

(2) 試料採取地点

今回、分析試料を採取したのは弥生時代中期後葉の河道 400NR と大溝 200SD・600SD である (図 2)。分析試料は、この 400NR・200SD・600SD がかかるセクション部分から柱状に採取した (試料 1:400NR、試料 2:200SD 下層、試料 3:200SD 上層、試料 4:600SD)。試料の湿潤重量は試料 1 が約 45.0kg、試料 2 および 3 が約 30.0kg、試料 4 が約 30.0kg、試料 4 が 10.1kg である。土色および土質は、試料 1 が植物質を多く含む灰色シルト、試料 2 が炭化物を少量含む灰褐色シルト、試料 3 が黒褐色シルト質粘土と灰褐色シルト質粘土の斑土、試料 4 が炭化物を少量含む砂質シルトであった。

(3) AMS¹⁴C 年代測定の対象とした試料

今回 AMS¹⁴C 年代測定の試料として選定した昆虫化石は、コガネムシ *Mimela splendens* の上翅 3 点である。200SD (試料 2) から得た堆積物のブロック割り作業によって検出された。コガネムシは陸生の食植性昆虫で、種々の広葉樹の葉を食害することで知られる (中根ほか 1984)。また、コガネムシと比較する試料として、ブドウ属 *Vitis* の種子の年代測定も行った。

(4) 分析方法

今回行った分析は、昆虫化石分析および昆虫

化石の AMS¹⁴C 年代測定の 2 つである。まず、昆虫化石分析の方法について述べる。昆虫化石の抽出作業は、ブロック割り法および水洗浮遊選別法（フローテーション法）を用いて行った。水浮遊選別法にあたっては、径 200mm、500 μm の篩を使用した。見つかった化石はクリーニングを行った後、顕微鏡下で一点一点現生の標本と比較しながら同定し、重要なものに関しては写真撮影を行った。同定後の標本は 50% アルコールを吹きつけた後、密閉容器に入れ愛知県埋蔵文化財センター内に保管してある。同定作業を行った昆虫化石はリスト化し、昆虫化石群集を食性および生息環境別に分類して昆虫の種類構成（出現率）を明らかにした。

次に、昆虫化石の AMS¹⁴C 年代測定について述べる。測定試料の前処理および AMS¹⁴C 年代測定は、パレオ・ラボに依頼した。試料の酸-アルカリ-酸（AAA）処理については、塩酸（HCl）が 1.2M、水酸化ナトリウム（NaOH）が 0.1M、その後の塩酸処理が 1.2M の濃度で行われている。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）で測定が行われた。測定後同位体分別効果の補正が行われ、試料の ¹⁴C 年代値（conventional ¹⁴C age）が算出された。¹⁴C 年代値の較正には、Oxcal04（Ramsey 1995,2001）を使用して、Intcal04（Reimer et al.,2004）の較正曲線を利用した。

分析結果

(1) 昆虫化石分析結果

分析の結果、試料 2 から 123 点・試料 3 から 12 点、合計 135 点の昆虫化石を得た（表 1）（写真 1）。試料 1 および 4 からは昆虫化石を得ることはできなかった。

出土した昆虫化石を分類群ごとにみると科レベルでは 4 科計 21 点（15.6%）、属レベルは 3 属 24 点（17.8%）、種まで同定できたものは 4 種 90 点（66.6%）であった。検出別部位では鞘翅（Elytron）が最も多く、つづいて頭部（Head）、腿脛節（Legs）、前胸背板（Pronotum）などが多く検出された。

生息環境および生態による分類では、食植性

の水生昆虫が 1 科 1 種計 5 点（3.7%）、食肉・雑食性の地表性歩行虫が 1 科 2 属 22 点（16.3%）、陸生の食植性昆虫が 2 科 1 属 3 種計 108 点（80.0%）であった。なお、ここに記した昆虫化石の点数はいずれも節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。

特徴的な種についてみると、出土した昆虫の多くが食植性のコガネムシ科 Scarabaeidae（Pleurosticti）に属する昆虫であった。そのうち多く認められたのは、マメ科植物やブドウ・クリなどの果樹やクズ・ヤナギなどの葉を食害するヒメコガネ *Anomala rufocuprea*（65 点）やコガネムシ *Mimela splendens*（20 点）・サクラコガネ属 *Anomala* sp.（18 点）であった。見つかった破片が微細なため正確なことは言えないが、サクラコガネ属の多くは、ヒメコガネかこの近似種に同定できると思われる。その他の食植性昆虫としては、ブドウなどの葉を食害するドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（1 点）・ハムシ科 Chrysomelidae（2 点）が見つかった。

食肉・雑食性の昆虫については、オサムシ科 Carabidae（15 点）、湿潤地表面上に多いミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.（45 点）、ヤマトトクリゴミムシ *Lachnocrepis japonica*（3 点）が見つかった。ヤマトトクリゴミムシは食肉性の昆虫であり、水田や池沼など水辺の湿地にみられる昆虫である（森 1993）。水生の昆虫については、食植性のガムシ科 Hydrophilidae（3 点）・ガムシ *Hydrophilus acuminatus*（2 点）が見つかった。

(2) AMS¹⁴C 年代測定結果

今回行った年代測定の結果、ヒメコガネの ¹⁴C 年代測定結果が 2055±2014CBP（PLD-16518）、ブドウ属の種子が 2015±2014CBP（PLD-16519）となった（図 3）。暦年代ではそれぞれ 162calBC-2calAD、54calBC-52calAD に相当する。種子の方が若干新しい年代値を示したものの、2 つの測定結果はおよそ前 2 世紀～後 1 世紀前後を示しており整合的な結果となった。



1. ヤマトトックリゴミムシ
Lachnocrepis japonica Bates
 左上上翅 長さ6.7mm
 2. コガネムシ *Mimela splendens* Gyllenhal
 上翅片 長さ4.2mm
 3. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
 体節 長さ3.3mm

写真1 一色青海遺跡から得られた昆虫化石

表1 一色青海遺跡から得られた昆虫化石一覧

生態		和名	学名	試料2	試料3	小計	
水生	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	E2 L1		3	5
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	E2		2	
地表性	雑食 食肉性・	オサムシ科	Carabidae	H8 L6	E1	15	22
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.	E4		4	
		ヤマトトックリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> Bates	E2	E1	3	
陸生	食植性	コガネムシ科(食植性)	Scarabaeidae(Pleurosticti)	L2		2	108
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	H3 P15		18	
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	E1		1	
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H9 P6 E25 T13 L12	H1 P2 E7	65	
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	P3 E7 L10		20	
		ハムシ科	Chrysomelidae	E2		2	
合計				123	12	135	

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腮 S(Scutellum):小楹板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):圏蛹
 E(Elytron):鞘翅 W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Others):その他

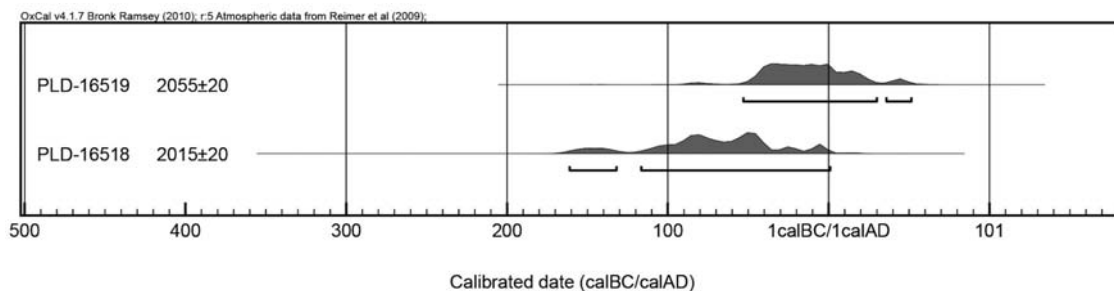


図3 一色青海遺跡の昆虫化石および種実の較正年代

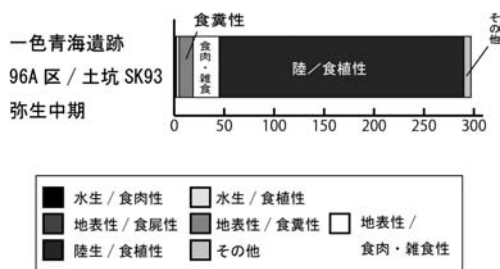


図4 一色青海遺跡96年調査区における昆虫化石分析結果
 (「森 1998」を基に作成)

考察

(1) 一色青海遺跡の居住環境について

まず、一色青海遺跡の居住環境について述べる。今回行った分析の結果、一色青海遺跡の北部を流れる大溝 200SD から、ヒメコガネやコガネムシなど食葉性のコガネムシ群を中心とした食植性昆虫が多く認められた。この分析結果からは、一色青海遺跡とその周辺に広葉樹を中心とした木本類や、マメ科植物、ブドウなどの果樹からなる植性が広がっていたと推定できる。筆者は、弥生時代中期の遺跡から得られた昆虫化石の分析結果について、各試料で優占する昆虫化石別に結果を大きく3つのタイプに分類した(奥野 2010)。3つのタイプとは、A. 汚染環境の指標昆虫が優占して認められるタイプ、B. 植生環境の指標昆虫が優占して認められるタイプ、C. 水域環境の指標昆虫が優占して認められるタイプである。この区分に従うと、今回一色青海遺跡から得られた分析結果は、Bタイプにあたる。一色青海遺跡では、1996年度に行われた発掘調査に際しても昆虫化石分析が行われている。当時分析が行われたのは遺跡の西部に位置する弥生中期後葉の土坑2基(96A区SK89・SK93)であり、試料からは合計346点の昆虫化石が得られている(森 1998)。この試料からも多くのコガネムシ科の食葉群に属する昆虫が認められており(図4)、今回大溝200SD・600SDから得られた分析結果と整合的である。

また、1998年と2003年度の発掘調査に際して一色青海遺跡で行われた炭化種実の分析(蔭山・渡辺 1998)(新山 2003)では、イネをはじめブドウ類やマメ類の種実が多く認めら

れている。今回、一色青海遺跡から得られた昆虫化石群集の中にはイネを直接食害する昆虫こそ認められなかったものの、ブドウ類やマメ科植物を食害するヒメコガネが多産しており、遺跡周辺にそれらの利用植物が存在していた可能性が考えられる。

(2) 周辺遺跡との比較

得られた分析結果を、周辺遺跡で行われた分析の結果と比較してみる。一色青海遺跡と同じく濃尾平野に位置する朝日遺跡や西志賀遺跡では、弥生時代中期に属する環濠で昆虫化石分析が行われている(奥野・森 2009)(森 1996)。両遺跡の環濠中から得られた昆虫化石群集の食性・生息環境別出現率をみると、食糞・食屍性昆虫を中心とした汚染環境の指標昆虫が優占する結果が得られている。特に、人獣の糞や腐敗植物に集まるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* や食糞性のマグソコガネ *Aphodius rectus*、腐敗物に集まるエンマムシ *Merohister jekeli* などの出土が多い。このように、同じ弥生時代中期の溝であっても、一色青海遺跡の大溝 002SD と朝日・西志賀遺跡の環濠では、異なった古環境が想定できる。朝日・西志賀遺跡の環濠周辺は、汚物やゴミによって汚染された環境下にあったことが考えられるのに対して、一色青海遺跡の大溝周辺は植生が広がる環境下にあったことが考えられる。どちらも遺跡の居住域に掘削された溝中から採取された試料であるが、分析の結果は大きく異なる結果となっている。

(3) 大溝 200SD の暦年代について

次に、大溝 200SD の年代値に関して記載する。一色青海遺跡の大溝 200SD から産した昆虫化石と種実の AMS¹⁴C 年代測定を行った結果、年代値は 162calBC-52calAD を示した。愛知県における弥生時代の暦年代の研究は、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏と国立歴史民俗博物館年代グループを中心としたメンバーによって 2009 年度に行われている(赤塚 2009)(国立歴史民俗博物館研究グループ 2009)。それによると、弥生時代中期後葉の暦年代は前 2 世紀後半～前 1 世紀頃と示されている。これと比較すると大溝 200SD から得られた年代値の幅には、弥生時代中期後葉よりも

若干新しい値も含まれている。今回、年代測定を行った点数が少ないため確かなことはいえないが、大溝 200SD が掘削された時期が、遺跡の終末期にあたる可能性もある。

まとめと今後の課題

一色青海遺跡から得られた昆虫化石分析から、遺跡の古環境について考察を行った。弥生時代中期後葉の大溝 200SD から得られた合計 135 点の昆虫化石群集には、ヒメコガネやコガネムシなど食葉性のコガネムシ群を中心とした食植性昆虫が多く認められた。一色青海遺跡とその周辺に広葉樹を中心とした木本類や、マメ科植物・ブドウなどの果樹からなる植生が広がっていたと推定できる。また、大溝 200SD から見つかったコガネムシの AMS¹⁴C 年代測定についてはおよそ前 2 世紀から後 1 世紀の値を示した。

今回、一色青海遺跡の大溝 200SD から得ら

れた昆虫化石群集が、朝日・西志賀遺跡の環濠から得られた化石群と違った出現率を示したことは、考察部分で触れた。分析結果にこのような差が生じた原因としては、一色青海遺跡の大溝と朝日・西志賀遺跡の環濠では遺構の機能が異なっていたため、各遺構周辺に生息する昆虫相に差が生じたことなどが可能性として考えられる。今後、他の遺跡での分析例を増やして詳細に検討していく必要があるだろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、金城学院大学の森勇一先生には多くのご教授を頂きました。また、愛知県埋蔵文化財センターの樋上昇氏にはお忙しい中、試料の採取に際して便宜をはかって頂きました。ここに御礼を申し上げます。

本研究は、笹川科学研究助成「弥生集落の昆虫考古学的研究」(平成 22 年度)による研究成果の一部である。年代測定に関しては平成 22 年度パレオ・ラボ若手研究者を支援する研究助成の一部を使用して実施した。

引用文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1998 『一色青海遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
愛知県埋蔵文化財センター 2010 『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 2009 「朝日遺跡層序の暦年代」『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター
奥野絵美・森 勇一 2009 「昆虫化石からみた朝日遺跡の変遷」『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター
奥野絵美 2010 「昆虫化石からみた弥生時代中期の居住環境 - 伊勢湾沿岸地域について」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・中期篇 大規模集落と弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト
藤山誠一・渡辺泰子 1998 「一色青海遺跡出土の種子について」『一色青海遺跡 自然科学・考察篇』愛知県埋蔵文化財センター
鬼頭 剛 2009 「朝日遺跡化学分析総論」『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター
新山雅広 2008 「一色青海遺跡から出土した炭化種実」『一色青海遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
中根猛彦・大林一夫・野村 鎮・黒沢良彦 1984 『原色昆虫大図鑑 第 2 巻』北隆館
日本応用動物学会編 1987 『農林有害動物・昆虫名鑑』日本植物防疫協会
日浦 勇 1979 「大阪府池上曾根遺跡から見つかったゲンゴロウモドキ」『Nature Study 25(6)』大阪市博物館
樋上 昇・黒坂貴裕 2008 「総括」『一色青海遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇 2010a 「一色青海遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報 平成 22 年度』愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇 2010b 「稲沢市一色青海遺跡出土の絵画土器について」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要第 11 号』愛知県埋蔵文化財センター
森 勇一 1992 「愛知県・朝日遺跡(弥生時代)における都市型昆虫群集」『朝日遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
森 勇一 1993 「萩原団地から産した昆虫化石群集」『萩原団地遺跡』群馬県高崎市教育委員会・萩原団地遺跡調査会
森 勇一 1994 「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究 33(5)』日本第四紀学会
森 勇一 1996 「名古屋市西志賀遺跡より得られた昆虫群集について」『西志賀遺跡発掘調査の概要』名古屋市見晴台考古資料館
森 勇一 1998 「一色青海遺跡から産出した昆虫化石群集」『一色青海遺跡 自然科学・考察編』愛知県埋蔵文化財センター
森 勇一 1999 「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元」『国立歴史民俗博物館研究報告 81』国立歴史民俗博物館
Ramsey, C.B. 1995. Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the Oxcal program. Radiocarbon 37:425-430.
Ramsey, C.B. 2001. Development of the radiocarbon program Oxcal. Radiocarbon 43:355-363.
Reimer PJ, Baillie MGL, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Bertrand CJH, Blackwell PG, Buck CE, Burr GS, Cutler KB, Damon PE, Edwards RL, Fairbanks RG, Friedrich M, Guilderson TP, Hogg AG, Hughen KA, Kromer B, McCormac G, Manning S, Bronk Ramsey C, Reimer RW, Remmele S, Southon JR, Stuiver M, Talamo S, Taylor FW, van der Plicht J, Weyhenmeyer CE. 2004. IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon 46(3):1029-58.

石座神社遺跡の遺構と遺物

● 早野浩二・日吉康浩

豊川中流域に立地する新城市石座神社遺跡は、弥生時代後期・古墳時代前期の集落遺跡である。大型竪穴住居と大型掘立柱建物によって構成される集落の中心施設、検出された320棟の竪穴住居、破鏡を含む金属製品の出土などから、遺跡は弥生時代後期の拠点集落から古墳時代前期の首長居館への変化の過程を具体的に示す好適な資料と考えられる。

調査の経緯と経過

新城市大宮に所在する石座神社遺跡の発掘調査は新東名高速道路建設に伴う事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成20年度から継続して実施している。平成20年度は丘陵東端部の5,200㎡、平成21年度は丘陵西端部の4,720㎡を調査、平成22年度は丘陵頂部の10,570㎡を調査した(図1)。

立地と沿革

石座神社遺跡は、豊川中流域右岸、連吾川と大宮川に挟まれた標高約110mの上位段丘面上に立地する。低地との比高は20~30mである。周辺の低位・中位・高位の各段丘面には同時代の遺跡が多数分布する(「雁峰山麓の遺跡群」とも呼称、図2)。同一段丘面上には10基の古墳で構成される断上山古墳群が分布し、段丘南端付近には、全長約50mの前方後方墳である断上山10号墳(図3)、石座神社境内地には断上山2・3号墳が立地している。なお、石座神社は旧設楽郡内唯一の式内社である。

遺跡の概要

石座神社遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡で、遺跡の規模は東西約300m・南北約100mと推定される。環濠は伴わず、遺跡内で墓域は確認されていない。

その他、縄文時代、弥生時代、古代、中近世の遺構・遺物も確認されている。縄文時代の遺構としては、縄文時代早期前半の煙道付炉穴6基、中期後半の竪穴住居1棟、多数の陥し穴状の土坑が検出されている。出土遺物としては、縄文土器、珧状耳飾り3点、有舌尖頭器・細石核・石匙・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石棒等の石器群がある。また、弥生時代前・中期の土器も散見される。

古代の遺構としては、丘陵東端部の緩斜面において方形区画を伴う小規模な集落が確認されている。また、丘陵縁辺には石座神社の社地を区画したと思われる古代・中世の大溝が掘削されている。中近世の遺構としては、丘陵斜面で中世前期の竪穴状遺構、火葬骨を伴う土坑、牛馬骨を伴う土坑・溝、火葬施設等が検出され、六文銭等も出土している。

また、表土直下より採集した鉛製鉄砲玉5点は、長篠・設楽原の戦いに関連する可能性がある。近世以降の遺構としては、丘陵緩斜面において炭焼窯2基が検出されている。

弥生時代後期・古墳時代前期の遺構

(1) 遺構配置

東西約125m、南北約70mの丘陵頂部平坦面のほぼ中央には、大型竪穴住居が集中する約50m四方の空間が存在する(図4)。以下、この区画を「(集落)中枢域」と呼称する。その中枢域北東側の丘陵頂部縁辺には柵列の可能性のある柱穴列が確認されているものの、それ以外に中枢域を区画する施設は明確ではない。た

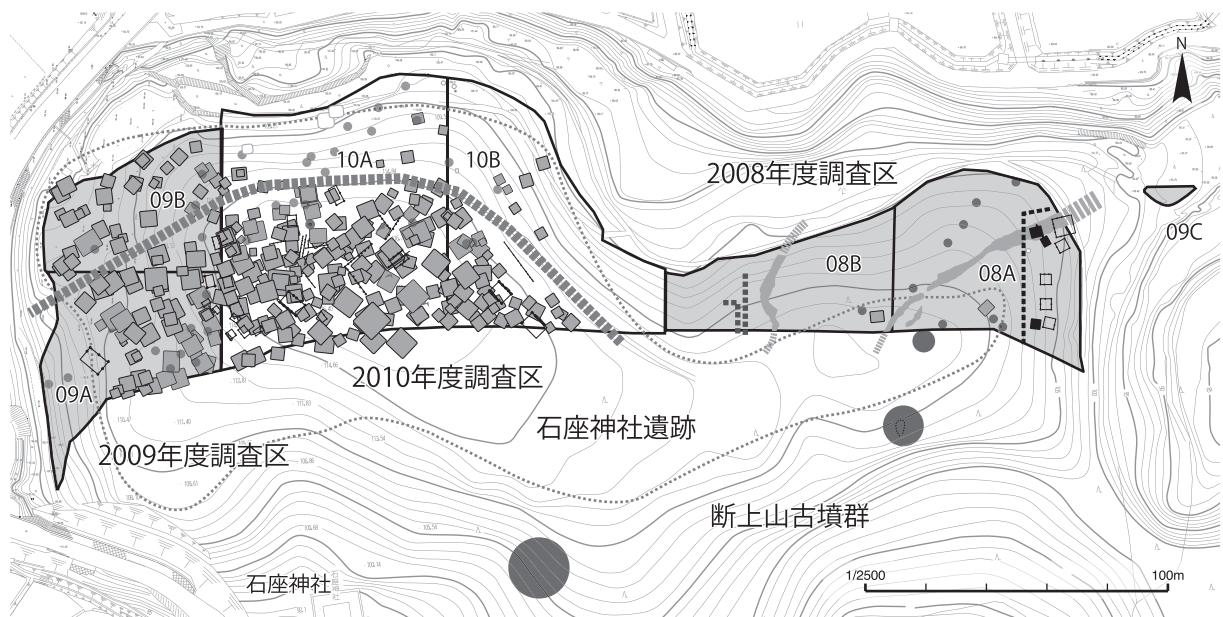


図1 調査区配置図 (1/2,500)

だ、中枢域の南西側、北西側、北東側は竪穴住居が密集し、やや散漫な中枢域内とは明らかに空間の利用状況が異なる。

中枢域の南西側前面と北東側前面には密集する竪穴住居群に混在して、布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物が配置される。さらに、南西側の大型掘立柱建物の西側の丘陵頂部縁辺には掘立柱建物が並列する。

丘陵南西の緩斜面は段状に加工され、上段・中段・下段の各段には竪穴住居が地形に即して配置される。各段の竪穴住居群は幾つかの支群に区分することも可能で、大型竪穴住居も散在する。丘陵北西の緩斜面は丘陵南西の緩斜面と比較して竪穴住居の分布がやや希薄で、丘陵北東の斜面はさらにそれが希薄となる。

(2) 集落の中心施設

これまでの調査で、集落の中心施設が大型の掘立柱建物と大型の竪穴住居によって構成されていることが明らかとなった。

中枢域南西側の前面に配される大型の掘立柱建物 3300SB は桁行 4 間・約 7 m、梁間 1 間・約 5 m の規模で、桁行の柱掘方が布掘り状を呈し、梁間の柱間が広い特徴を有する。独立棟持柱の有無は竪穴住居との重複によって不明確なお検討を要する。一方、中枢域北東側前面の丘陵縁辺には 3300SB に規模が近似する布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物 6000SB・

6100SB の 2 棟が柱筋を揃えて配される。いずれも 3300SB と同様、梁間の柱間が広い特徴を有し、棟持柱を伴わない。

大型竪穴住居で最大級の 3149SI は 9.3×9.0m の規模で、周壁に 1.5～2.0m 間隔 (コーナーのみ近接) で小柱穴をもつ壁立ち式の竪穴住居である。この周辺には、3261SI (9.0×7.8m)、3145SI (8.2×8.1m)・3150SI (7.6×7.4m)・3388SI (7.4×7.4m)・3407SI (一辺 7.2m)・3380SI (7.0×6.8m)・5634SI (7.1×6.4m) といった大型竪穴住居が集中し (3261SI のみ中枢域の北西側に分布)、大型竪穴住居は都合、床面積 80 m² 級 1 棟、60～70 m² 級 2 棟、50～60 m² 級 5 棟を数える。また、西斜面の大型竪穴住居 1276SI (一辺 7.5m)、1464SI (8.0×7.0m) を含めると、床面積 50 m² 級以上の大型竪穴住居は 10 棟前後にも及ぶ。なお、3261SI と 3388SI は拡張、さらに 3388SI はやや大型の掘立柱建物 5000SB (桁行 3 間・5.5m、梁間 1 間・3.4m) への建て替えが認められる。大型建物が継続的に占地する 3388SI・5000SB 付近には、これに対応する可能性がある柵列も認められる。なお、3407SI・3380SI も壁立ち式の竪穴住居となる可能性がある。

布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物と壁立ち式の大型竪穴住居による集落の中心施設の構成

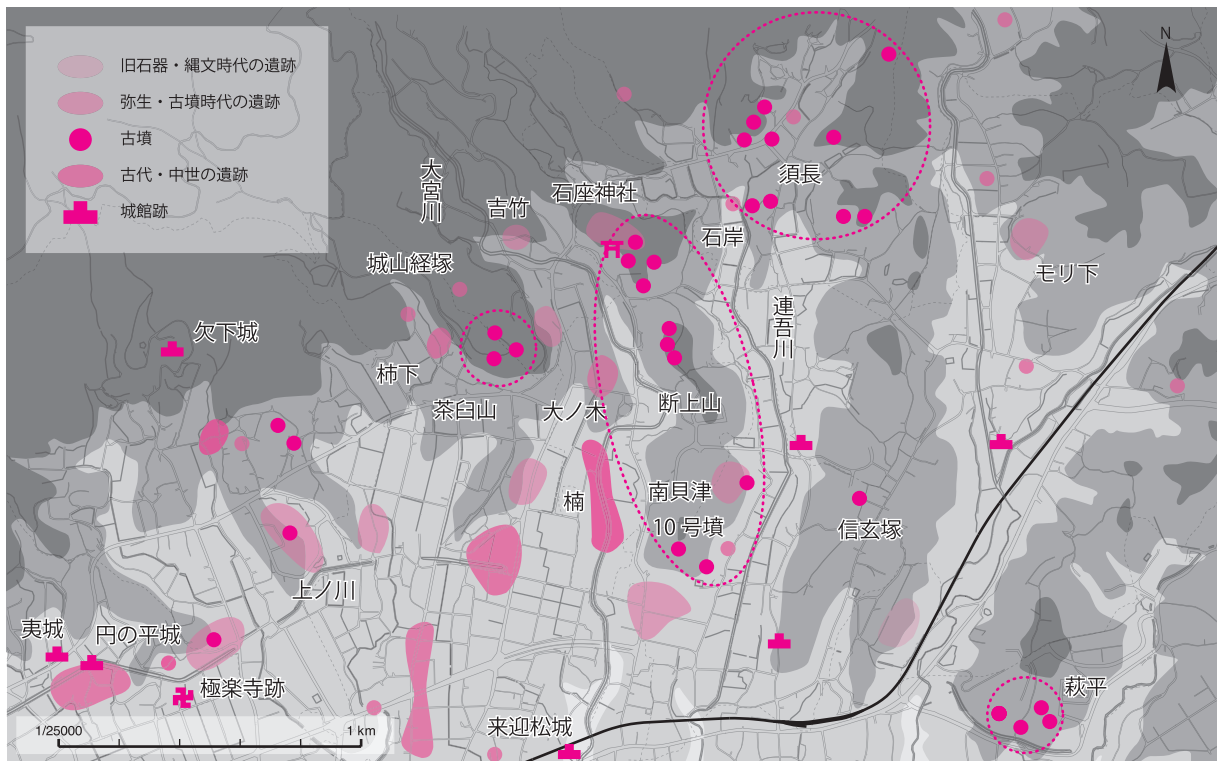


図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

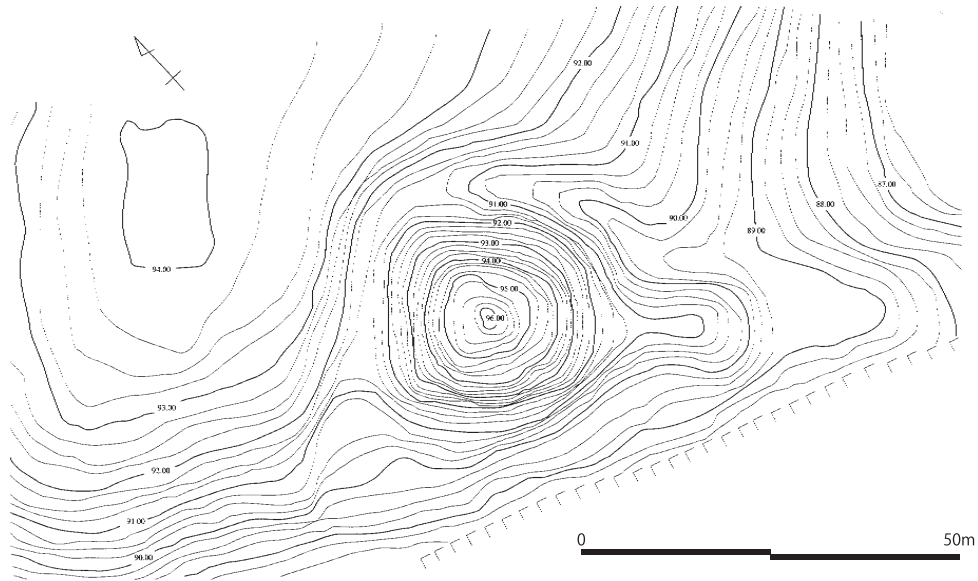


図3 断上山10号墳測量図 (1/1,000)

は、石座神社遺跡とほぼ同時期（古墳時代前期）の三重県津市高茶屋大垣内遺跡、福島県いわき市折返A遺跡・菅俣B遺跡において認められる。後述の岡山県岡山市津寺遺跡の掘立柱建物を含め、これらの中心施設は、区画施設として柵列を伴うことから、集落内で特別な位置を占めていたと推測される。一方、石座神社遺跡の中心施設を区画する施設は、折返A遺跡・菅

俣B遺跡や高茶屋大垣内遺跡、津寺遺跡と比較して曖昧である。

布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物（3300SB・6000SB・6100SB）の規模と構造は、折返A遺跡・菅俣B遺跡の棟持柱をもつ第1号掘立柱建物、津寺遺跡の掘立柱建物—54に類似する（図5）。折返A遺跡・菅俣B遺跡の第1号掘立柱建物は、桁行3間・6.2m、梁間1間・5.2mで

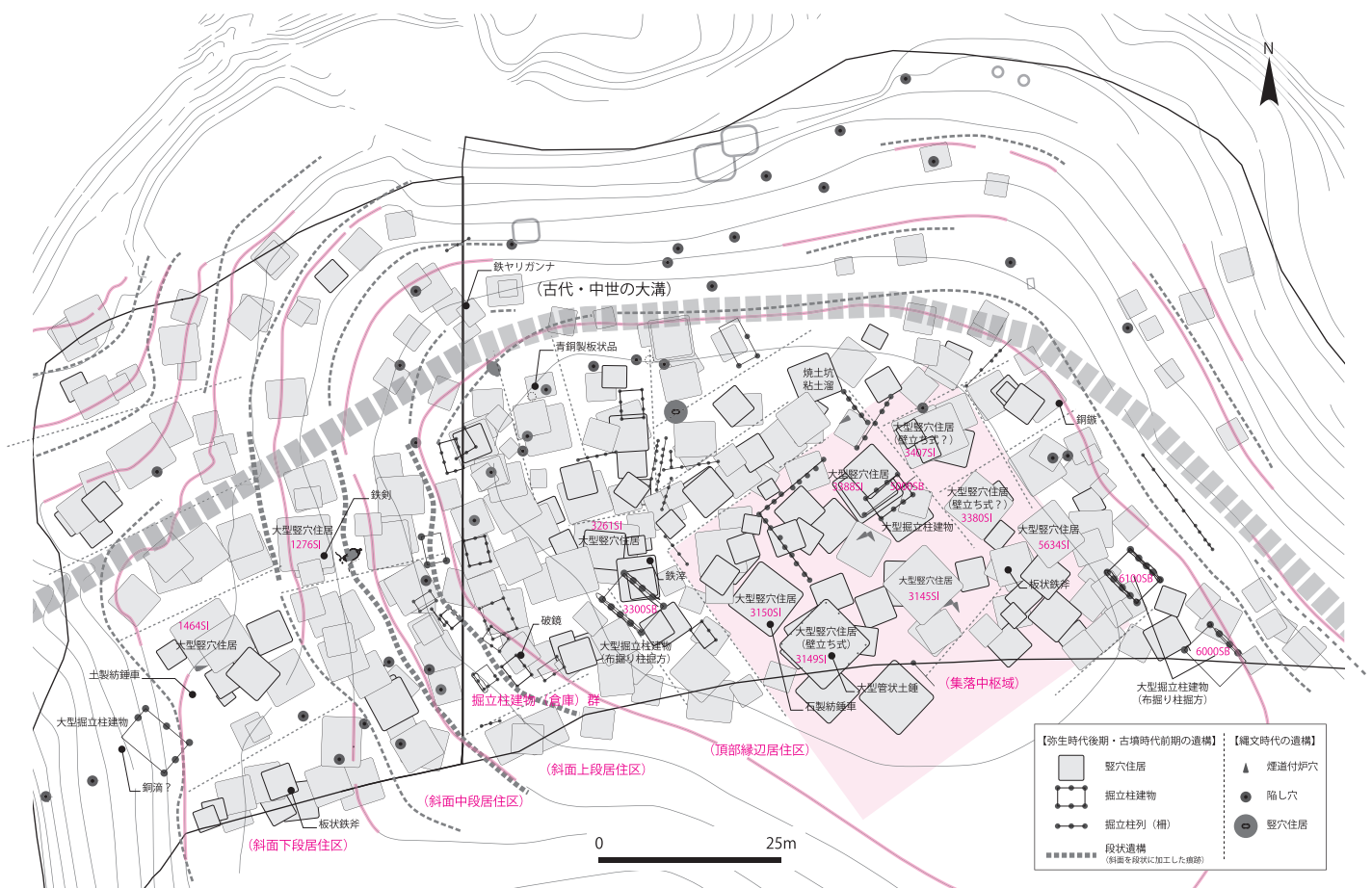


図4 主要遺構配置図 (1/1,000)

規模が近似し、梁間の柱間が広い点が3300SBと類似するが、側柱の妻側外に棟持柱を有する点が異なる。津寺遺跡の掘立柱建物—54は、桁行4間・8.1m、梁間1間・5.2mで同じく規模が近似し、梁間の柱間が広く棟持柱の有無が明瞭でない点が3300SBに類似する。一方、高茶屋大垣内遺跡の布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物SB361・SB362・SB363は、梁間が2間(以上)で、片側にのみ独立棟持柱を伴う点が異なる。規模もSB361が桁行4間・8.2m、梁間2間以上・5.4m以上、SB362が桁行4間・8.3m、梁間2間・5m以上、SB363が桁行4間・8m、梁間2間・6.6mで、石座神社遺跡3300SB・6000SB・6100SBと比較してより長大である。

壁立ち式の大型竪穴住居3149SIに類似する同時期の住居の例として、折返A遺跡・菅俣B遺跡の第3号住居、高茶屋大垣内遺跡SH249がある(図6)。折返A遺跡・菅俣B遺跡の第3号住居は、一辺10.5mの大型竪穴住居で、周壁に1.4～1.8m間隔(コーナーのみ近接)

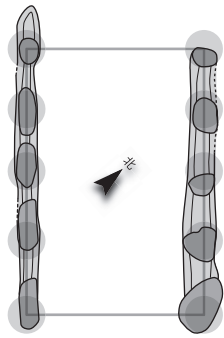
で小柱穴をもつ壁立ち式である。高茶屋大垣内遺跡SH249は、遺跡最大、一辺7.5mの大型竪穴住居で、周壁の三辺に小柱穴をもつ壁立ち式である。なお、SH249の地床炉の一つは支柱石を配するもので、同様の炉は後述するように、石座神社遺跡においても多数認められている。

(3) 竪穴住居の構成と構造

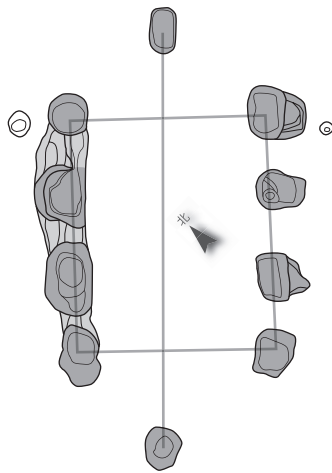
3年間の調査で、丘陵の頂部から緩斜面にかけて約320棟の竪穴住居を確認した。集落推定範囲の約二分の一を調査したとするならば、遺跡内には少なく見積もっても約600棟の竪穴住居が分布する見込みである。

南西緩斜面においては、斜面が段状に加工・造成され、等高線に沿うようにして竪穴住居が連なるように重複する状況を確認した。斜面を段状に加工した「段状遺構」には遺物が大量に廃棄され、その様態は「環濠」にも類似する。

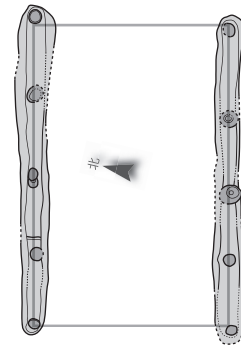
竪穴住居の切り合いは、竪穴住居が密集する南西緩斜面から丘陵頂部において、5～7回程



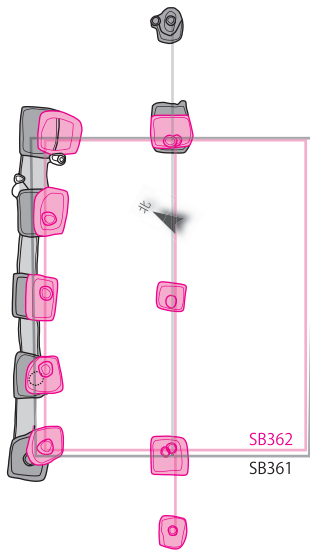
石座神社遺跡 3300SB



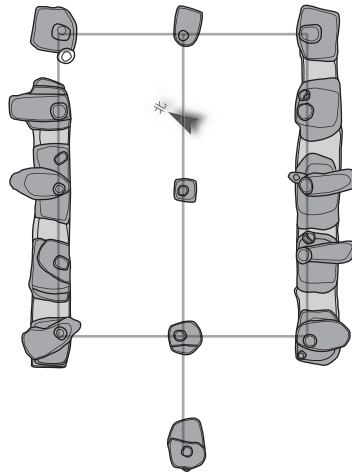
折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡第 1 号掘立柱建物



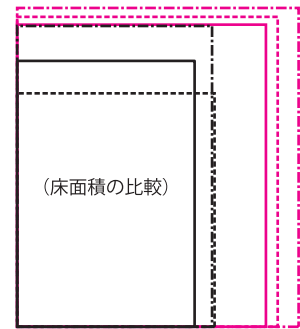
津寺遺跡掘立柱建物—54



高茶屋大垣内遺跡 SB361・362



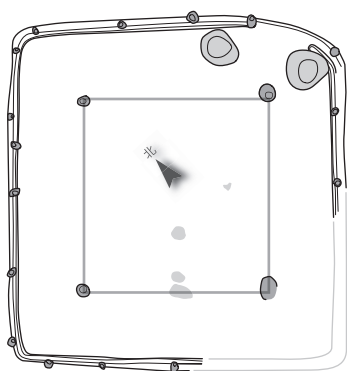
高茶屋大垣内遺跡 SB363



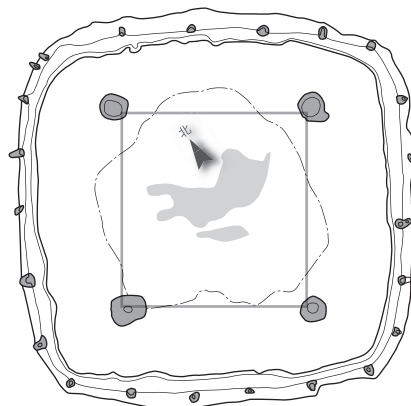
- 石座神社遺跡 3300SB
- - - 折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡第 1 号掘立柱建物
- 津寺遺跡掘立柱建物—54
- 高茶屋大垣内遺跡 SB363
- - - 高茶屋大垣内遺跡 362
- 高茶屋大垣内遺跡 SB361

0 10m

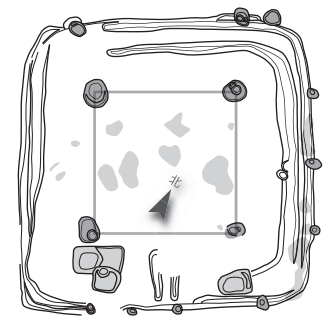
図 5 布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物の比較 (1/200)



石座神社遺跡 3149SI



折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡第 3 号住居



高茶屋大垣内遺跡 SH249

0 10m

図 6 壁立ち式の大型竪穴住居の比較 (1/200)

度確認されている。よって理論上、集落変遷は10段階以上に細分される。これらの竪穴住居群は無秩序に重複することはないようである。先に述べた南西緩斜面の「段状遺構」、丘陵頂部における大型竪穴住居の集中域とその周辺の竪穴住居の密集する区域等から勘案されるように、分布域の一定の区分も可能である。

竪穴住居を規模で分類するならば、一辺が約3mの小型、4～6m程度の中型、7～9m程度の大型という3群に大別することができる。そのなかで最も数が多いのは中型住居である。規模を問わず、ほぼすべての竪穴住居に共通する構造上の特徴としては、地床炉・貼床・周溝を伴う点が挙げられる。

地床炉は支柱石を配したのものや、ごく稀に粘土を貼付けたものも見られる。支柱石を伴う住居は25棟が確認されており、なかには支柱石の代わりに土器片を転用した住居1棟も存在する。なお、炉を伴わない住居は15棟が確認されている。

貼床は掘方の掘削後に整地を行い、それを叩き締めるようにして構築されている。床面全体に構築する場合と、床面の一部のみ構築する場合がある。なお、住居の掘方は幅広の周溝状を呈するものも多く、斜面に構築される住居では、斜面の低い側に整地土を入れ、平坦な床面を確保する造作も認められた。

丘陵頂部では支柱穴配置が明瞭なものも多く、4本の支柱穴を伴っていたことを容易に理解することができる。しかし緩斜面に構築された住居では支柱穴配置が不明瞭な場合が多い。その他、完形に近い土器が出土する貯蔵穴様の土坑やいわゆる「馬蹄形遺構」が住居の隅に構築される住居、粘土塊が残された住居（粘土貯蔵穴を構築する3742SIを含む）も存在する。馬蹄形遺構は地山を削り出したものと、床面に盛土して造られるものがある。

弥生時代後期・古墳時代前期の遺物

(1) 破鏡

方格規矩四神鏡を分割した破鏡が、竪穴住居3002SIから出土している(図7)。破鏡の破断面は丁寧に研磨され、懸垂用の穿孔が2孔穿た

れる。遺存状況は良好である。

破鏡は岡村編年の漢鏡5期に帰属し、型式は方格規矩四神鏡VA式である(岡村1993)。確認される「泉」の文字から、銘文は樋口隆康分類K(「尚方作鏡真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 浮游天下敖四海 徘徊神山採芝草 寿如金石為国保」)に相当するとみられる(樋口1979)。方格内の十二支の銘帯と銘文Kの配置関係から、「泉」の文字付近には白虎が配されることが多い。このことから推測すると、残存する主文の図像は右向きの白虎であると推測され、不鮮明なもの、左から白虎の尾、後足、体軀、羽、首、前足の表現が見て取れる。原鏡の類例としては、石川県羽咋郡宝達志水町宿東山1号墳出土鏡がある*。

破鏡が出土した竪穴住居は規模が4.2×4.5mの焼失住居で、構造や遺物出土状況に特徴的な点は認められない。竪穴住居の新旧関係から、遺構の帰属時期は集落の廃絶時に近いことを想定している。出土状況の詳細は明らかでなく、破鏡が竪穴住居に投棄されたか、住居の廃絶後に流入したかの判断は難しい。なお、竪穴住居出土土器に全形が判明する個体はなく、詳細な時期を決定するのはやや困難である。

(2) 青銅製品

破鏡以外の青銅製品(図8)として、銅鏃

* 出土破鏡について、岡村秀典氏よりご教示を頂いた。記して感謝する。

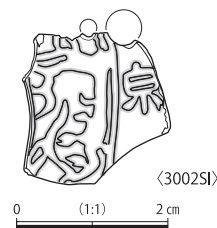


図7 石座神社遺跡出土破鏡(1/1)

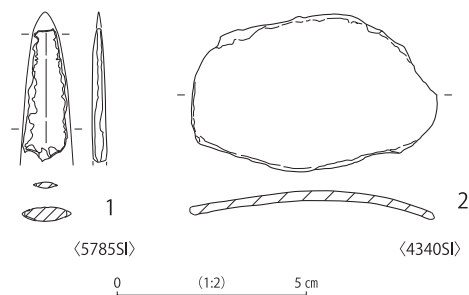


図8 石座神社遺跡出土青銅製品(1/2)

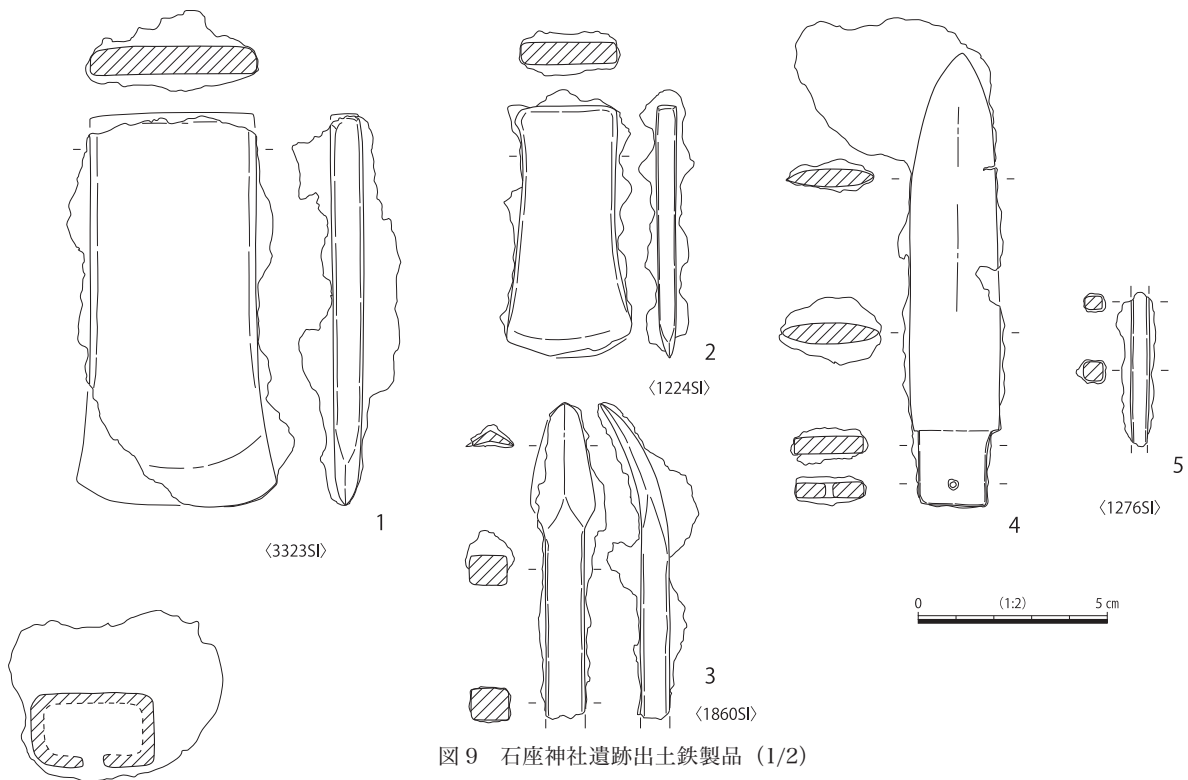


図9 石座神社遺跡出土鉄製品 (1/2)

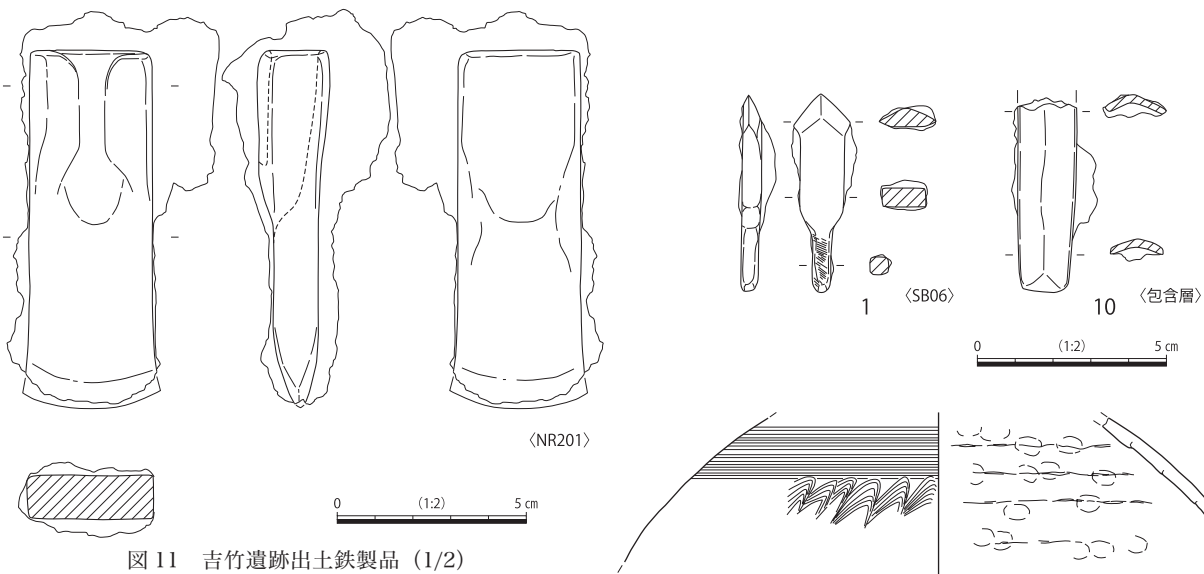


図11 吉竹遺跡出土鉄製品 (1/2)

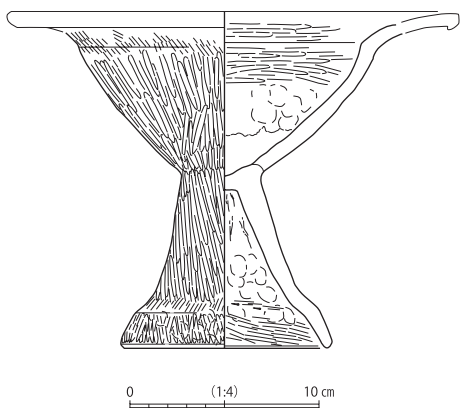


図12 楠遺跡出土菊川式土器高杯 (1/4)

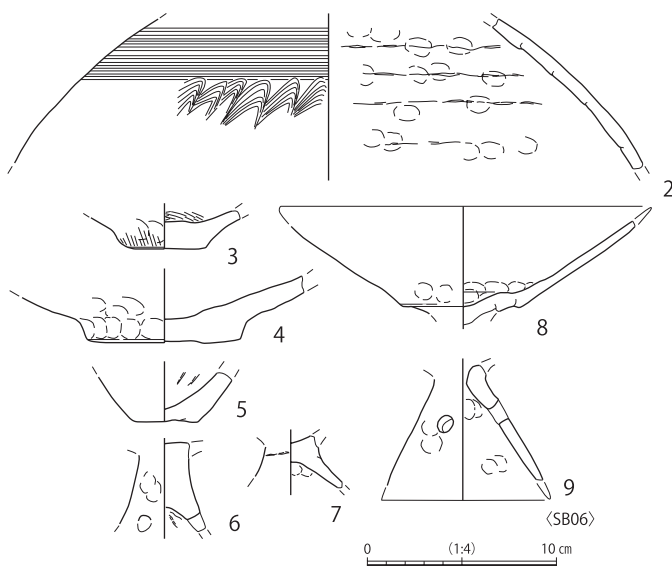


図10 上ノ川遺跡出土鉄製品 (1/2) と伴出土器 (1/4)

(1)、薄板状の青銅製品(2)が出土している。銅鏃の鏃身は長三角形を呈する。薄板状の青銅製品は、文様は認められないものの、彎曲の程度から、銅鐸の身の破片である可能性がある。

(3) 鉄製品

鉄製品(図9)として、板状鉄斧2(1・2)、鉄ヤリガンナ(3)、鉄剣(4)、棒状鉄器(5)等が出土している。これら鉄製品の出土は、同時期の他の遺跡と比較しても器種・数量が豊富である。近隣の上ノ川遺跡における定角式鉄鏃(図10-1、2～9が伴出)と身部に裏すきがある鉄ヤリガンナ(10)、吉竹遺跡における有袋鉄斧(図11)の出土等、周辺遺跡を含めた出土様相を踏まえると、当地域が金属器流通に積極的に関与していた公算も見込まれる。

鉄剣は大型竪穴住居1276SIの床面において出土した。周辺地域では東遠江地域の森町文殊堂遺跡土坑墓、磐田市梵天遺跡H地点墓・I地点墓等の墳墓に類例が認められるが、天竜川以西における分布は希薄である。鉄剣の流通を理解する際、当遺跡や楠遺跡における菊川式土器(図12)の出土は示唆的である*。

(4) 金属器生産関連遺物

青銅器生産の痕跡を示す遺物として、銅滴、先述の薄板状の青銅製品の出土がある。前者は丘陵西斜面の大型掘立柱建物前面の落ち込みから、後者は丘陵縁辺の竪穴住居(竪穴状遺構)4340SIから出土した。ごくわずかではあるが、

* 上ノ川遺跡、楠遺跡出土遺物について岩山欣司氏にご協力を頂いた。記して感謝する。

参考文献

- 愛知県 2005 『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
 石川県立埋蔵文化財センター 1987 『宿東山遺跡』
 磐田市教育委員会 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団 2003 『折返A遺跡・菅保B遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第95冊
 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
 岡山県教育委員会・岡山県古代古備文化財センター 1998 『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集
 新城市教育委員会 1996 『楠遺跡発掘調査報告書』新城市埋蔵文化財調査報告書X
 新城市教育委員会 1999 『上ノ川遺跡発掘調査報告書』新城市埋蔵文化財調査報告書17
 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
 三重県埋蔵文化財センター 2000 『高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告184

鉄器生産の痕跡を示す遺物として、大型掘立柱建物3300SB付近の3282SIより微小な鉄滓が出土している。

(5) その他

その他、特徴的な遺物として、大型管状土錘2、土製紡錘車、杓子形・容器形土製品等の土製品、石製紡錘車、石製加工円板等の石製品、弧帯文?を線刻した線刻土器、底部穿孔壺等がある。

なお、他地域系土器としては、尾張系のS字甕・パレス系壺、菊川式系の壺・高杯、近畿V様式系の叩き甕等が散見されるが数量は少ない。

まとめ

集落の中心施設の構成、出土遺物の内容等を踏まえると、石座神社遺跡は豊川中流域における拠点的な集落として位置付けられる。集落の中心施設の構成は、同時期の首長居館として評価される遺跡と共通する点も多いことを踏まえると、遺跡は弥生時代後期の拠点集落から古墳時代前期の首長居館への変化の過程を具体的に示す好適な素材とする評価が可能である。また、遺跡を含めた周辺地域は金属製品の東西流通網に関与していた点も評価に値する。遺跡の消長は、同一丘陵上の前方後方墳である断上山10号墳の築造と関連していたことも推測されるが、その詳細は遺跡の変遷過程の精査を踏まえて論じることとしたい。

安城市下懸遺跡・惣作遺跡出土の 木簡について

● 永井邦仁

平成20・21年度の発掘調査で、安城市に所在する下懸遺跡と惣作遺跡からそれぞれ1点ずつ出土した木簡について報告する。両木簡は奈良時代の可能性が高く、前者が文書木簡で後者が習書木簡と分類される。特に後者については人名「呉部足国」が記されており、西三河地域の古代史に重要な資料を提供したものと見える。

はじめに

安城市東部を南北に流れる鹿乗川流域は碧海台地の東縁にあたり、沖積地上には弥生時代以降の遺跡が多数所在する。特に古墳時代から古代にかけては、同時代の古墳や古代寺院が台地上に立地することからも、多くの集落が営まれていた可能性が考えられる。愛知県埋蔵文化財センターでは、鹿乗川改修工事に伴う発掘調査を平成10年度から継続して実施しており、表題の遺跡以外にも姫下遺跡や寄島遺跡などの沖積地上の集落遺跡について明らかにしてきた*。そして平成12年度には下懸遺跡で三河地方初となる古代の習書木簡が出土した**。習書とはいえ木簡が出土したことによって、木簡の使用者である官人層の存在やそれが居た官衙もしくは居宅が近隣に存在する可能性が出てきたのである。しかし一方で、1点のみの出土であることや自然流路出土であることから、川上から流れてきたものという評価も拭いきれなかった。これは出土遺構である流路に関する情報が少なかったことに起因するものと考えられる。

その後しばらく木簡の出土はみられなかったが、平成16・20年度の惣作遺跡と平成21年度の下懸遺跡の発掘調査において自然流路から木簡を検出した。前者のうち平成16年度出土木簡は墨痕が見られるものの判読不能であり、平成20年度出土木簡は同年度のセンター年報

に暫定的な釈文を掲載したが、その後の精査で釈文内容を見直した。後者については流路内での出土層位を確認し流路に掘られた溝から出土したことが判明した。本文では平成20・21年度出土木簡2点について報告する。

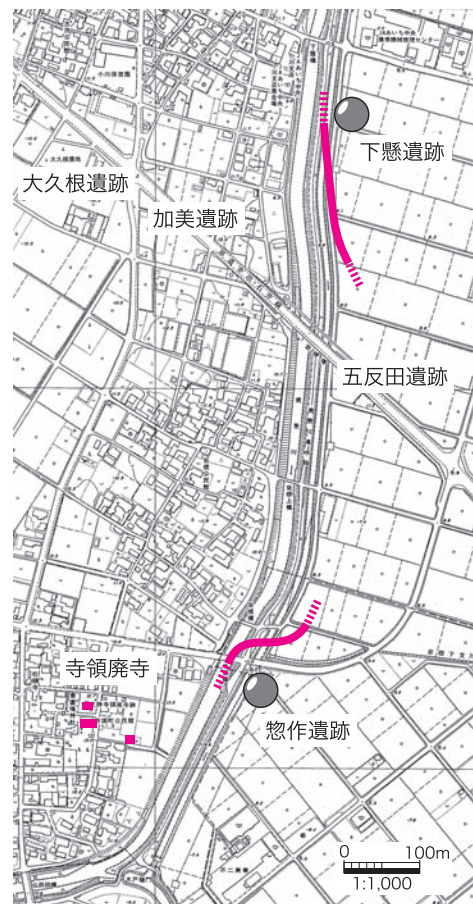


図1 鹿乗川流域南部の主要古代遺跡と自然流路

* ただし鹿乗川から東方の矢作川までの広い沖積地にも遺跡が点在したと考えられるが、これらは一部を除き未解明である。現状では鹿乗川沿いの遺跡が集中的に確認されていることを付記しておきたい。

** 池本・福岡2001 池本2006

下懸遺跡出土の文書木簡

下懸遺跡は安城市小川町に位置する。遺跡は鹿乗川左岸の微高地に立地する弥生時代中期～古墳時代前期前半が中心となる集落と、その西～南側を下る自然流路で構成される。自然流路は堆積状況から、古墳時代を通じて埋没傾向にあり湿地化が進んでいたものと考えられる。平成12年度調査では、00A区において習書木簡が流路内の黒色粘土中から出土したが、同21年度調査ではその南隣の09A区の流路内から木簡が出土した(図2-1)。

木簡が出土した流路は、平安時代後期には周辺の微高地とさほど変わらない高さまで埋没し、その上面は平安時代末～中世に耕作地化(畦畔)がなされている(図2-2)。一方その下層(NR-2層)は黒色粘土層であるが、この層は7世紀後半の須恵器が上部で出土する植物質を多く含む黒褐色粘土層(NR-3層)を切り込んで掘削された溝に堆積したものである。この溝は幅約5mで検出面からの深さ0.6mの底面が平らな皿形の断面をしている。同じ堆積状況は他の調査区(09C区)でも確認されており、埋没進行中の流路に直線的な溝を掘ったものと考えられる。また今回木簡が出土した地点ではこの溝に対し直角に交差する別の溝も検出されており、沖積地上に区画溝もしくは運河が廻る景観を想像することができる。溝は若干の細粒砂が混じる粘土主体であり、ほとんど水流がない状態であったと考えられる。

木簡は溝の底近くで出土した。後述するように途中で折り切られた下部のみであり、用済みとなったため廃棄されたものであろう。出土地点から5mの範囲内の同層位中では、大小の曲物が出土した他は同層上部の掘り返し(NR-2a層)で須恵器甕小片が検出されたのみであった。また09C区では8世紀中葉の須恵器杯、同区のNR-2a層で灰釉陶器碗が出土した程度である。したがって溝の堆積は8世紀前半～9世紀前半という年代幅でしか把握できない。

木簡は折り切られた下部である(図2-3)。一部破損しているものの下端が確認できる。最大幅は3.8cm、下端からの残存長13.8cm、厚

さ0.3cmである。樹種は不詳。柾目の板材である。文字は片面のみで確認できるが、積文からすると文書の途中のようでもあるので、出土しなかった上部の反対面に文の続きが記されていた可能性が高い。

積文中の「米物受被」は明瞭で、その下の「賜」と合わさって米に関わる物資の受給あるいは支給に関する文書であると考えられる。残存部分からはこれ以上の意味を汲み取ることはできないが、このような受給関係文書が使用される場面として公的なものを想定する必要がある。その点で文書木簡の出土は意義深い。なお、「受被」は漢文としては文字配置が正しくないが、日本語化が進んだ表記方法と評価される。

また文書木簡が、習書木簡から南へ数十mの地点で出土したことも注意したい。今回の精査によって習書木簡も溝中からの出土であった可能性が高くなった。しかも習書木簡出土地点付近では数点の8世紀後葉に位置づけられる須恵器が共伴遺物として出土しているが、発掘された溝全体を通じて見れば奈良～平安時代の遺物が比較的多い地点であったともいえる。このことから両木簡が上流から流されてきたと理解するよりは溝近くの沖積地上に木簡を使用する場を想定するのが妥当であると考えられる。

加えて注目される遺物として木簡出土地点から南へ10mの溝堆積層から出土した齋串3点がある(図2-4)。形状は統一されたものではないが、これらは約5m範囲内でまとまっていることから出土地点で使用または廃棄されたものと考えられる。齋串は都や地方官衙で行われた祭祀で用いる道具であり、木簡とともに遺跡の評価を考えるうえで重要な資料といえる。しかしながら現状では、溝付近に官衙もしくは豪族居宅を想定するには当該期遺物の出土量が少なすぎるという問題も残されている。

惣作遺跡出土の習書木簡

惣作遺跡は安城市木戸町に位置し、奈良時代は碧海郡小河郷に属していたと考えられる。下懸遺跡から鹿乗川を約0.7km下った地点の沖積地上に立地する。南西200mの段丘上には7世紀後半に創建された寺領廃寺がある。寺領廃

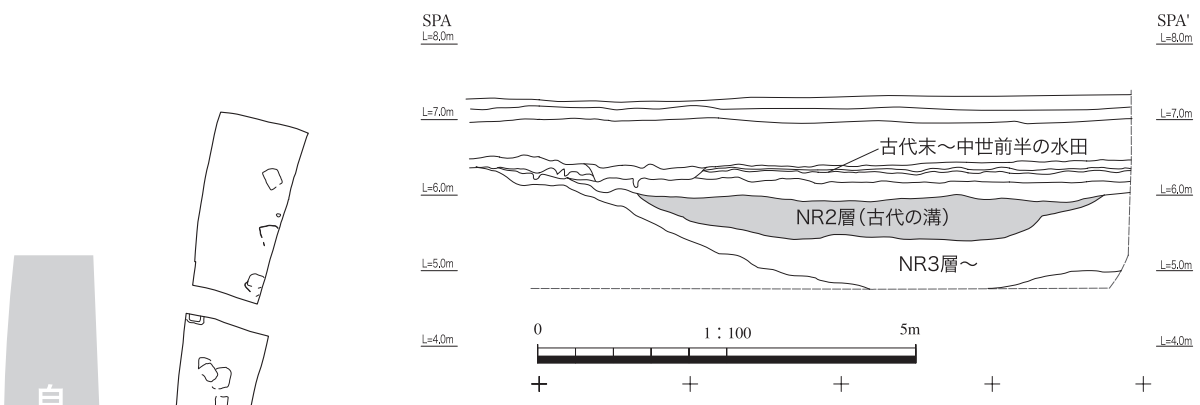


図2-2 下懸遺跡の流路と溝の土層断面(09A区、S=1:100)

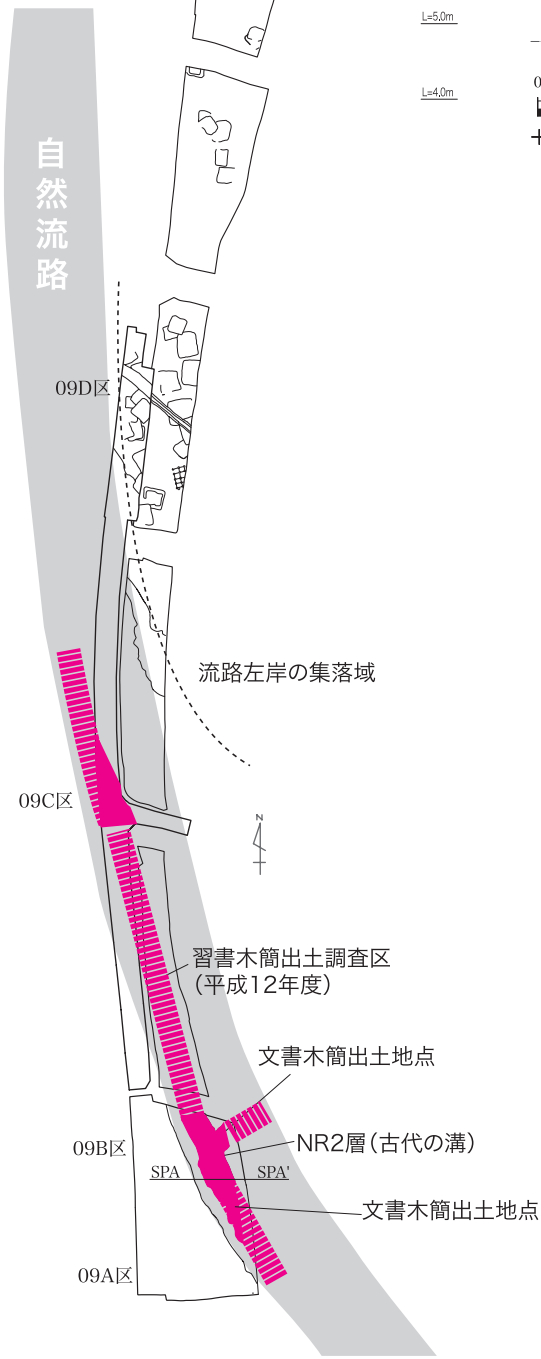


図2-1 下懸遺跡調査区全体図と流路および古代の溝 (弥生時代～平安時代前期の遺構配置)

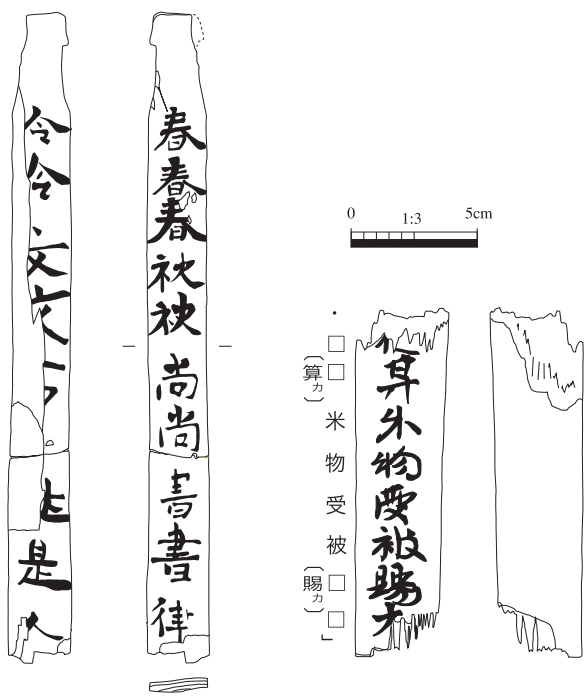


図2-3 下懸遺跡出土木簡実測図(左:習書木簡 右:文書木簡)

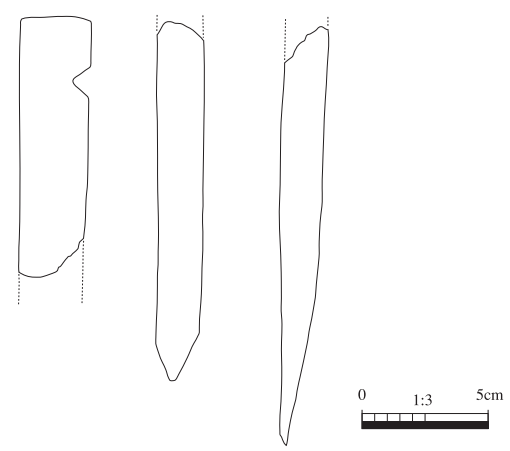


図2-4 下懸遺跡出土齋串実測図(S=1:3)

図2 下懸遺跡の概要と出土木簡実測図及び積文

寺は8世紀後半段階の瓦も多く出土しており奈良時代後半にも活発な造営をおこなっていたと考えられている*。

惣作遺跡は、これまでに当センターと安城市教育委員会によって計6,495㎡が発掘調査されている。判読不能の木簡（木簡1）は平成16年度に04B区の自然流路NR01中の木製品集中地点から、習書木簡（木簡2）は平成20年度に08A区の自然流路003NRから出土した。両出土地点は同一流路内にあり地点間の距離は15mである。

自然流路は調査区内を東西方向に抜けている（図3-1）。流路南岸は発達した自然堤防があって、北東方向から下ってきた流路はそれを迂回するようにして一旦西流しその後段丘に接するあたりで南西へ向きを変えるとみられる。位置関係から推測して、下懸遺跡で検出された自然流路の延長である可能性がある（図1）。本遺跡でも古墳時代を通じて埋没過程にあった点や、奈良～平安時代は黒色粘土層が堆積するなど状況は似ている。しかし黒色粘土層については掘り返した痕跡はなく自然堆積である。層の厚さは、流路中央で最大約30cmの堆積となるものの岸近くでは5cmほどにとどまる。黒色粘土層の上位には中世以降の遺物が検出される砂質層があり、中世以降も流路として機能していたと考えられる。

木簡2は流路北岸付近の黒色土層中から出土した。ほぼ中央で折り切られて上部と下部が分離した状態であったが至近距離で出土した。このことから木簡が水流で移動した可能性は低いと考えられる。また木簡1が出土した木製品集中地点も近く、流路北岸からの廃棄が想定されよう。なお同層中からは灰釉陶器が出土しており、堆積時期が奈良時代～平安時代中期と考えられる点は下懸遺跡と同じである。

流路北岸の自然堤防上には掘立柱建物が想定されるが、どのような性格のものであったかは判然としていない。一方、流路の南側には周溝のある掘立柱建物が1棟検出されており平安時代と推定される（宮腰2009）。奈良時代に限定する遺構は少ないが、8世紀後葉の須恵器が一定量出土していることや、流路南側（10B

*川崎・永井2004

区）で「寺」と底部に墨書された須恵器杯が出土した東西方向にのびる溝があることから、段丘上に立地する寺領廃寺の造営や維持に関わる施設が展開していた可能性が想定される*。

木簡は折り切られた状態であったが、接合復元すると全長57.3cm幅3.2cm厚さ0.7cmのやや厚みのある板状である。また等間隔に直径0.4cmの孔が貫通している。このような厚さや穿孔があることから、何らかの木製品を木簡へ転用した可能性が考えられる。表面は多数の削痕があり、判読できた文字以外にも墨痕がみえることから、何度も墨書と削除を繰り返したものであると思われる。文字は両面に書かれ、墨が残るA面に対し表面の腐食が進んで墨の部分が浮き上がって残存したB面がある。両面ともに下端近くに墨痕があるが、A面のそれは戯画のようでもあり今後の検討が必要である。

文字のうち「道」「大」は、木簡の習書文字を集成した渡辺晃宏によると高い頻度で習書される文字であるという**。しかし「卷」は頻出文字ではないため、何らかの目的がありそうである。寺院に近い点を考慮すると仏教の経巻などが考えられよう。下部にある「天平」は他に比べるとやや小さめに記されている。その下に「護」があるが、「天平」に関連すれば天平神護という年号に関わる可能性もある。一方下の「田」に関連させるのはやや難しいか。

A面下端近くには「呉部足国」とあり人名と判断される。「呉」は異体字が用いられている。他の習書文字が一画々々を明瞭に記すのに対し「足国」は字形がやや崩れている。習書者本人が自分の名を記したのかもしれない。ここでは人名に注目して若干の指摘をしておきたい。

正倉院文書にある貢進歴名帳***には三河国碧海郡皆見郷出身の呉部浄足とその戸主として呉部皆麻呂の名が記されている。同文書には尾張・三河国出身者が列挙されており、天平19（747）年～天平勝宝元（749）年に作成されたものと考えられている****。これによって、奈

*宮腰ほか2009。惣作遺跡では銅滓が多く出土し、寺院に供給する銅製品の加工場だった可能性もある。

**渡辺2009によると「道」が最多で「大」は3位。「得」は52位、「本」は181位。

***任官にあたってその戸籍を調査し書き出した文書。当該文書は丹裏（丹の包み紙）に転用されたもの。

****『愛知県史 資料編古代1』文書番号214

良時代に碧海郡の呉部氏が都へ出仕する人材を輩出していたことがわかるものである。呉部浄足は、天平 20(748) 年 8 月の正倉院文書に「童子 呉部清足」と記された人物と同一の可能性が高いといわれている*。呉部清足は、少僧都良弁の宣により請経使(経典を借り受ける使)として派遣されている。良弁の下にいたことから東大寺で働いていた可能性が高い。

その本貫である碧海郡皆見郷の位置については、「あざみ」から「あざい」へと読みが転じたと考えて西尾市東浅井町および西浅井町付近に比定されている**。この比定地は惣作遺跡から南東約 1km の距離にある矢作川左岸の丘陵地に位置し、近い位置関係にある(図 3-2)。「呉部足国」を本人が記したと考え、彼もまた皆見郷を本貫とする呉部氏の一員であり、そこから惣作遺跡の場所に赴き文字を扱う仕事に従事していたものと思われる。

また呉部氏は、その名から渡来系氏族と考えられ、おそらく大化改新以前は「呉」氏に支配された部民であろう。先の貢進歴名帳には尾張国愛智郡荒大郷に久例連(くれのむらじ)がいたことが記されており、これとも関連が考えられるという***。文献史料で確認される奈良時代における呉部氏の分布は、三河国碧海郡・美濃国本栖郡・播磨国揖保郡である。このうち美濃国本栖郡栗栖太里の大宝 2(702) 年戸籍には、戸主漢人部鳥の寄人として呉部安麻呂と 3 人の子の名が記されており、渡来系氏族間でのつながりが想定される****。一方、碧海郡にも漢人部氏が所在したことが知られている*****。郷名までは伝わっていないが美濃国の事例を参照すると呉部氏と漢人部で集住していた可能性もあろう。

参考文献

- 天野暢保 1996 『和名抄』記載の西三河の郷について(下)、『安城市歴史博物館研究紀要』第 4 号 安城市教育委員会
池本正明・福岡猛志 2001 「下懸遺跡出土の木簡について」『研究紀要』第 3 号 愛知県埋蔵文化財センター
池本正明ほか 2006 『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 144 集
川崎みどり・永井邦仁 2004 『寺領廃寺』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集
鈴木正貴 2009 『惣作遺跡』『年報平成 20 年度』愛知県埋蔵文化財センター
竹内理三ほか 1961 『日本古代人名辞典』3 吉川弘文館
永井邦仁 2010a 「下懸遺跡」『年報平成 21 年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2010b 「惣作遺跡」『年報平成 21 年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2011 「北野廃寺は三河国造の寺か」『考古学フォーラム』第 20 号 考古学フォーラム
西宮秀紀ほか 2007 『新編安城市史 通史編第 1 巻原始・古代・中世』安城市
宮腰健司ほか 2009 『惣作遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 158 集
渡辺晃宏 2009 「日本古代の習書木簡と下級官人の漢字教育」高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書房

今回の出土文字資料は、仏教や寺院に関わりの深い渡来系氏族が古代寺院である寺領廃寺の近くに所在した可能性をより高めた点で注目される*****。

おわりに

以上、鹿乗川流域の遺跡から出土した木簡 2 点の紹介とそれをめぐっていくつかの指摘と憶測を述べてきた。鹿乗川流域は低湿地であるため、今後も木簡の出土が期待される。しかしそれだけでなく西三河地域の中でも碧海郡域は、墨書土器を中心とする出土文字資料が多くみられる地域であることも注意しておかねばならない。特に鹿乗川流域の古井堤遺跡などでは 8 世紀中葉段階から墨書土器が多数確認されており、文字の普及が比較的先行していた可能性がうかがえる。

謝辞

下懸遺跡・惣作遺跡出土木簡の釈読については福岡猛志氏(日本福祉大学名誉教授、当センター専門委員)、古尾谷知浩氏(名古屋大学准教授)にご指導いただきました。また惣作遺跡木簡については渡辺晃宏氏(奈良文化財研究所史料研究室長)、浅野啓介氏(同研究員)、桑田訓也氏(同研究員)中村一郎氏(同主任)のご指導・ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

* 竹内 1961

** 天野 1996、西宮 2007 など。

*** 福岡猛志氏のご教示。

**** 竹内 1961

***** 延暦 20 年(801)に漢人部千倉売がいる(『愛知県史資料編古代 1』文書番号 432)。

***** 寺領廃寺が奈良時代以降も積極的な寺院造営を行ない得た要因として、渡来系氏族がそれに関与した可能性を指摘する(永井 2011)。

金萩遺跡刻書土器小考

池本正明

本稿では金萩遺跡出土の刻書土器に『卍』が多い事に注目する。『卍』は大陸起源の信仰に登場する九字の略号であることが指摘されているが、名古屋市昭和区に所在する八事小堂跡の存在などを評価すると、密教との関わりを想定できる。金萩遺跡資料はいわゆる純密以前の古密教と呼ばれる段階に属する。古密教はその特徴となる現世利益的呪術性を発揮して、猿投窯の製品流通にも宗教的支援を実施していたものと推察でき、金萩遺跡の刻書土器はこうした修法に関連しているものと考えられる。これは、猿投窯の生産と流通が律令制と関わり深い一面を有していた必然とも言えるであろう。

はじめに

金萩遺跡は、名古屋市東部の丘陵地帯に位置する。行政区画では日進市北新町字金萩で、名古屋瀬戸道路長久手ICから南西約1.5km地点に位置している(図1)。遺跡は小丘陵の裾面を中心とする緩斜面で、前面に低地が展開する。標高は60～80m程度となる。発掘調査は道路建設を理由として、平成12(2000)年6～9月にかけて愛知県埋蔵文化財センターが実施している。調査面積は2500㎡で、報告書は平成16(2004)年に同センターより刊行されている(池本他 2004)。

報告書によれば、調査で確認できた遺構は大きく二時期に区分されている。報告書では前者をI期、後者をII期と呼称するが、ここで問題とするものは奈良時代～平安時代を主体とするI期の遺構群で、鳴海32号窯式期～折戸10号窯式期にその重心がある。

I期の遺構群は竪穴住居と掘立柱建物で構成される遺構群で、金萩遺跡を特徴づける遺構として、ロクロピットが付設された竪穴住居が1棟(SB07)と土器集積遺構が7か所(SU01～07)で確認されている(図2)。

出土遺物は多量で、窯道具や焼成ムラなどが確認できる資料が高頻度となっている。こうした状況から、金萩遺跡I期は土器の製作に関わる遺構群で、この場所で同時に製品の二次選別も実施されたことを予測させる。つまり、製品

の集荷場としての性格も合わせ持っていたことが確認されている。

本稿はこうした集荷システムに伴う祭祀に検討を加えることを主眼としている。

資料の観察

今回注目したいのは刻書土器である。時期は概ね折戸10号窯式に属する。

金萩遺跡では、刻書土器に『卍』が、全形を残すものが3点、一部を欠くがその可能性が極めて強いものが5点出土している(図3)。この他に、へら記号や性格不明の線刻・戯画などを除く刻書土器は6点ある。ただしこれらに共通性を窺う事はできない。

『卍』の刻書は可能性のあるものまで含めて8点と数量が少ないが、調査面積が2500㎡とあまり大規模でない事から、遺跡を代表する刻書として注目したい。

図3に金萩遺跡出土の『卍』と刻書された資料をまとめた。遺物番号は報告書の遺物番号を踏襲する。なお諸事情により報告書に掲載されなかった遺構外出土の刻書土器1638～1640もあわせてここで報告する。

1406が表土出土、1411がSU05(土器集積遺構)から出土しているのを除くと、その他は包含層出土資料となる。ただし、出土位置の情報を持たない1406を除き、全てSU05とその北側で確認できたSU06の上面から出土しており、これらが限られた位置にのみ分布している



図1 遺跡位置図（この地図は国土地理院 1:50000 地形図「名古屋南部」「豊田」を使用した。）

ことが確認できる。

刻書の部位は、外底部中央が4点、内底部の中央よりややずれた位置が1点、残り3点が坏部の外面となる。体部外面に施される資料の土器と刻書の位置関係は、1405・1409が土器を正位に、1410はこれが天地逆となる。

次に、書順を観察してみる。図3に最後に施される2本を縦方向として拡大図を掲載している。全形を残存させる例では、平行する2本を刻んだ後にこれと直交する2本を刻むものがほとんどだが、横方向を右側から刻むもの（1404・1405）と、左側から刻むもの（1406・1407・1409～1411）が混在する。なお、1406のみ縦方向と横方向を交互に刻む。書順に統一性はなく、文字と言うよりも4本の直線を組み合わせた記号となっている。

文字に対する筆順の多様さは、理解度・習熟度の低さを示すとした意見もある（平川2000）。しかし、筆順の多様さを書き手の「個人内筆順」とらえ、これを理解度・習熟度とは無関係とする考え方も指摘されている（松本1998）。ここでは金萩遺跡資料に筆順の多様を確認できる事みに留め、これをどのように理解するかは今後の課題としておきたい。

愛知県下で確認されている古代の墨書・刻

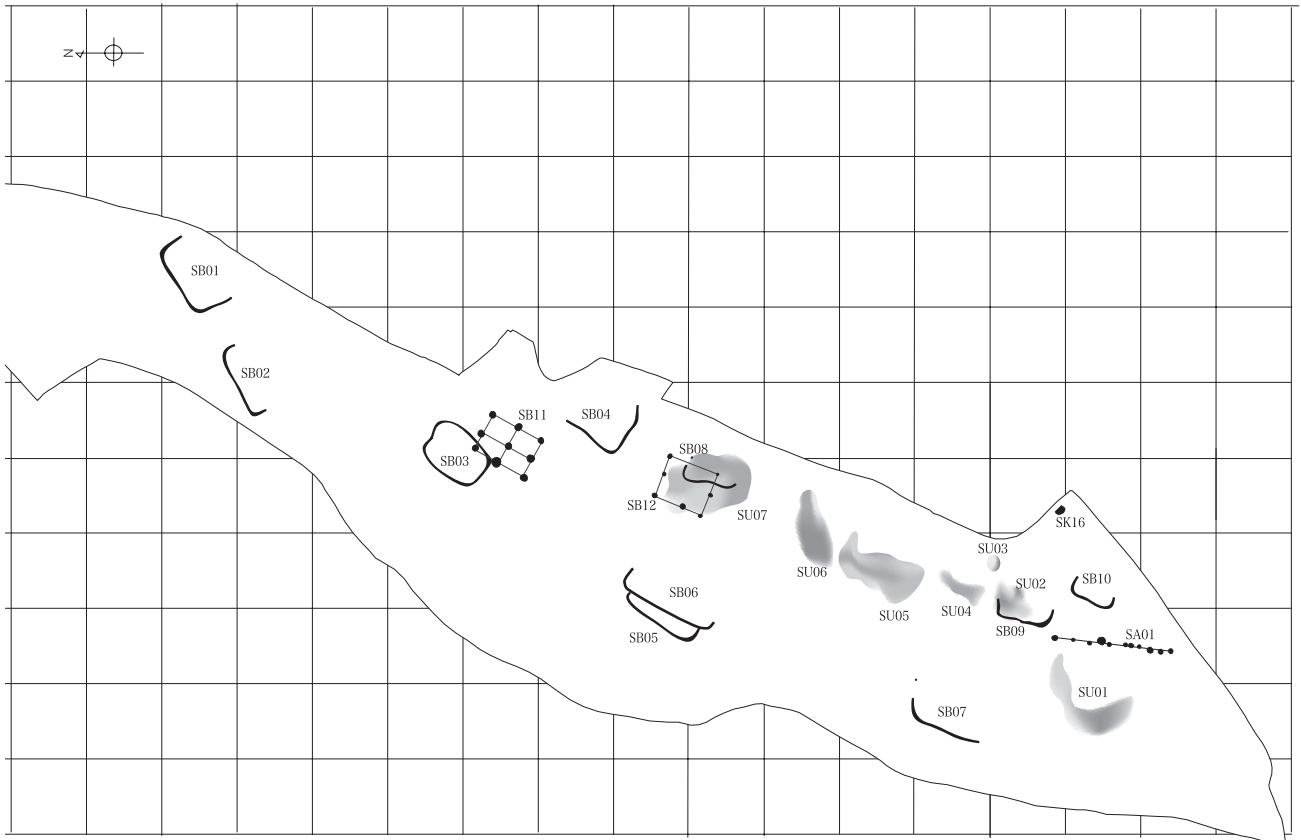
書土器は、『愛知県史』資料編4（城ヶ谷2010）に掲載された集成が現状では最新データと思われる。集成数は墨書土器が113遺跡他から918点、刻書土器が127遺跡（うち窯跡62）他から270点以上となっている。

ここから『卍』の墨書・刻書土器を探すと、墨書土器は若干確認できるが、刻書土器は瀬戸市上品野遺跡と東海市松崎遺跡の事例が知られているのみである（図4）。しかし、後者は形状がやや崩れたものとなっており、『卍』とは断定できないかもしれない。

上品野遺跡資料は壺Gで、刻書は外底部に確認できる。4本の直線のうち1本が短く、これは直交する1本とは交差しない（川添他2005）。松崎遺跡資料は坏H身で、やはり外底部で確認できる。時期がやや古く、線刻も交差部分が小さい。線刻は焼成後に施される（福岡他1991）。

以上の様に、今後資料が増加する可能性も存在するが、金萩遺跡で一般的な『卍』が、県下では特殊な事例である事を指摘しておきたい。

次にこれらの『卍』が、金萩遺跡では刻書土器である事に注目したい。これらの土器群は、特定の用途を想定して金萩遺跡で使用するために製作された容器である可能性が考えられる。



(1:500)

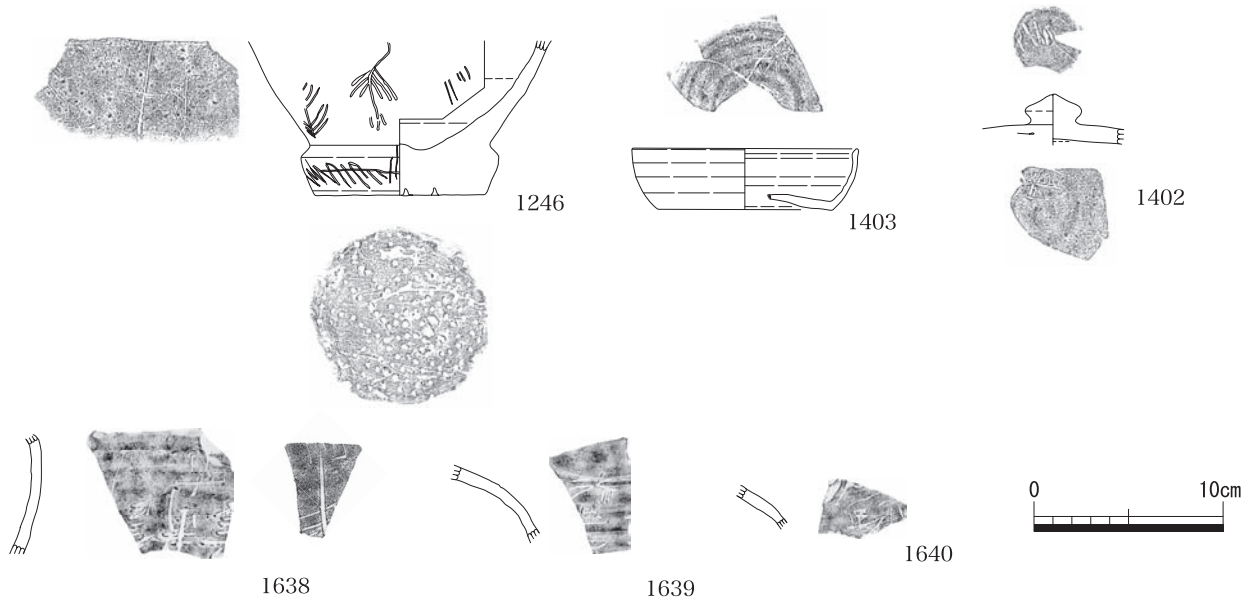


図2 金萩遺跡遺構・出土遺物（一部 池本2004より引用）

関連遺跡の検討

次に、金萩遺跡の猿投窯の集荷場としての性格を考える。猿投窯は窯跡の分布状況が水系単位で説明される事が多く（柴垣 1997）、流通には河川が利用された事が漠然と想定されている。ここでは、流通に河川が関わった事を前提

として、2つの遺跡に注目してみたい。

まず日進市三ヶ所遺跡であるが、この遺跡は金萩遺跡と同様の評価が付けられている。

遺跡の位置は、金萩遺跡から直線距離で約5 Km。行政区画では日進市浅田町字三ヶ所で、日進市立日進西中学校から東へ約400 m地点に位置している。遺跡は天白川左岸から南東約200 m地点の丘陵裾部に立地し、標高は約30

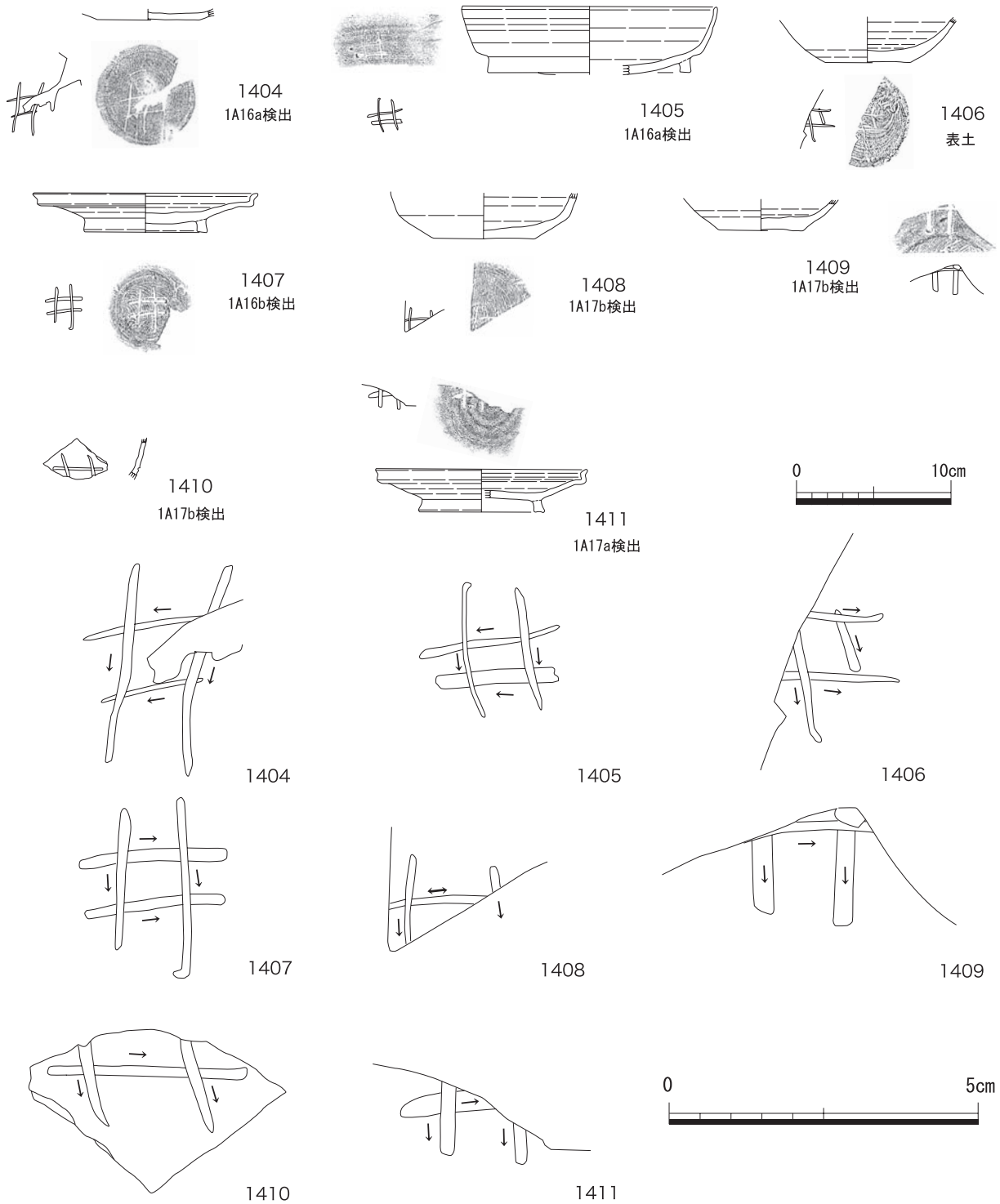


図3 金萩遺跡出土遺物 (一部 池本 2004 より引用)

m程度となる。金萩遺跡に近接する福井川は天白川の支流で、集荷場の設定が河川交通を前提とすれば三ヶ所遺跡と線上でつなげる事も可能となる。

三ヶ所遺跡の発掘調査は、道路建設を理由として平成13(2001)年～平成17(2005)年にかけて愛知県埋蔵文化財センターが実施している。調査面積は3600㎡で、報告書は平成

20(2008)年に同センターより刊行されている(永井 2008)。

報告書によれば、調査で確認できた遺構は大きく二時期に区分されているが、主体となるのは古代の遺構群で、溝・土坑などを中心とする(図5)。

検出された遺構で特徴的となるのは、調査区の南西部から微地形に沿ってSD101・102と

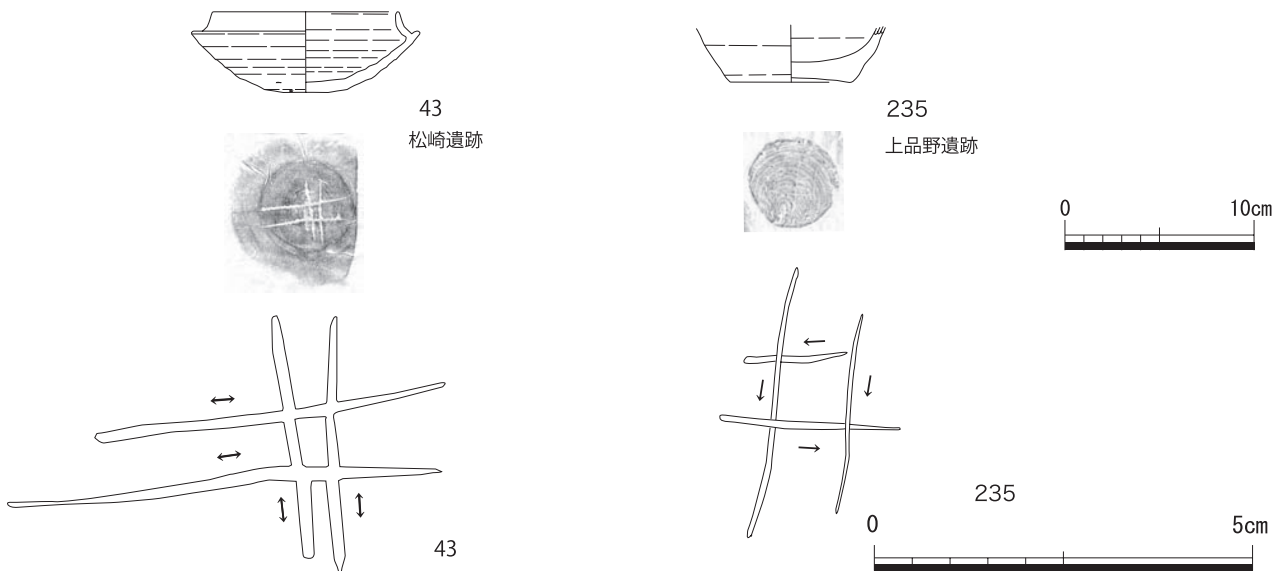


図4 松崎遺跡・上品野遺跡出土遺物（一部 川添他 2005・福岡他 1991 より引用）

命名された並行する二条の溝である。同時期の遺構の分布状況や版築状堆積が確認できないことから、道路状遺構である可能性は否定されている。SD101・102からは黒笹14号窯式期を中心とする焼成不良品や窯道具を含む出土遺物が多量に出土している。

図5に示した資料9点はいずれも窯道具のソクで、遺物番号は報告書を踏襲している。399は長頸瓶の頸部片を転用したものとなる。出土位置は71～74がSD101で、206・207がSD102、295・296はSD104と、窯道具は調査区の南西部に集中している。しかし、他の遺物も同様の傾向を示しており、窯道具のみの特殊性ではない。

ここでもう1つ注目できる遺跡が、八事小堂跡である（榎崎 1961）。行政区画では名古屋市昭和区八事富士見ヶ丘で、金萩遺跡から東南東へ約8Km地点に位置している。

この遺跡は天白川と植田川の合流点を南東に見降ろす丘陵頂部に位置している。標高は、75m程度となる。昭和35（1960）年に調査が実施され、東西50m、南北20m程度の平坦面から、火災を受けた東西2m、南北1m程度の小規模な建物跡、その前面には通路の遺構と推定される幅約1.3m程度の溝状の平坦部が検出されている（図6）。

出土遺物は、土器類や瓦類・金属製品などが報告されており、特徴的な資料として灰白軟陶で作られた火舎香炉や花瓶などの仏具が眼を引くが、緑釉緑彩の三足盤（1）も含まれている。

ここで注目したいのは火舎香炉（4・5）と花瓶（14）である。火舎香炉は密教で主として用いる香炉として知られている。また、花瓶は同じ形態のものが2点出土したと報告されるが、図示されている資料はいわゆる壺字形花瓶と呼ばれる密教独自の形態となる（岡崎他 1982）。緑釉緑彩の三足盤（1）は、猿投窯の白眉とも言える精製品となる。三足盤は仏具に限定できないだろうが、緑彩がモチーフとした法相華は言うまでもなく仏教に登場する架空植物である。

以上の様に、建物跡を出土遺物から検討すると密教と関連した小堂宇であったことが考えられる。時期は黒笹90号窯式期に属する。金萩遺跡の刻書土器よりやや下がり、平安時代に入ってしまうが、遺跡の位置や出土事例の極めて乏しい緑釉緑彩の三足盤の存在などを評価すると、猿投窯の流通に関わる祭祀施設と考えておきたい。

なお、これら三つの遺跡を結ぶラインの天白川と植田川の合流点よりもさらに西側には、現在『御器所』の地名がある。なお、図1に示す御器所の位置は、現在の名古屋市交通局地下鉄御器所駅を示している。

浅香年木氏は、この地名が『吾妻鏡』建久元（1190）年に登場し、少なくとも平安時代末までさかのぼる事や、その位置が猿投窯と熱田浜を結ぶ線上に位置する事から、猿投窯の尾張国衙の管理機構が存在した事を想定している（浅香 1971）。

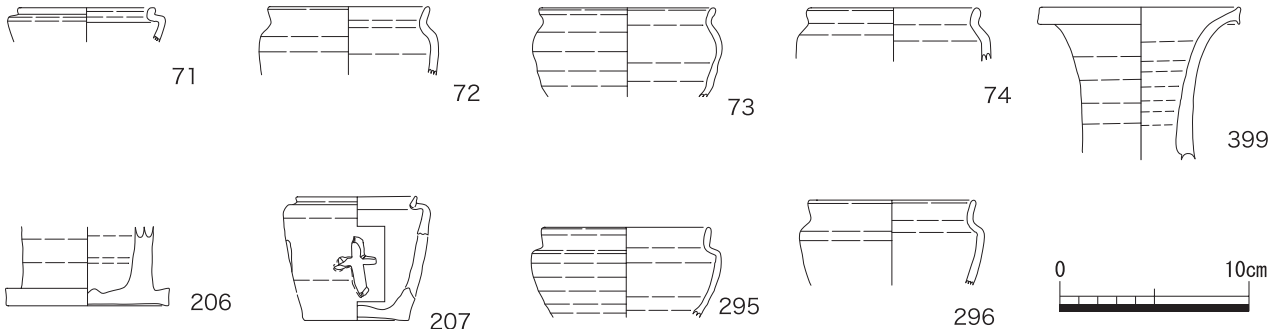
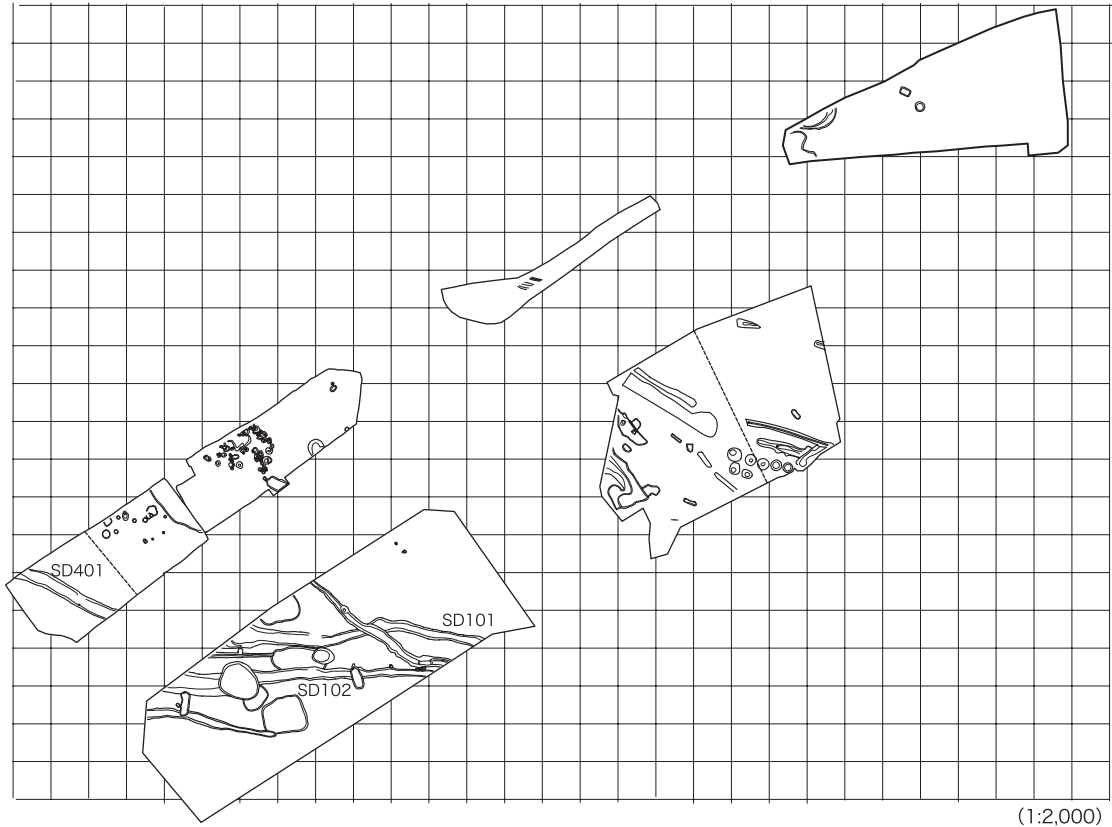


図5 三ヶ所遺跡遺構・出土遺物 (永井 2008 より引用)

猿投窯の流通と密教

次に注目したいのが金萩遺跡で特徴的に見られた『卍』の刻書土器である。

現在、記号としての『卍』は、陰陽道・道教的信仰・密教等の大陸起源の信仰に登場する九字の略号であることが指摘されている (平川 1991)。しかし、これらは通常は習合した形で存在しており、厳密に分離限定する事が困難な状況となっている。

このうち道教は日本には仏教とともに伝来し、いわゆる教団道教としては成立せずに断片化して登場 (=道教的信仰) するとされている

(和田 2006)。また、陰陽道は定義にバラツキがある様だが、もともとは陰陽五行説として仏教に随伴して日本に伝来したものである (下出 1997)。

一方、密教はもともと呪術性が強いため、類似する信仰と融合しやすい性格を内在させている。密教はインドにおいては仏教の中で顕著となるが、やがてヒンドゥー教に浸透し、ジャイナ教を成立させている (立川 1999)。中国では仏教の一部分として密教を導入するが、道教と融合し互いに影響を与え合ったことが指摘されている (坂出 1999)。

また、本稿で問題とする時期に近いもので陰陽道・道教的信仰に関わる資料の県下の事例

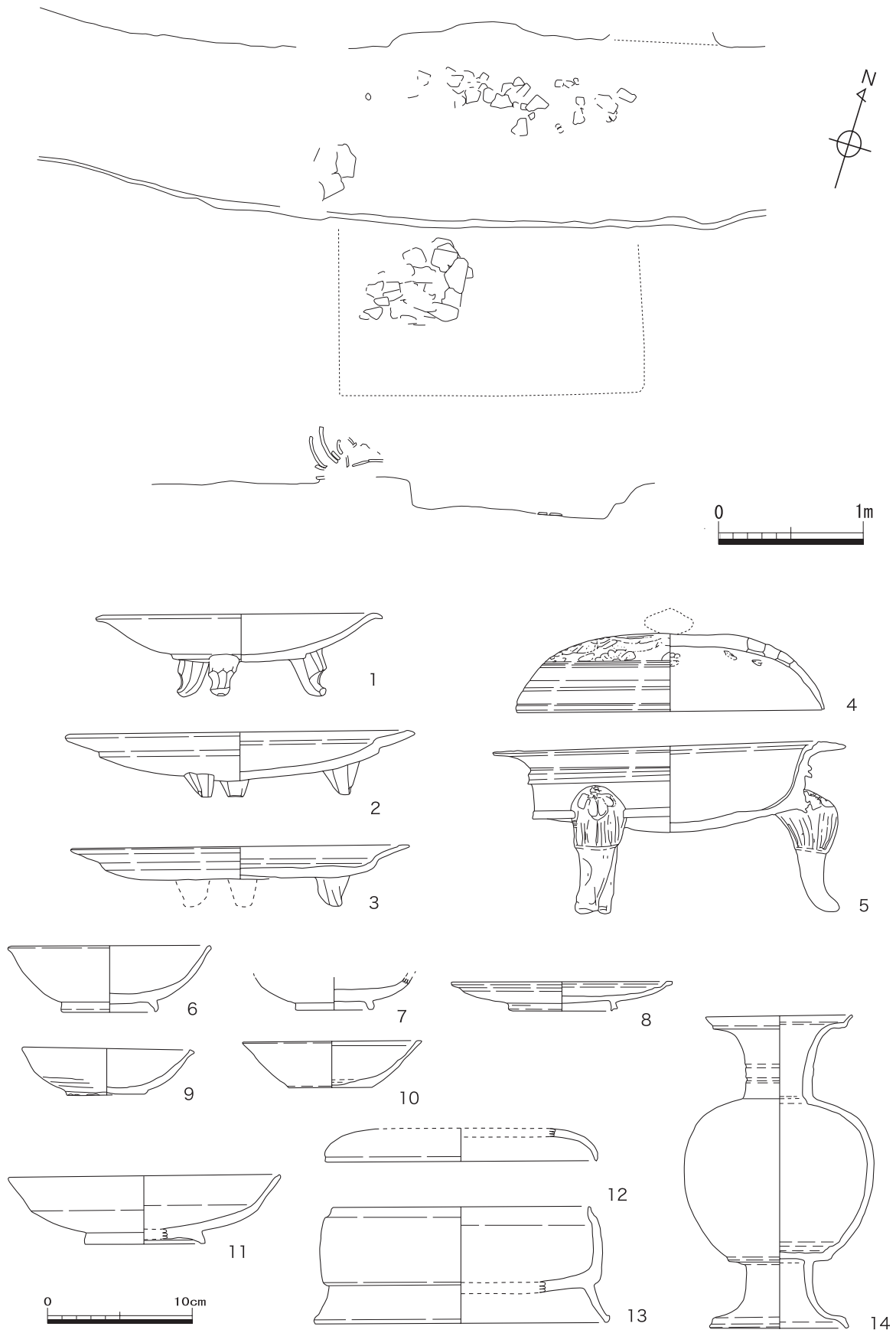


図6 八事小堂遺構・出土遺物（榑崎 1961 より引用）

を探すと、史料に『続日本記』延暦10(791)年9月条に尾張国等の七つの国に対して牛を殺して漢神を祭る事が禁止された記述が存在する他、出土品では8・9世紀に属する一宮市大毛沖遺跡呪符木簡(永井他 1996)や、いわゆる律令的祭祀関連遺物の一部に確認できる(鵜飼 2005)が、いずれも断片的となっている。

以上の点から、ここでは猿投窯の製品の搬出に律令制の関与が伺える事や、年代はやや下がるが天白川と植田川の合流点を南東に見降ろす八事小堂跡の存在なども考えて、金萩遺跡資料に密教との関わりを想定する。

ここで注目したいのが、『小右記』万寿2(1025)年の記載で、ここには災害により失われた大(太)元帥明王像とその仏具を補充するのに、尾張と美濃の土器を用いると記述されている。ここに登場する土器は大元帥修法と関わるものと考えられている(新井 1969)。

この史料の記述内容に、尾張・美濃の土器と阿闍梨が登場する事は注意したい。

日本で言う阿闍梨は、律宗でも用いられるが多くは密教の伝法灌頂を受けた僧を指す様である。一方、大元帥修法は鎮護国家を祈り修された修法で、密教の中では特別の修法として位置付けられている(中村他 1989)。こうした事から、『小右記』に登場する阿闍梨は密教の高僧を指すのであろう。

以上の様に考える事ができるのであれば、金

萩遺跡の刻書土器や八事小堂跡の出土遺物は、猿投窯の流通に関連した祭祀に伴う資料として位置付けられ、特に密教との関わりを指摘する事ができる。なお、八事小堂跡資料はやや時期が下がるが、特に折戸10号窯式を中心とする金萩遺跡資料は古密教と呼ばれる段階に属する。

古密教はかつて雑密と呼ばれ、空海により日本に持ち込まれたいわゆる純密以前の混沌とした信仰と評価されていた。しかし近年これが再評価を受け、実は奈良時代後半には変化観音教典を中心にかなりの数の密教教典が請来されていた事が指摘されている(頼富 2000)。また、南都六宗の教学を学ぶ一方で古密教の修法を行う僧侶が、七大寺にも多く存在していた様である(内藤 2005)。古密教が正当な評価を受けなかった背景には、空海の業績を評価するあまり、それ以前の密教に関心が持たれなかった結果であろう。

古密教は現世利益的呪術性を発揮して、猿投窯の製品流通に宗教的支援を実施していたものと推察できる。これは、猿投窯の生産と流通が律令制と関わり深いものであった必然とも言えるであろう。

県下における古密教段階の諸資は、現在ほとんど知られていない。金萩遺跡の刻書土器はこうした古密教関連遺物の実例としても重要となるだろう。

参考・引用文献

- 浅香年木 1971「平安期の窯業生産をめぐる問題」『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
 新井喜久夫 1969「文献に現れた尾張陶器」『いちのみや考古』第17号 一宮考古学会
 池本正明他 2004『金萩遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第119集
 鵜飼堅証 2005「愛知県内の古代祭祀関連遺物-律令期を中心に-」『考古遺物から見た古代三河』三河考古談話会
 岡崎謙治他 1982『仏具大事典』鎌倉新書
 川添和暁他 2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集
 坂出祥仲 1999「初期密教と道教との交渉」『中国密教』春秋社
 柴垣勇夫 1997「古代の窯業」『新修名古屋市史』第一巻 新修名古屋市史編集委員会
 下出積興 1997「陰陽道をめぐる問題」『日本古代の道教・陰陽道と神祇』吉川弘文館
 城ヶ谷和広 2010「墨書・刻書」『愛知県史』資料編4 飛鳥～平安 愛知県史編さん委員会
 立川武蔵 1999「インド密教の歴史的背景」『インド密教』春秋社
 内藤 榮 2005「古密教展概説」『古密教-日本密教の胎動-』奈良国立博物館
 永井宏幸 2008『三ヶ所遺跡・西田面遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第140集
 永井宏幸他 1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集
 中村 元他 1989『岩波仏教大辞典』岩波書店
 植崎彰一 1961「八事堂址」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会
 平川 南 1991「墨書土器とその字形-古代集落における文字の実相-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
 平川 南 2000「墨書土器と古代の地名」『墨書土器の研究』吉川弘文館
 福岡晃彦他 1991『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集
 松本仁志 1998「筆順史研究の構想」『広島大学学校教育学部紀要』第II部 第20巻
 頼富本宏 2000「日本密教の成立と展開」『日本密教』春秋社
 和田 萃 2006「道術・道家医法と神仙思想-道教的信仰の伝来」『列島の古代史ひと・もの・こと7 信仰と世界観』岩波書店

守山区金屋遺跡について

● 川添和暁・鬼頭 剛

本稿では、名古屋市守山区金屋遺跡の資料紹介を行なう。正式な発掘調査は行われていないが、遺跡確認調査の結果、古代・中世の集落跡である可能性を提示した。守山区ではこれまで台地上でしか遺跡の確認ができていなかった。今回、庄内川・矢田川に挟まれた沖積地内の微高地上に立地する本遺跡を確認したことにより、古墳時代以降の地域史研究に新たな考古学的知見を加えることとなった。

はじめに

本稿は、名古屋市守山区金屋遺跡の資料紹介である。遺跡発見などの経緯は、以下に述べる通りであるが、近い将来に調査の予定はないと考えられる。今回行なった確認調査は体制が不十分ではあったものの、遺跡の立地など、当地域の古墳時代以降の地域史を考える上で極めて重要と考え、ここに成果を掲載するものである。

遺跡の発見の経緯および遺跡・遺物の報告は川添が行なう。併せてこの遺跡では、地質調査をも行っている。その成果をもとに、地質学的な見解については鬼頭が行なった。

金屋遺跡の立地と環境

遺跡は、名古屋市守山区金屋一丁目地内に所在する(図1)。付近は熟田層に相当する守山面(中位段丘)が東から西側に向って傾斜する場所にあたり、遺跡はより西側、段丘下の沖積地に形成された微高地上に立地する。遺跡の立地する地番の標高は現況で約11.5mである。当地は、旧来より畑地であったものの、戦後の区画整理および昭和30年代以降の宅地化により、周辺の景観が急変したようである。

周囲には、縄文時代以降の遺跡の分布が認められる(図2)。庄内川を挟んだ約4.5km北側には、縄文時代中期の土器などが出土した町田遺跡がある。守山面には、縄文時代晩期の土器棺墓・土坑墓・竪穴建物跡および多量の遺物



図1 金屋遺跡の位置
(国土地理院2万5千分の地形図「名古屋北部」より)

を含む包含層が見つかった牛牧遺跡が、西へ約3km行った段丘端部にある。さらに北東へ約5kmの同じ丘陵上には、弥生前期の土器棺墓が見つかった、川東山遺跡がある。また、弥生時代の遺跡としては、同じ丘陵上に西城遺跡、庄内川の対岸には松河戸遺跡、矢田川の対岸には長母寺遺跡がある。古墳時代の遺跡としては、守山面上には守山白山古墳が認められ、庄内川対岸にも二子山古墳など古墳群の群集が認められる。また、古代以降の遺跡としては、小幡廃寺や勝川廃寺があり、さらに中世の遺跡としては、矢田川を挟んだ南東の丘陵部に、H-G-5 窯跡をはじめ、山茶碗類窯跡群が存在している。

これらの遺跡の大多数は、丘陵上に立地しており、沖積部に遺跡の範囲が確認できる遺跡としては、庄内川北側の松河戸遺跡、矢田川南側の大幸町遺跡、そして今回報告する金屋遺跡である。特に、庄内川・矢田川に挟まれた地域では、初めての遺跡確認となり、その存在意義は大きい。

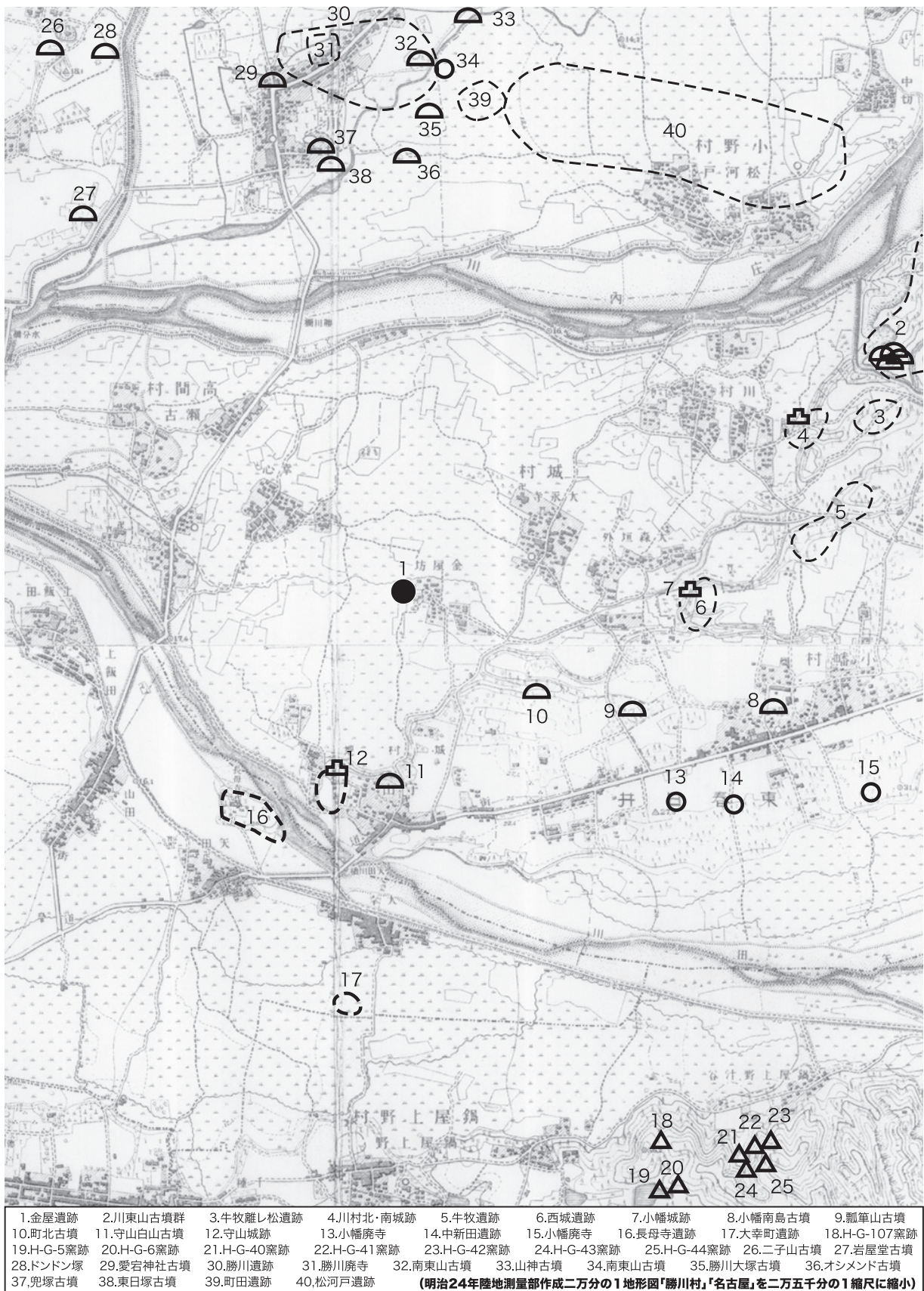


図2 金屋遺跡および周辺の遺跡位置図

遺跡発見の経緯と経過

遺跡周辺はJR中央本線と、大曽根駅からのガイドウェイバス路線の間に位置しており、住宅街の中に位置する。しかし、所々現在も開発が及んでいない場所が点的に認められるのも、当地域周辺の状況であり、金屋遺跡もそのような場所から見つかった。

筆者が当地を初めて訪れたのは、平成22(2010)年の2月である。当地は畑地で、果樹などの樹木も多く茂っていたということであったが、来跡時には、樹木も伐採されており、開けた状態になっていた。地表には、畑の畝などに陶器・土師器細片が多数散乱しているのを観察することができた。

当地は、農地の生産緑地指定解除に伴い、一部開発の予定が立てられていた。当地には、これまで遺跡所在の登録がないため、まず表面から採集された遺物の状況が果たして遺跡の存在によるものかの確認を行なう必要があった。ここで、土地の所有者である服部ますみ氏に相談の上、より詳細な調査を行なう了解を得て、生産緑地指定が解除された以降の4月11日と18日の両日に調査を実施した。

調査の詳細な結果は次章に述べるが、遺構な

どの検出により、遺跡の存在が明らかとなった。5月18日に名古屋市教育委員会文化財保護室の伊藤正人氏にご来跡頂き、新規発見遺跡の確認がなされた。その後、名古屋市教育委員会から平成22年8月11日付で、金屋遺跡の愛知県埋蔵文化財包蔵地台帳への新規記載協議が行なわれ、県教育委員会からは8月23日付で名古屋市教育委員会あてに新規記載した旨の通知が出た。

開発行為は、個人住宅の建築に伴うものである。基礎部分の土盛りと杭方向の導入による工法変更により遺跡の保護を図ることを条件に、文化財保護法第93条第1項に基づく届出に対して、基礎工事時などには立会調査を行うこととなった。文書は、名古屋市教育委員会から「22教文第2-78号」で、平成22年9月2日付けの通知文が出された。

また、9月にはボーリングによる地質調査が行われた。

調査概要

9月の立会では、包含層までの掘削が進行していないことの確認と、遺物の採集が行なわれたのみである。ここでは4月の調査の概要について報告する。

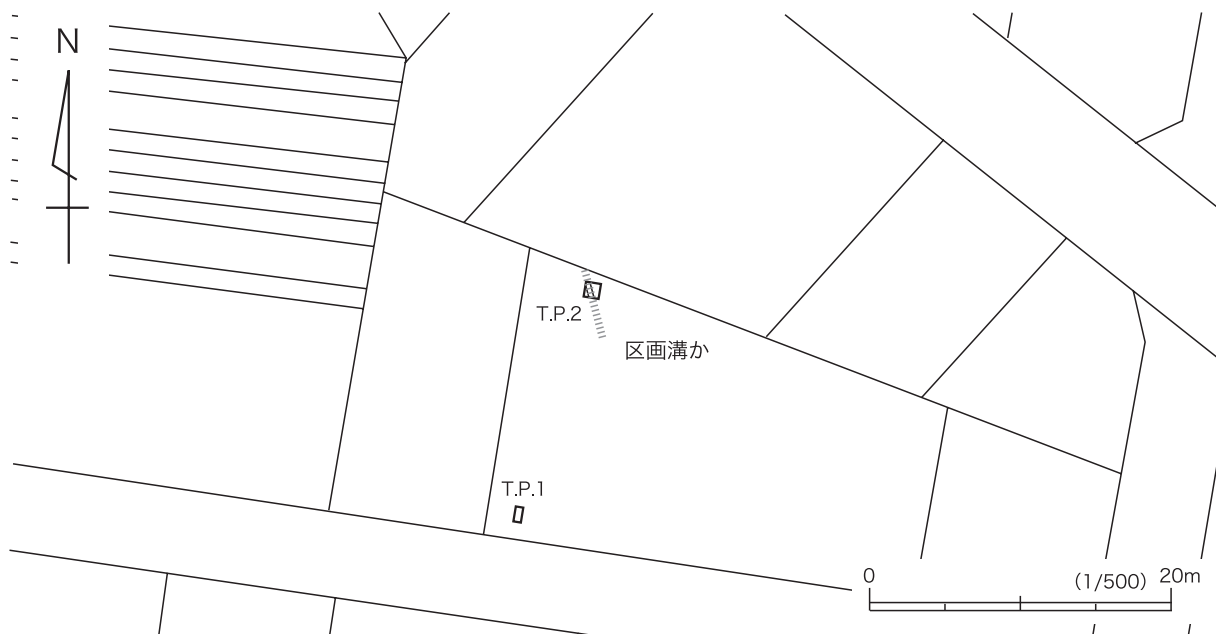


図3 金屋遺跡調査区設定図

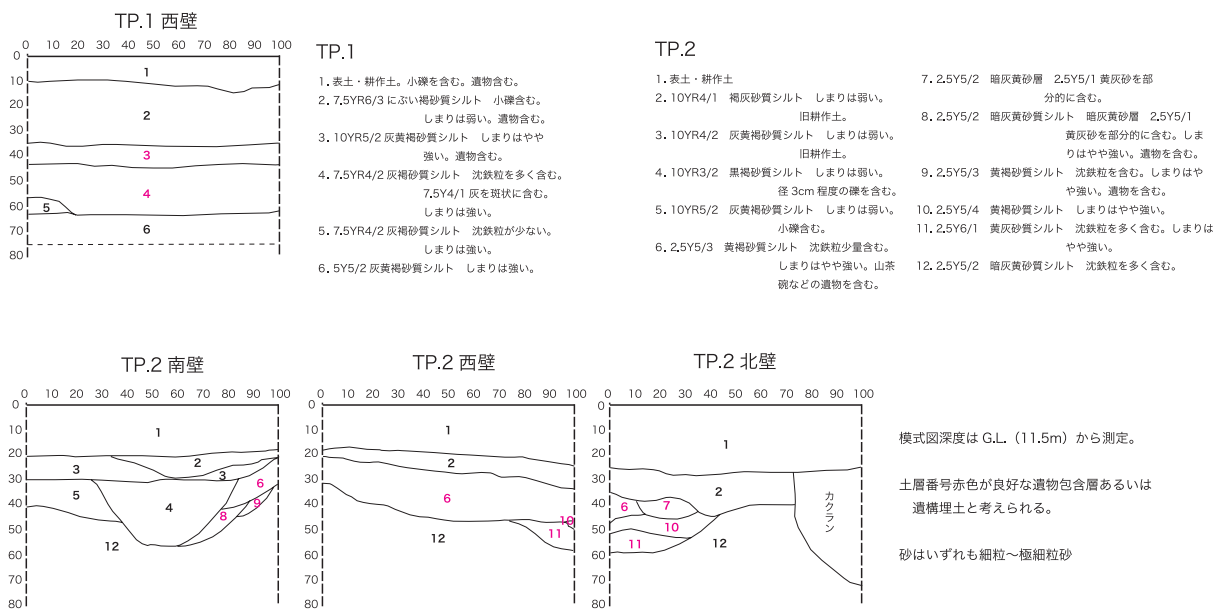


図4 金屋遺跡調査区層序模式図 (1/30)

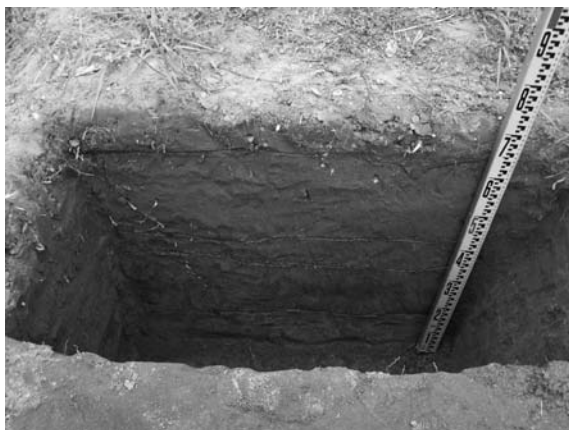


写真1 T.P.1 西壁 (東より)

調査は、対象地域内に、2ヶ所の試掘坑を設定して行なった。試掘坑の設定には、後世の攪乱などが認められる地点を利用した。開発行為が行なわれる予定の西側を中心に行ない、市道に面する南側をT.P.1(0.5×1m)、北側をT.P.2(1×1m)と呼称・設定した。調査区平面を図3に、土層堆積状況などを図4に示す。

T.P.1では、地表から約35cmにわたる表土および耕作土の下に、約30cmの堆積で、遺物包含層を確認することができた。地表下65cmのレベルで、しまりの強い無遺物層に達した。以上の堆積はほぼ水平堆積を呈している。T.P.1からは図5の1と4が出土した。

T.P.2では、地表から30～40cmの表土および耕作土の下に、約20cmの堆積で遺物包含



写真2 T.P. 南壁 (北より)

層を確認できた。この土を埋土とする、北西—南東方向の溝を検出することができ、検出レベルからの深さは約35cm、断面形状U字状を呈するものである。T.P.2の8層からは、図5の2が出土した。

出土遺物

筆者は、須恵器片16点、山茶碗など中世陶器片21点、土師器片27点、播鉢など近世陶器片9点、土製品1点、石器1点を採集した。また、名古屋市教育委員会の方でも須恵器10片・山茶碗20点ほど採集されている。多くは細片となっているものの、筆者が採集した遺物のうち、図化可能な資料のみを7点提示する。

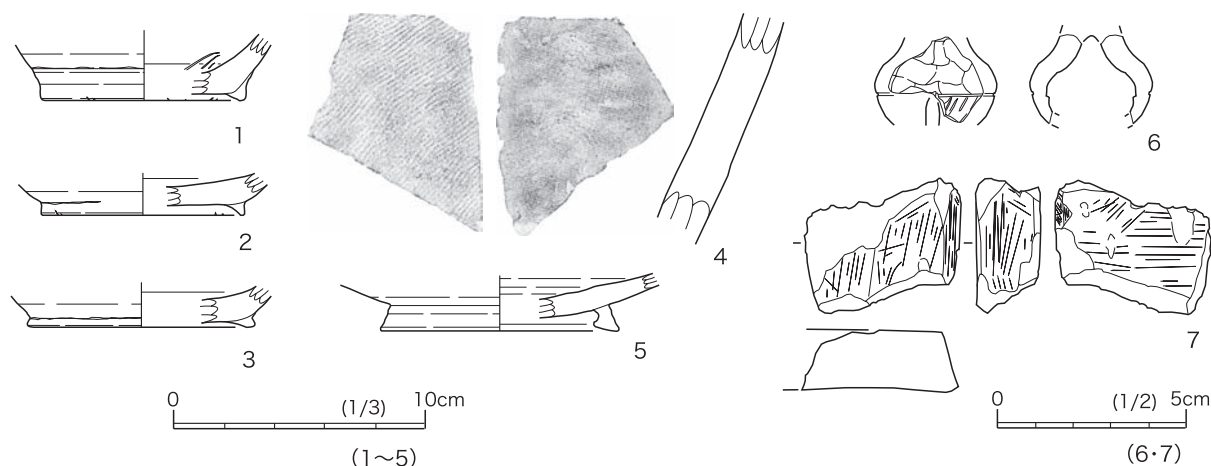


図5 金屋遺跡出土遺物

図5の1～3は中世山茶碗類の碗底部である。1・2は底部にモミ圧痕が若干認められる程度であり、3の底部には認められない。1の内面には卸目とも考えられる櫛描状の痕跡が確認できる。4・5は古代須恵器。4は大甕胴部片である。5は椀あるいは盤の底部で折戸10号窯式に属するものと考えられる。6は土鈴と考えられる。胴部横方向に細い沈線が巡り、その下部には斜方向の連続沈線が施されているものである。7は砥石で、断面形状が直方体を呈しており、表面には他方向に擦痕が認められるものである。砂質凝灰岩製。

若干の考察

T.P.2で確認できた溝は、掘り方が安定しており、埋土から山茶碗が出土したことから、遺構中世期には集落が形成されていたと考えてよいであろう。但し、出土遺物で見たように、この金屋遺跡では、古代の須恵器・灰釉陶器片も数多く採集されており、今回、遺構の検

出はできなかったものの、古代においても集落跡など、人為的活動の場であったことは想定してよいであろう。特に土鈴の出土は、遺跡の性格を考える上で興味深い。今回の資料のみでは、古代・中世ともに、当時の集落景観の復元には到底及ばない情報量でしかないが、古代以降の沖積地への活動の活発さを語るには充分であると考えている。

問題は、この沖積地上の微高地がいつの段階で形成されたのかである。この点を含めて、地質学的な所見を以下に記す。(川添和暁)

金屋遺跡におけるボーリングコアの層序記載

掘削調査は名古屋市守山区金屋において、2010年(平成22年)に兼松日産農林株式会社(現場:村田 誠、報告書:飯岡 浩)により地表面の標高11.50mから標準貫入試験併用で実施されたものである。主な地層から層厚30cmごとに土質標本として管ビンに入れられている。その管ビンの試料を用いて堆積物の観

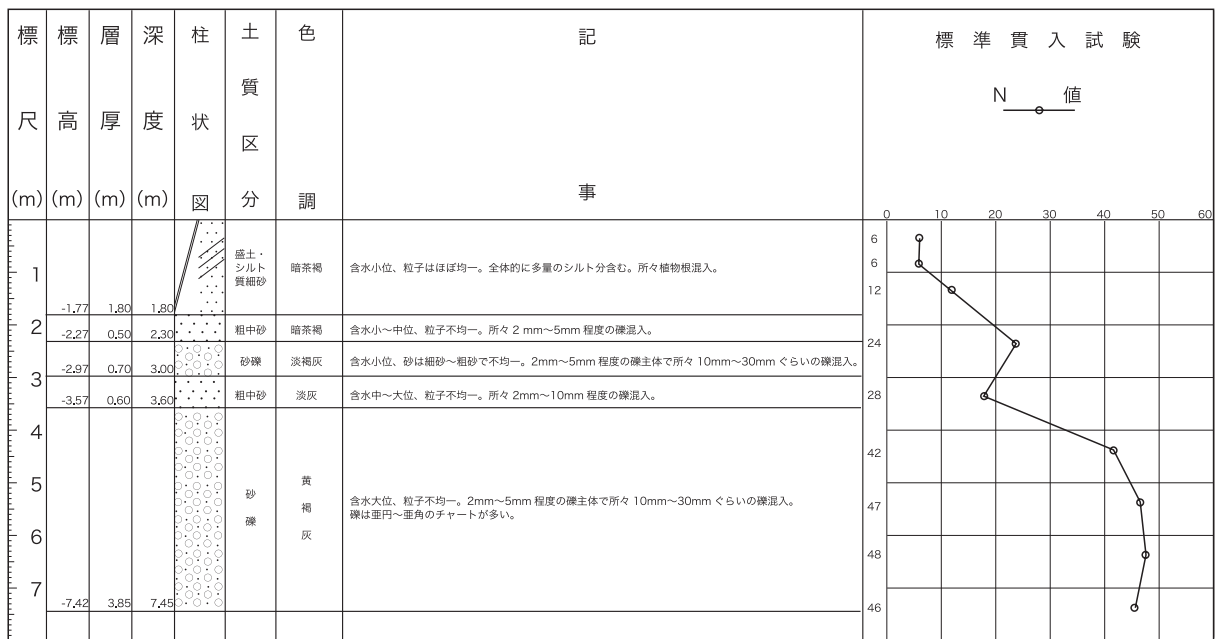


図6 金屋遺跡ボーリング柱状図

察と試料の採取を行なった。なお、掘削はオールコアではないため、層序区分にあたってボーリング柱状図を参考にした(図6)。下位層の試料から順に記載する。分析に供した試料の試料番号は便宜的に下位層のものから若い番号をつけた。

標高 4.05 ～ 7.90m は層厚約 3.9m の中礫層である。基質にシルトを含み、地層は全体ににぶい黄色 (2.5Y6/4: マンセルの表記。標準土色帖を使用。以下同じ)、明黄褐色 (2.5Y6/6)、黄褐色 (2.5Y5/3) と、全体に黄色を帯びている。平均粒径が 10mm 程度の角礫～亜角礫層で、最大礫径は 30mm のものがみられる。基質の量は少なく礫支持礫層である。礫種としてチャート、濃飛流紋岩や石英粒子がみられる。含水量は多い。本層から試料 1 (標高 4.05 ～ 4.35m (深度 7.45 ～ 7.15m))、試料 2 (標高 5.05 ～ 5.35m (深度 6.45 ～ 6.15m))、試料 3 (標高 6.05 ～ 6.35m (深度 5.45 ～ 5.15m))、試料 4 (標高 7.05 ～ 7.35m (深度 4.45 ～ 4.15m)) の 4 つの管ピン試料が採取されている。

標高 7.90 ～ 8.50m は暗灰黄色 (2.5Y5/2) の粗粒砂～中粒砂層からなる。礫径 2 ～ 10mm の礫を含み、最大礫径 20mm のものもみられた。砂層の淘汰はあまり良くなく、含ま

れる礫には角礫や亜角礫が多い。礫種としてチャート、濃飛流紋岩や石英粒子がみられる。含水量は多い。本層からは試料 5 (標高 8.05 ～ 8.35 (深度 3.45 ～ 3.15m)) の管ピン試料が採取されている。

標高 8.50 ～ 9.20m は暗灰黄色 (2.5Y5/2) の中礫層である。基質にシルトや極粗粒砂や中粒砂を含む角礫～亜角礫からなる。標高 9.20 ～ 9.70m はにぶい黄褐色 (10YR4/3) の極粗粒砂～中粒砂層である。本層から地層中の含水量が減少し、全体に乾燥が進んでいる。最大礫径 15mm の角礫もみられた。本層とその直下の地層を、地層境界を含めて標高 9.05 ～ 9.35m (深度 2.45 ～ 2.15m) から一括された管ピン試料が採取されている (試料 6)。

標高 9.70 ～ 11.50m はにぶい黄褐色 (10YR4/3 ないし 10YR5/3) のシルト質細粒砂層からなる。全体にシルト成分が多く、淘汰は不良である。礫は含まれず、塊状である。本層上部には石英や長石の堆積粒子に混じり、植物片がみられる。本層の頂部が現在の地表面となる。本層からは試料 7 (標高 10.05 ～ 10.35m (深度 1.45 ～ 1.15m))、試料 8 (標高 10.55 ～ 10.85m (深度 0.95 ～ 0.65m))、試料 9 (標高 11.05 ～ 11.35m (深度 0.45 ～ 0.15m)) の 3 つの管ピン試料が採取されている。金屋遺跡で

は地表から標高 10.9～11.2m（深度 0.60～0.30m）が遺物包含層であるとの調査結果である（図 4）。この所見からすると、試料 9 が遺物包含層に関する試料となる。金屋遺跡の地下層序は中礫層と砂層との互層の上をシルト質細粒砂層が覆うという上方細粒化傾向を示しており、管ピン試料として合計 9 試料が採取された。

火山灰分析の分析結果

ボーリングコア掘削により採取された管ピン試料を用いて、地下層序の堆積年代を得るために火山灰分析を行なった。火山ガラスの抽出と屈折率の測定は株式会社古澤地質の古澤明氏にご協力いただいた。今回は定性分析の結果のみを示す。

火山灰分析の試料は洗浄・篩別して極細粒砂サイズ（1/16～1/8mm）に粒度を調整し、火山ガラスの含有率と屈折率を測定した。屈折率は温度変化型測定装置 MAIOT（古澤，1995）を使用した。

9 試料のうち、最も下位にある標高 4.05～7.90m の中礫層の最下部から採取された試料 1（標高 4.05～4.35m（深度 7.45～7.15m））には火山ガラスがまったく含まれていなかったが、それ以外（試料 2～9）のすべての試料から火山ガラスが確認された。すべての試料において検出される火山ガラスの量は計数 3000 粒子中に 10 数個程度と少ないものの、地表に近い深度約 1.5m 付近で採取された試料 7（標高 10.05～10.35m（深度 1.45～1.15m））には火山ガラス含有率のスパイクが認められた。検出された火山ガラスの屈折率には 1.494-1.499、1.500-1.507、1.510-1.516 のものがあった。ガラスの付着した角閃石も見られた。試料 7 よりも下位層から採取された試料にも火山ガラスが少量ではあるが含まれていた。標高 4.05～7.90m の中礫層から採取された試料 2（標高 5.05～5.35m（深度 6.45～6.15m））、試料 3（標高 6.05～6.35m（深度 5.45～5.15m））、試料 4（標高 7.05～7.35m（深度 4.45～4.15m））と、標高 7.90～8.50m の粗粒砂～中粒砂層から採取された試料 5（標高 8.05～8.35（深度 3.45～3.15m））からは

1.495-1.508 の範囲の広い屈折率をもつ火山ガラスが検出された。

測定された火山ガラスの屈折率から推定すると、試料 7（標高 10.05～10.35m（深度 1.45～1.15m））の 1.500-1.507 の値は大山笹ヶ平火山灰（DSs）および大山東大山（DHg）からなる大山火山より噴出した火山灰に対比されるが、それぞれの詳細が不明であるため、今回は大山ホーキ火山灰として一括した。なお、それらの噴出年代は約 2 万 4 千年前の噴出年代をもつ始良 Tn 火山灰（AT）（村山ほか，1993）の降灰直後と推定されている。1.494-1.499 と 1.500-1.507 の値の一部が約 3000 年前の噴出年代の伊豆カワゴ平火山灰（Kg）（町田ほか，1992；西田ほか，1993）にあたる。同じ層準（試料 7）から新旧の異なった火山ガラスが検出されたが、古い年代を示す火山灰は上流からの二次的な混入とも考えられるため、新しい年代の火山灰を考慮すれば、金屋遺跡の地下層序の上部は伊豆カワゴ平テフラ（Kg）の降灰時期を示す縄文時代晩期以降に堆積したものである。なお、試料 2～5 の火山ガラスのもつ 1.495-1.508 という値は屈折率の範囲が広すぎて給源火山を特定できない。

金屋遺跡の地形・地質環境の検討

庄内川・矢田川流域における名古屋市の地下地質は、全体に砂層や礫層と粘土層との互層からなり、下位層より東海層群（第三紀）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）の第三系～第四系の堆積物から構成される。地形分布は丘陵地～高位段丘が中部更新統、中位・低位段丘が上部更新統、沖積低地は上部更新統最上部～完新統からなる。金屋遺跡の調査地点から南へ約 0.6km には守山城跡、南東約 0.8km に町北古墳、同じく南東約 1.2km に瓢箪山古墳などの遺跡が知られており、上部更新統の熱田層からなる守山台地の北方縁辺に並んでいる。金屋遺跡の調査地点は台地の縁辺近傍の沖積低地にあたる。ところで、同じ庄内川・矢田川流域の沖積低地にある遺跡で、金屋遺跡から約 4.5km

西の矢田川左岸にある志賀公園遺跡では、標高 1.92m の黒色粘土層の土壌試料が 2945、2935、2925 cal yrs BP(PLD-2330) の年代値を示し、縄文時代晩期頃には氾濫原であったことがわかっている(鬼頭, 2004)。金屋遺跡の火山灰分析でも縄文時代晩期頃の伊豆カワゴ平火山灰(Kg)が検出されたことにより、台地近傍の沖積低地でも縄文時代晩期ごろに流域を埋積する堆積作用が生じていたことがわかる。また、志賀公園遺跡の地下層序の層相と比べると金屋遺跡では礫を主体とする粗粒な堆積物が卓越しており、河川の上流部の堆積相を示している。今回の調査により地表から深度 0.60m にかけて古代の遺物が出土したことから、少なくとも縄文時代晩期以降の粗粒な堆積物を運搬できるような水理学的に高エネルギーの環境から、古代よりも前に低エネルギー環境に移り変わり人為活動が行なわれたことがわかった。金屋遺跡のボーリングコア資料は、詳細の不明な庄内川・矢田川流域における沖積低地の地下層序を知るための貴重な情報となった。(鬼頭剛)

まとめと今後の課題

鬼頭報告にあるように、金屋遺跡の立地する沖積地は、縄文時代晩期以降かつ古代より以前までの埋積する堆積作用によって大きく形成されたことが明らかとなった。伊豆カワゴ平火山灰(Kg)が検出されたのは、地表からの深度

1.15m 以下の試料 7 からであり、図 4 で示した自然堆積層および遺物包含層は、いずれもそれ以降の所産ということになる。今回の金屋遺跡の調査では、古代の遺物がまとまって採取されているが、付近の沖積地の利用がいつの段階まで遡るのかが、もしも可能であれば今後究明すべき課題であろう。なお、当地が縄文時代晩期以降には粗粒な堆積物を運搬できるような水理学的に高エネルギーの環境であったとするならば、西約 3km の台地端に立地する牛牧遺跡の遺跡形成様相をも含めて、より広域な自然環境的景観を復元するための重要な一事象となると考えられるのである。(川添和暁)

謝辞

本稿を草するにあたり、名古屋市教育委員会文化財保護室の伊藤正人氏には、遺跡立会から本稿の掲載まで、多方面でご教示・便宜を賜った。また、調査するにあたり、土地を管理・所有している、服部和孝・ますみ・明日香諸氏には、幅広いご理解とご協力を賜った。また、村井みよ氏にも、開発前の周辺地域の様相についてご教示を賜った。ノイトラッツ建築設計の川島勝久氏には、地質調査結果の掲載などで便宜を図って頂いた。さらに、灰釉陶器の年代などについては、城ヶ谷和広氏にご教示賜った。株式会社古澤地質の古澤明氏には火山ガラスの抽出・測定および中部地方の降灰火山灰についてご教示いただいた。記して感謝を申し述べる次第である。

参考文献(鬼頭報告分のみ)

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
 鬼頭 剛, 2004, 庄内川低地, 志賀公園遺跡における堆積環境, 愛知県埋蔵文化財センター第 121 集「志賀公園遺跡 II」, 愛知県埋蔵文化財センター, 22-28.
 町田 洋・新井房夫, 1992, 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討・タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代-, 地質雑, 99, 787-798.
 西田四朗・高橋 豊・竹村恵二・石田志朗・前田保夫, 1993, 近畿地方へ東から飛んできた縄文後・晩期火山灰層, 第四紀研究, 32, 129-138.

小牧山城とその城下町の土師器

● 鈴木正貴

尾張国を掌握した織田信長は、天下統一を成し遂げるために拠点を清須から小牧、岐阜、安土へと移動した。これらの移転は城下町建設を伴うことが明らかになってきたが、本稿ではその移動の実像の一端を、小牧山城関連の発掘調査で出土した土師器を通して検討した。その結果、土師器生産者は清須から小牧へ移動した可能性が高いが、小牧から岐阜には移動せず一部を除き再び清須に移転したことが推測された。そのあり方は信長の動きとは連動しないことが判明した。

はじめに

永禄6年(1563)に織田信長は自身の拠点を清須から小牧に移転した。小牧は美濃国攻略の足掛かりとして選地されたとみられるが、実際には山麓に広大な城下町の建設を伴うものであった。そして永禄10年(1567)に美濃攻略が実現すると、次は拠点を岐阜へと移した。天下統一に向けて京都を視野においた移転であろう。そして、最終的には安土に至ることとなる。

こうした1560年代以降に信長が実施した拠点の度重なる移動の実態を明らかにし、それぞれの移動の目的やその度に達成された変革の実像を考察することは、織田信長政権を考える上で基礎的な作業の一つになると思われる。そこで、本稿は、尾張国内の拠点の移動の実像を探るための足掛かりとして、小牧と清須から出土した土師器を検討することとした。

研究史

小牧に広大な城下町が存在することを学術的に再評価したのは、前川要(前川1988)と千田嘉博(千田1989)である。この研究成果を受け、小牧市教育委員会は市内の遺跡詳細分布調査(小牧市教委1990)や発掘調査を行い、ほぼ千田が想定した城下町の範囲において16世紀後半の遺構や遺物が発見されることが判明してきた。この結果、小牧越しは決して臨時的な移転ではないことが明らかになったといえ

る。小牧の発掘調査は、山城部分や山麓部分そして城下町部分とさまざまな地点で発掘調査が行われており、多くの成果が出ている。その発掘調査歴は表1にまとめておく。

一方、小牧へ移転する前の清須についても発掘調査や研究が進んでいる。清須に関する研究史はここでは省略するが、清須から小牧への移転の実態を出土遺物から最初に考察したのが、筆者の研究(鈴木2001)であった。そこでは瀬戸・美濃窯産陶器の時期別組成を、各遺跡の段階ごとに整理したのだが、時期別組成のピークとなる時期を順に並べると清須A群(典型的な清須前期)→小牧群→清須B群(天正地震直前)→清須C群(典型的な清須後期)となるこ

表1 小牧山城関連の発掘調査歴

地区	遺跡名・位置	調査	調査年度	文献(発行年)
主郭地区		試掘調査	平成16年度～平成19年度	2005～2008
		発掘調査	平成20年度～	2009～
帯曲輪地区	勝手口東部	緑地整備第1次調査	昭和61年度	1990
	南西部	緑地整備第2次調査	昭和61年度	1988
	勝手口西部	緑地整備第3次調査	昭和62年度	1990
	勝手口東部	駐車場用地ほか	昭和63年度	1990
	屋敷跡伝承地		昭和63年度	1990
	北部	柔剣道場用地	昭和63年度	1989
	東麓	旧中学校用地	平成10年度～平成14年度	1999～2002
城下町地区		市内詳細分布調査	昭和63年度～平成元年度	1990
	新町遺跡	試掘調査	平成6年度	1998
		第1次調査	平成7年度	1998
		第2次調査	平成7年度	1998
		第3次調査	平成8年度～平成9年度	1998
		土地売買関連	平成18年度	2008
		第4次調査	平成19年度	2009
	上御園遺跡	国道拡幅関連	平成3年度	1992
		共同住宅関連	平成13年度	2002
		確認調査	平成15年度	2008
		第1次調査	平成16年度	2008
		第2次調査	平成17年度	2008
		第3次調査	平成18年度	2008
	上鍛冶遺跡	共同住宅関連	平成8年度	1997
	小牧池田遺跡	道路改良	平成9年度	1998
	仮称小牧城下町遺跡	市庁舎建設	平成18年度	2008

とを明らかにした。この他に、土師器についても、丸耳で鏝付きの土師器釜A類（清須前期）→丸耳で鏝無しの土師器釜B類（小牧）→板状耳で鏝無しの土師器釜C類（清須後期）という流れを予察している（鈴木2001）。

次に、16世紀後半の尾張地域の土師器の研究史を簡略的に振り返っておきたい。まず、土師器皿については、最初に佐藤公保が中世尾張における概要と編年を明らかにした（佐藤1986, 佐藤1987）。その後、一宮市域を中心に土師器の変遷を明らかにした武部真木（武部2001）や小型非ロクロ成形土師器皿を詳細に検討した佐藤公保（佐藤2002）は、それぞれ小地域による土師器の多様性を明らかにしてきた。これらの研究を受け、筆者は東海地方の土師器を含めた遺物様相は階層的な地域相にまとめることができ、尾張地域（中地域）の中でも細かな違いを持ついくつかの小地域の土器様相が存在することを指摘した（鈴木2005）。こうした状況の中、尾張でも個別の遺跡についての詳細な分析がいくつか存在する。清須出土土師器については筆者の3期6段階区分（鈴木1995）を基本にして、特に土師器皿に関しては蟹江吉弘（蟹江1996）、早野浩二（2005）らが多く知見を加えている。小牧出土土師器皿については、発掘調査成果を整理する中で小型非ロクロ成形土師器皿を中心とした分類案が提示され、法量などが検討されている（中嶋1998・水野2008）。ただし、この両者を有機的に結びつけて論じた研究はこれまでに行われてこなかった。

次に、中世尾張の土師器煮炊具について研究史を概観すると、最初にその全体像を整理したのが北村和宏であった（北村1996）。その前後には、清須城下町出土資料を中心に筆者もいくつかの論考を提示した（鈴木1994・鈴木1996他）。一方、小牧出土土師器煮炊具については、先に触れた清須→小牧→清須における釜の変遷を述べた筆者の予察と、それに対する検証（水野2008）が行われている。小牧城下町は岐阜へ移動した後も一部に町屋が継続した部分が残るのだが、水野聡哉はその一つである上御園遺跡では信長期以降元和9年（1623）までに位置づけられる土師器に、後期清須段階

に相当する板状耳で鏝無しの土師器釜C類がほとんど存在しないことを明らかにし、土器様相に地域差などがある可能性を指摘した。

さらに、土師器皿については使用状況についても議論となっている。灯明具か否かという問題の他に、出土量の多寡が地点によって異なる事例があることが、各地の遺跡で明らかになってきている。筆者は前期清須では中心的な場に近いほど土師器皿の占める割合が高く、後期清須ではその傾向が見られないことを明らかにし、その間に土師器皿の大量使用（すなわち武家儀礼か）に関する画期があるものと予測した（鈴木2000）。

このように、清須と小牧の間には土師器についてもいくつかの問題点や大きな変化を伴っている可能性が指摘されている。しかし、いずれの論考も土師器そのものを正面から比較して取り扱ったものは無く、検討が十分とはいえない。そこで、瀬戸・美濃窯産陶器である程度変遷をとらえることができた清須A群（典型的な清須前期）→小牧群→清須B群（天正地震直前）→清須C群（典型的な清須後期）という遺物群の推移を題材にし、その中の土師器の検討を行いたい。特に、土師器は小範囲にしか分布しない在地的な製品であることが予測されることから、清須と小牧のそれぞれから出土する土師器が同じ系譜として理解できるか否かを中心に検討したい。

資料の紹介（土師器皿）

ここで取り扱う資料は、清須A群（典型的な清須前期）として『清洲城下町遺跡IV』所収S K 3029出土遺物（鈴木編1994）、小牧群として上御園遺跡S K 3-200（水野編2008）、清須B群（天正地震直前）として『清洲城下町遺跡IV』所収S K 6570出土遺物（鈴木編1994）、清須C群（典型的な清須後期）として『清洲城下町遺跡IV』所収S K 6151出土遺物（鈴木編1994）である（図1・2）。

清須IV S K 3029 出土遺物

清洲城下町遺跡62G区で検出された土師器皿を主体とする一括廃棄土坑である。清須A群の資料としては、従来はVIS D 01やIV N R

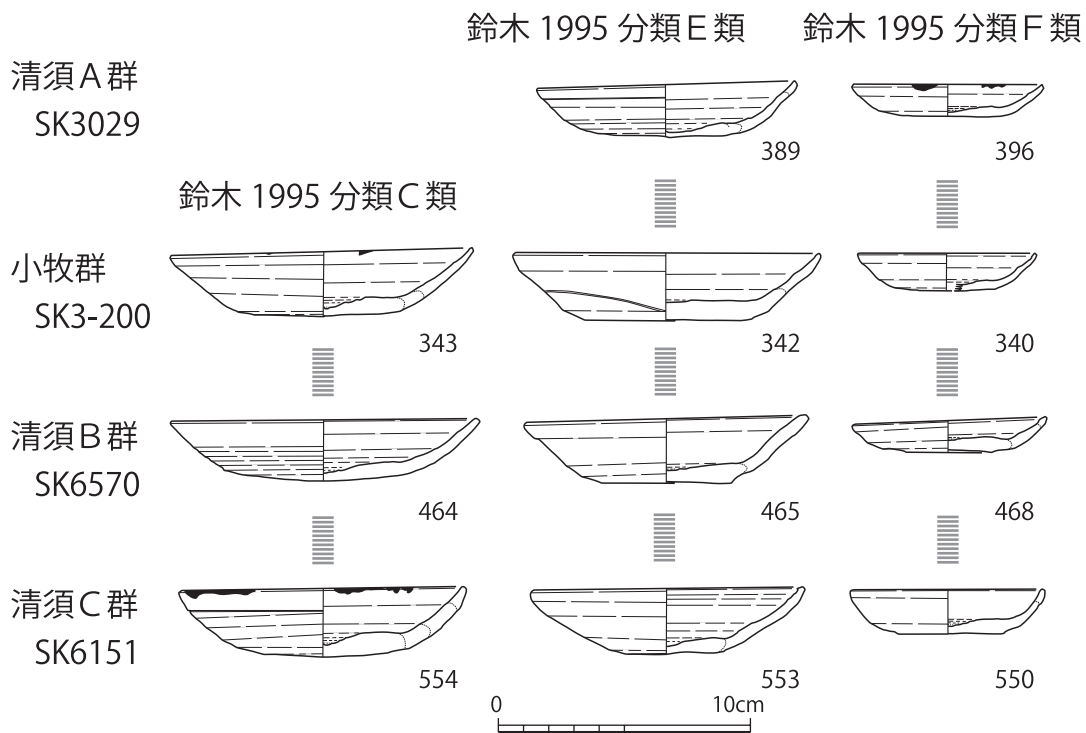


図1 ロクロ調整土師器皿の変遷 (s=1/4)

4001 などを取り上げる場合が多いが、これらはおおむね 15 世紀末から 16 世紀初頭の遺物様相を示しており、今回の比較対象としては小牧群との間にある時間幅が大きすぎて適切ではないと思われた。このため、数少ない II -1 期と位置づけられる土師器皿が多い資料群として、IV S K 3029 出土遺物を選出した。

ロクロ調整皿は、体部下半と体部上方の外面が強く横ナデ調整されて体部が外反する口径が 12～18cm の大形製品（鈴木 1995 分類 A 類）と、体部下端部から口縁端部まで直線的に逆「ハ」字状に開く口径が 8～18cm の大形製品（同 B 類）と、体部下半と体部上方の外面が強く横ナデ調整されて体部が外反する口径が 8～12cm の中形製品（同 D 類）と、体部が摘まみ上げられるように横ナデ調整され直線的に開く口径が 6～10cm の小形製品（同 F 類）がある。ここでは B 類と D 類を詳述する。389 はロクロ調整皿 B 類で、口縁部がやや外折れする特徴は鈴木 1995 分類 E 類と近似し、分類は若干あいまいとなっている。外折れする部分の外面に沈線が巡っている。内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。396 はロクロ調整皿 F 類であるが、全体の形状は 389

と同様に、口縁部がほんのわずかに外折れする特徴が見られる。

非ロクロ調整皿は、口縁部を指による押圧で立ち上げ横ナデ調整を施すもの（早野 2005 分類 A 類）がある。398 は底部内外面が凹凸を極力なくすよう調整され、口縁部の内外面は丁寧に横ナデ調整が行われていた。早野 2005 分類 A 1 類か 2 類に該当するだろう。

上御園遺跡 S K 3-200

上御園遺跡第 3 次調査で検出された大型土坑で、瀬戸・美濃窯産陶器大窯第 2 段階と大窯第 3 段階前半の製品を含む。上御園遺跡は、信長が岐阜へ移転した後も町屋が継続した遺跡であり、信長期に限定した議論を行う際は注意を払う必要がある。しかし、S K 3-200 は供伴する資料の状況からみて信長期に限定できるものとして選出した。

ロクロ調整皿は、体部が直線的に逆「ハ」字状に開く口径が 7～9cm の小形製品（新町 1998 分類 A 1）と、体部が直線的に逆「ハ」字状に開く口径が 9～14cm の大形製品（新町 1998 分類 A 2）がある。340 は皿 A 1 で、内面の横ナデ調整がやや強く施され、体部がわずかに外折れし内面に稜線が存在する。鈴木

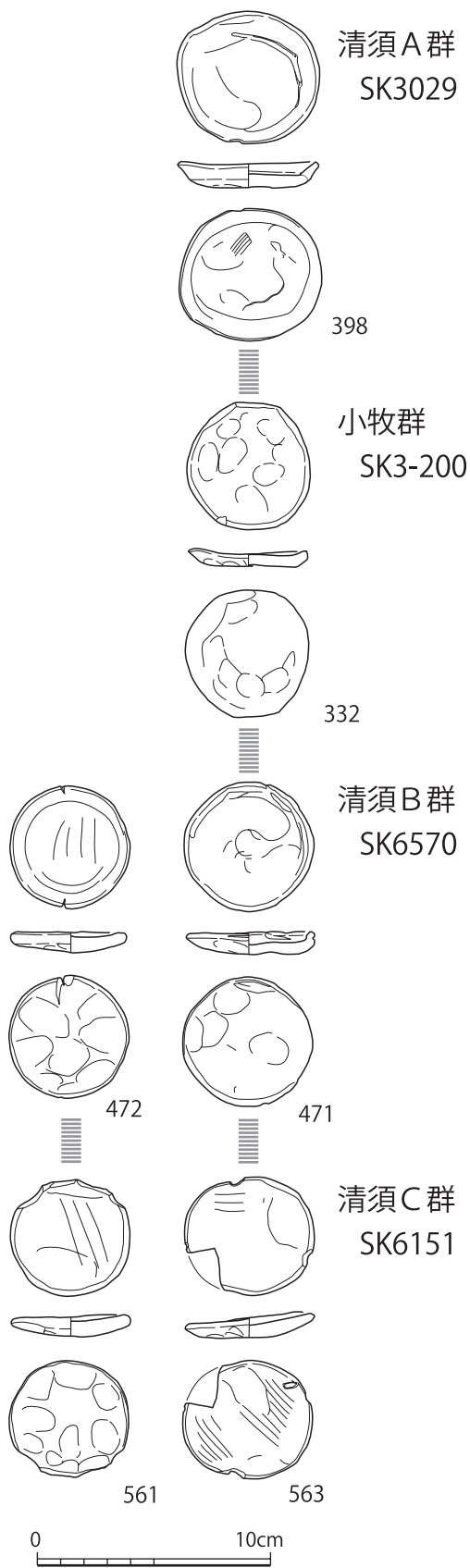


図2 非ロクロ調整土師器皿の変遷 (s=1/4)

1995分類のロクロ調整皿F類に相当するとみられる。342は皿A2で、体部は外面がわずかに外反し内面に水挽き痕(回転横ナデ痕)が認められる。底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部(底部と体部の境界に稜線ができる)が残存する。鈴木1995分類のロクロ調整皿E類に相当するとみられる。343もロクロ調整皿A2であるが、体部はわずかに内彎し内外両面に細かい水挽き痕(回転横ナデ痕)が認められる。底部から体部への形状もなだらかである。鈴木1995分類のロクロ調整皿C類に相当するとみられる。

非ロクロ調整皿は、粘土を円盤状にした後に、中心を指で挟んで持ちもう片方の手の指でその外側をつまみ、つまむ位置を外周に沿って移動させながら短い体部を作る皿B3(新町1998分類)などがある。332は口縁部外面にわずかに横ナデ調整痕らしきものがあり、早野2005分類B2類に該当するだろう。

なお、小牧では非ロクロ調整皿はいくつかのタイプが存在することが明らかになっている。新町1998分類によれば、上述した皿B3の他に、内面に横方向のナデ調整が施されるのもの(皿B1)、短い体部を持つもの(皿B2)など5類に分類している(中嶋1998)。これらは遺構ごとに組成を異にするものであり、系統差を示していると予察される(図3)。

清須IVSK6570出土遺物

清洲城下町遺跡91A区で検出された一括廃棄土坑である。上位を天正地震の噴砂で覆われていた遺構であり、かつ後期清須の町屋の遺構配置に合致する遺構でもあった。瀬戸・美濃窯産陶器は大窯第2段階と大窯第3段階の製品を含む。こうした状況から、信長が小牧から岐阜に移転した1567年から1586年までの資料と推定される。

ロクロ調整皿は、体部下半が丸みを帯びて立ち上がり口縁部が内彎する口径が10～16cmの大形製品(鈴木1995分類C類)と、体部下端部から口縁端部まで直線的に逆「ハ」字状に開くが口縁端部や体部下方でやや強く横ナデ調整が施される口径が8～12cmの中形製品(同E類)と、体部がつまみ上げられるように横ナデ調整され直線的に開く口径が6～10cmの

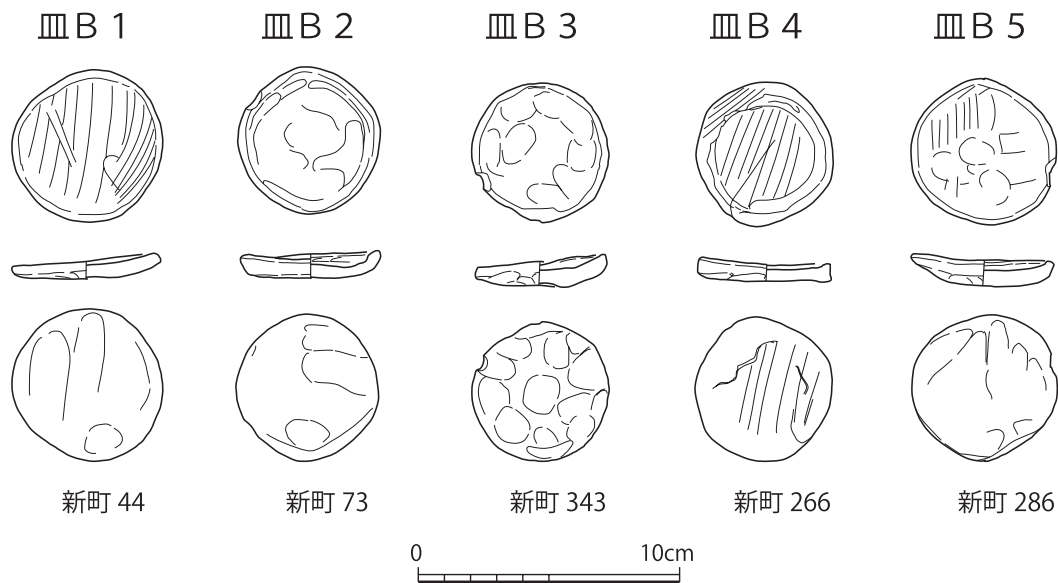


図3 新町遺跡の非ロクロ調整土師器皿の分類 (s=1/4)

小形製品（同F類）がある。464はロクロ調整皿C類で、内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。口縁端部外面での回転横ナデ幅のみがやや広がっている。465はロクロ調整皿E類で、体部下半がやや外側に膨れ、底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部（底部と体部の境界に稜線ができる）が残存する。468はロクロ調整皿F類であるが、口縁部がほんのわずかに内彎する特徴が見られる。

非ロクロ調整皿は、横ナデによって口縁部を彎曲させるように立ち上げるもの（早野2005分類B類）と明確な横ナデを施さないもの（同C類）がある。471は底部内面にU字状のナデ調整が残るもので、ナデ調整が無い部分の口縁部のみが直立気味に立ち上がる。早野2005分類B2類に該当するだろう。472は非ロクロ調整皿C類で、口縁部上端面が円周状にナデ調整され、底部内面は一方向の横ナデ調整が残存する。

清須IVSK6151出土遺物

清洲城下町遺跡91A区で検出された一括廃棄土坑である。天正地震の噴砂を切り込む形で形成された遺構であり、瀬戸・美濃窯産陶器は大窯第4段階の製品までしか含まない。遺構の時期としては、1586年以降でかつ1610年の廃城までには至らない資料として位置づけられよう。

ロクロ調整皿は、清須IVSK6570出土遺物と同様に、鈴木1995分類C類とE類とF類がある。554はロクロ調整皿C類で、内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。やや厚手で口縁端部付近で沈線が巡っている。553はロクロ調整皿E類で、体部下端と体部中位がやや外側に膨れ、口縁部は内彎している。底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部は残存するが不明瞭である。550はロクロ調整皿F類であるが、体部が内彎し口縁端部は直立気味に立ち上がる。

非ロクロ調整皿は、明確な横ナデを施さないもの（同C類）がある。561は底部内面には一方向の横ナデ調整が、底部外面には指圧痕？状の凹凸が観察される。563は内外面とも指圧痕？状の凹凸を消すように一方向の横ナデ調整が施されている。

土師器皿の編年的考察

以上、清須A群（典型的な清須前期）、小牧群、清須B群（天正地震直前）、清須C群（典型的な清須後期）の土師器皿の事例を詳述した。では、これらをこの順に配列した時に編年的にどう整理できるであろうか。ロクロ調整皿を図1、非ロクロ調整皿を図2に整理し概観すると、一部に齟齬が認められるが、包括的にみると順序は適切に変化しているように思われる。

齟齬があると思われる点は、1) 小牧群のロクロ調整皿は全て口径に対し器高がやや高いこと、2) 小牧群の鈴木 1995 分類 F 類 (340) は体部の形状が前後とはやや異なること、3) 小牧群の鈴木 1995 分類 E 類 (342) は底部の形状が前後とはやや異なること、4) 清須 B 群の鈴木 1995 分類 E 類 (465) は口縁端部が外反し前後とはやや異なること、などである。こうした齟齬は、取り上げた資料が適切ではないために発生した側面もあるだろうが、すぐに適切な資料が抽出できないことは清須と小牧の遺跡間には土器様相が微妙な相違があることを端的に示しているといえる。しかし、そうはいつでも、例えば鈴木 1995 分類 C 類は小牧群から清須 C 群までの変遷が比較的整合的に理解できるように見え、この配列が全く意味をなさないわけではない。また、武部真木がいう「尾張北部地域（実際には一宮市域）」(武部 2001) と比べてみると、小牧群は清須群の方に似ている。

小牧出土の土師器鍋・釜

次に、土師器鍋・釜について述べておきたい。

土師器鍋についても今回改めて分析を試みている。小牧群と清須群はともに土師器鍋は、半球形内耳鍋と羽付鍋で構成されているが、もともと土師器皿ほど短い時間幅の中に形態の変化を及ぼさない器種であった。変化に乏しい器種であるために、筆者の力量では小牧群と清須群の間に有為な差異を見いだすことができなかった。

一方、土師器釜については、既述したとおり、かつて鏝の有無と外耳の形状から清須前期→小牧→清須後期という流れを予察した(鈴木 2001)。しかし、今回改めて確認されたのは、水野聡哉(水野 2008)が指摘した信長期以降 1623 年までの小牧城下町でも板状耳で鏝無しの土師器釜 C 類がほとんど存在しないことである。加えて、上御園遺跡第 3 次調査で出土した土師器釜 B 類の中には、口縁部と体部の境界がなだらかになるもの(276)や口縁部が内傾するもの(263)などが存在する(図 4)。これらの特徴は東海地域全般の土師器釜に認められ

る相対的に新しい要素として認識されるものである。このような資料を含むことは、小牧の中で土師器釜 B 類が型式学的な形態変化をしている可能性が高いことを示している。それは信長が在城した約 4 年間の出来事ではなくその後元和年間まで続いた町屋の歴史の中で起こった変化と見るのが妥当である。このような、1567 年以降も丸耳で鏝無しの土師器釜 B 類が出土するあり方は、後期清須の土器様相とは明らか異なるものであると言わざるをえない。

小牧出土土師器の位置づけ

筆者はかつて、中世東海地域(大地域)を(前期で山茶碗と)土師器皿と丸底の土師器鍋類を主体とする土器様相で括ることが可能であると指摘した。そして、土器様相からみて、中世東海地域はさらに南伊勢、中北伊勢、美濃、尾張、西三河、東三河から湖西、天竜川以東の 7 中地域に区分されると論じた(鈴木 2005a)。また、16 世紀の尾張はさらに小地域に細分することが可能で、例えば口縁部が外反する鈴木 1995 分類ロクロ調整皿 A 類と、口縁部が直線的に開く鈴木 1995 分類ロクロ調整皿 B 類の出土分布範囲は異なり、清須などは両者が出土する遺跡であることを明らかにした(鈴木 2005b)。このように土器様相を正しく検討するためには中地域内をさらに小地域区分して土器様相を考察しなければならぬことは明らかであるが、実際に小地域区分の実態を解明することは難しい。現状では、先の検討結果を踏まえると、小牧と清須は小地域区分では異なる地域として分析を進めるのが妥当と考えられる。

さて、そうした前提で清須 A 群→小牧群→清須 B 群→清須 C 群にみられる土師器の様相を整理してみたい。

1) 清須から小牧への移動に際しては、土師器皿と鍋にみるように、型式学的な連続性は、若干の疑問が残るものの、ある程度は認められ、この時点での清須と小牧の土器様相は一連のものともみることが可能である。しかし、土師器釜 B 類という清須に見られなかった器種を新たに登場させた点は注意しておきたい。

2) また、清須から小牧への移動について、忘

れてはならない点は、土師器ロクロ調整皿A類やD類などを主体とする名古屋台地や知多半島を分布の主体とする系譜の土師器が、(その製品が清須で多数出土する状況であっても)小牧には引き継がれていないことである。

3) 次に、小牧から岐阜への移動に際しては、井川祥子らの報告(井川 2000)によれば、信長入城後も前代と同様に美濃の土師器がそのまま使用されていることが判明し、小牧や清須の土師器様相は全くみることができない。土師器の系譜としては小牧と岐阜の間には大きな断絶があるものと理解できる。

4) 尾張国内に立ち返り、拠点城館が小牧から清須へ移動したという理解にたつと、特に土師器ロクロ調整皿C類にみるように、土器様相の型式学的な連続性が認められた。また、土師器

釜C類という小牧に見られなかった器種を新たに登場させた点も注目したい。

5) 一方、清須へ拠点城館が移動した後の小牧の土器様相については、小牧の中での段階区分がまだ十分にできていない現状では、詳細なことは分からないといえる。しかし、小牧の中で土師器釜B類が型式学的な形態変化をしている可能性が指摘されたので、清須とは別の小地域として土器様相が展開したことが予測される。

以上の結果をみると、今後はますます小牧の16世紀中葉以前の土師器様相が問題となるだろう。もともと小牧が清須と同じ土器様相を持っていたか否かという問題は、清須から小牧に認められた型式学的な連続性の意味合いを大きく変える問題である。筆者は、土師器生産者も清須から小牧へ移動し、小牧で製作活動したも

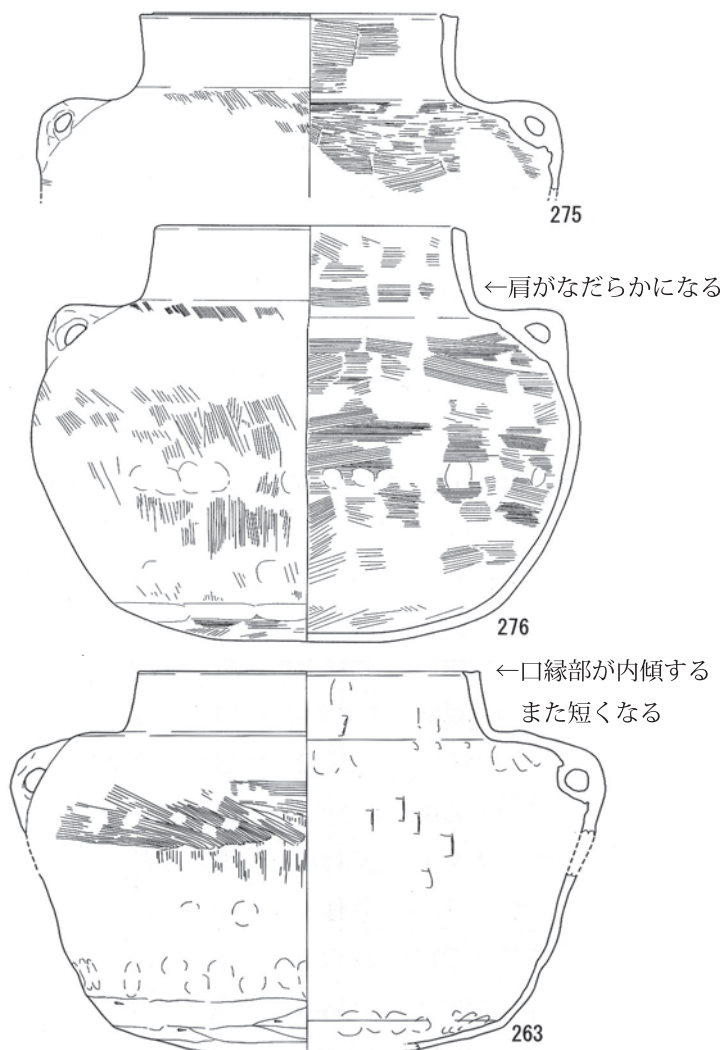


図4 上御園遺跡の土師器釜の実測図 (s=1/4、水野編 2008 から作成)

のと想定しているが、その辺りの議論に大きく影響するだろう。

そして、土器様相の整理の結果を踏まえると、土師器生産者は信長の動きとは連動することではなく、小牧から岐阜には移動せずに、一部を除き清須に移転したことが推測されるのである。

このように度々に行われた織田信長の拠点移動については、その移転の内実はずしも毎回同じではなく、場合によって異なることが明らかとなった。特に尾張国内から尾張国外への移動に際しては、単純に全ての人やモノを移動さ

せると言うわけにはいかないのは当然のことである。そういった移転の具体的な様相を知る上では、今回示したような分析は、ささやかなヒントを与えてくれるかもしれない。いろいろ課題が残されているが、大方のご叱正を賜りたい。

謝辞

本稿を記すに際して、坪井裕司氏には多大なご協力とご教示を得ている。また、小野友記子氏、中嶋隆氏、水野聡哉氏にもご教示を得ている。記して感謝申し上げる。

参考・引用文献

- 井川祥子 2000 「岐阜市域の15世紀から17世紀の土師器皿」『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—(第2分冊)』岐阜市教育委員会
- 蟹江吉弘 1996 『清洲城下町遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
- 北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 小牧市教育委員会 1990 『小牧市遺跡分布地図(1)小牧・北里地区』
- 佐藤公保 1986 「中世土師器研究ノート(1)」『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 佐藤公保 1987 「中世土師器研究ノート(2)」『年報昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 佐藤公保 2002 「尾張西部における中世末から近世の非ロクロ成形土師器皿の諸様相」『研究紀要第3号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 1994 「戦国時代の尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム1』愛知考古学談話会
- 鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
- 鈴木正貴 1995 「清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集
- 鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 鈴木正貴 2000 「土師器皿からみた戦国期城下町と織豊期城下町・土師器皿からみた清須城下町の構造とその変遷を中心に」『織豊城郭第7号』織豊期城郭研究会
- 鈴木正貴 2001 「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器—時期別組成の分析を中心に—」『研究紀要第2号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 2005a 「東海における中世土器・陶磁器の編年」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—発表要旨集』
- 鈴木正貴 2005b 「名古屋城三の丸遺跡出土土師器皿の変遷」『名古屋城三の丸遺跡VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第127集
- 千田嘉博 1989 「小牧城下町の復元的考察」『ヒストリア第123号』大阪歴史学会
- 武部真木 2001 「中世土師器の様相—12～16世紀の尾張平野」『考古学フォーラム13』愛知考古学談話会
- 田中城久編 2008 『上御園遺跡第3次発掘調査報告書』小牧市教育委員会
- 中嶋隆ほか 1998 『小牧城下町発掘調査報告書—新町遺跡—』小牧市教育委員会
- 前川要 1988 「近世城下町発生に関する考古学的研究」『ヒストリア第121号』大阪歴史学会
- 水野聡哉 2008 「第4章まとめ 第2節遺物」『上御園遺跡第3次発掘調査報告書』小牧市教育委員会
- 早野浩二編 2005 『清洲城下町遺跡IX』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集

瀬戸市上品野町菩提寺の調査

伊奈和彦*・鶴飼雅弘*
宇佐見守*・蔭山誠一
武部真木

* 愛知県埋蔵文化財調査センター

本センターでは、平成16、19、20、21年度と4次にわたって瀬戸市上品野町にある桑下城跡の発掘調査を行ってきた。桑下城跡の北、直線距離にして300m程の位置に寂場山菩提寺が存在する。近接して存在する城や窯と寺院とは何らかの関連があるのか。今回我々はこの疑問と興味とから菩提寺について考察することにした。寂場山菩提寺は寺伝によれば天平年間に行基が開いたとされているが、現在は無住の寺となっており、創建当初とはかなり様相を異にしているようである。不明な点の多い菩提寺の近世以前の姿を探るために現地踏査を実施し、文献資料や地元住民からの聞き取りによってさまざまな角度から考察を行った。その結果、文献からは慶長年間以前にこの場に菩提寺ないし観音堂が存在していたことがわかった。また採集遺物では、中世前半期と後半期の2時期に大別することができ、少なくとも中世後半には何らかの宗教的な施設が存在していたであろうとの推定に至った。

はじめに

寂場山菩提寺は瀬戸市上品野町にある天台宗の寺院で、かつては一大霊場であったとの記述も見られ、寺域も広がったと考えられる。しかし、寺に関する文献資料は乏しく、しかも曖昧で矛盾点も多い。更に昭和四(1929)年に本堂が焼失しており、無住の寺となって久しい*。数人の地元住民に聞き取りを行ったが、近世以前の姿を伝えるような話は聞けなかった。

かつて瀬戸市教育委員会が「菩提寺遺跡」として遺跡分布調査を行っており、回廊状の平坦面と集石を確認。四耳壺や常滑の壺の破片などを採集して、中世墓群の可能性を指摘している。

今回の我々の調査は、考古学的手法を用いて寺域と遺構・遺物を探るとともに、文献を精査し、聞き取りによってこれを補完・修正することで不明な点が多いかつての菩提寺の姿を少しでも明らかにすることが目標である。また、当センターが年次を追って調査してきた桑下城

* 現本堂は昭和三十六(1961)年の再建であり、境内は再建後の整備により大幅に改変されているようである。現住職は春日井市白山町の天台宗円福寺の係累の方で、管理は地域住民で行っている。ちなみに、檀家はいないとのことである。

跡や周辺の遺跡・窯跡との関係も探ってみよう。(伊奈和彦)

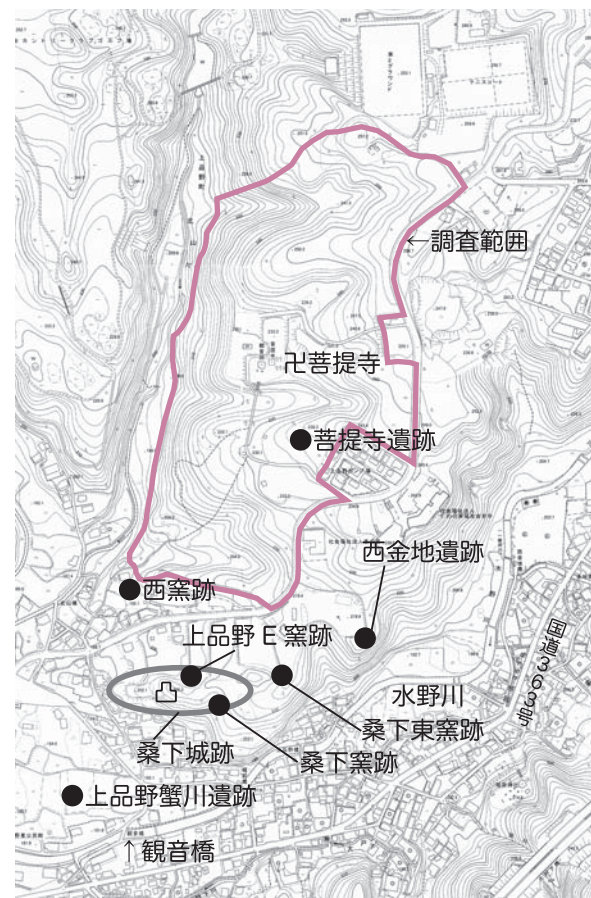


図1 菩提寺周辺の遺跡 (1:10000)

菩提寺について

(1) 菩提寺に関する文献記録

菩提寺は天平年間（8世紀半ば）行基が刻んだ本尊を寂場山に安置したのを始まりとし、その後澄照が鳳来寺末刹として堂塔庫裏を修理したとある（『張州雑志』）。また参道の傍らには養和元（1181）年に没した東照上人が開基したとする石碑が立ち、大正六（1918）年に編まれた「本尊年代由緒調」では、弘治元（1555）年養海が中興したと記されている（『瀬戸市史通史編上』）。いずれも伝承の域を出ず、開山・中興の時期はおろか、東照・養海の経歴も不明である。

尾張藩の地誌『寛文村々覚書』（以下『覚書』と記す）によれば、菩提寺は春日井郡吉根村（現名古屋守山区）竜泉寺末とあり、寺内六畝歩は「備前検除」と記されている。「備前検」とは慶長十三（1608）年尾張藩で実施された伊奈備前守による検地をさす。また『張州雑志』の記述は、菩提寺の竜泉寺への帰属を慶長年間とするが、『覚書』の内容とは矛盾しない。これらのことから、菩提寺は慶長年間までに成立し、竜泉寺末となった可能性が高い。

また『覚書』には菩提寺「持分」として、観音堂が地内七町五反歩を「前々除」されているが、菩提寺との関連を示す記述はない。その後『尾張徇行記』（以下『徇行記』と記す）では『覚書』の内容に加え、当寺書上として、観音堂が「漸々ニ破壊セシニヨリ、今ハタゞミ堂ニナリ、本尊ハ当寺ニ安置ス」と記されている。両書の記述には約150年の開きがあり、この間に観音堂が衰微し、菩提寺の管理下に置かれたことがわかる。

菩提寺周辺の景観については、寛政四（1792）年閏二月に作成された「春日井郡上品野村絵図」（財団法人徳川黎明会所蔵、『瀬戸市史 資料編一 村絵図』所収）が参考となる。この絵図には道路・河川・ため池・家屋・寺社・田畑・他村の飛地・見取所などが描かれ、主な山や川の名称も記されている。菩提寺をみると、本堂および仁王門は描かれているものの、観音堂は描かれていない。また仁王門の隣に天神が描か

れていることに注意が向く。寺周辺に目を転じると、四ツ辻御林に至る道の分岐点に松が描かれ、「せう人古塚」（上人古塚）と記されている。水野川北岸には桑下城跡を示す「寺やしき」「城根」「場々やしき」「中やしき」が連なり、「寺やしき」には「今ハ修験居住仕候」と記されている。（鶴飼雅弘）

(2) 菩提寺の文化財（建物、祠、仏像、石碑など）

残念ながら現存する近世以前の文化財は僅かである。行基によって刻まれたとされる本尊の千手観音像や、これと一緒に本堂に安置されていたという不動明王、毘沙門天、弘法大師、役の行者の各像は、昭和四（1929）年に起きたとされる火災によって本堂と共に焼失している。現在の本堂、恵比須堂、庫裏は昭和三十六（1961）年に、仁王門は平成十五（2003）年に再建されたとのことである（写真1）。ちなみに本尊なども新調されている。仁王門については焼失したのではなく、老朽化のために建て替えたそうであるが、この建て替え時に、門の両脇に安置されている仁王像の作者と制作年を示す板が見つかっている。板には、「寶永二年六月 □□大仏師 森」と墨書されていたとのことである*。ただし、残念ながら仁王像は、仁王門建て替え以降のある時期にペンキで彩色されてしまったそうである（写真2）。

現在は失われてしまったが、本堂西側の平場には庫裏が建っていたそうである。実際に目にしたことのある現住職によると、現本堂よりも大きく立派な建物であったが、昭和三十四（1959）年九月の伊勢湾台風で大きな被害を受け、その後撤去してしまったとのことであった。

現在、境内において目にできるものは、弁財天や大黒天、不動明王を祀った小祠、現菩提寺で最も盛大な行事となっている「初えびす」にまつわる「えびす神」勧請の石碑**、台座に番号の刻まれた地蔵***や、元は村の辻などに置かれていたと思われる馬頭観音などの石仏などであるが、どれも近世末から近現代のものと考え

* 宝永二年は西暦1705年にあたる。

** 正面に「出雲両福神奉安」、向かって左側面に「現住職寛順代」、右側面に「大正十五年二月勧請 堂昭和二年二月建之」と刻まれている。

*** 弘法大師信仰によって置かれたものか。

えられる*。

また、次項で触れる仁王門尾根の平場5には、墓石や五輪塔、宝篋印塔などが並べられている。五輪塔や宝篋印塔は、それぞれ部分的に異なった部材が組み合わされており、いつの頃か崩れたものを適当に積み上げたのだろう（写真3・写真4）。形式からすると近世・近代のものではなく、戦国期以前、中世まで遡ることができると考えられる。現場の状況から判断すると、これらが当初からこの場所にあったとは考えられないが、瀬戸市教育委員会が中世墓群の存在の可能性を指摘している「菩提寺遺跡」では五輪塔の上部（空輪と風輪部）が見つまっている。よって平場5にある五輪塔や宝篋印塔は、境内地にあったものである可能性が高いのではないだろうか。

墓石は歴代住職のものと思われる。それぞれに刻まれた文字を年代の古い順に挙げる。

墓石①：正面「月山元□信」 向かって右側面「明和八年□□」 左側面「□十二□日」（明和八年は1771年）

墓石②：正面「阿闍梨□國和尚」 向かって右側面「安永五年」（安永五年は1777年）

墓石③：正面「中興大阿闍梨本覚大和尚」 裏面「文政十一年」（文政十一年は1828年）

石碑：正面「金剛佛子巧海」 向かって右側面「慶應紀元丑十月十有一日」（慶應丑年は1865年）

*昭和五年頃に瀬戸市史編纂準備委員だった加藤庄三氏により、「明曆四歳戊戌六月吉日 下品野 村上善九郎」と刻まれた手洗石があったことが確認されている。（安藤政二郎1956『改訂増補 瀬戸ところどころ今昔物語』大瀬戸新聞社）



写真1 平場1にある菩提寺本堂、庫裏、恵比須堂



写真2 菩提寺仁王像



写真3 平場5にある宝篋印塔



写真4 平場5にある五輪塔

なお、瀬戸市が作成した都市計画図には「観音坊」という表記が見られるが、聞き取りを行った地元住民や現住職は、聞いたことがないとのことだった。また、前出の『覚書』や『徇行記』には、「観音堂」との記述がみられるが、「観音堂」という名は「観音坊」同様聞いたことがないとのことだった。(伊奈和彦)

旧境内の考古学的調査

(1) 調査の方法

旧境内遺構の分布調査を行うため、寺域と考えられる範囲を4人で4日間にわたって踏査した。確認した平場は、長軸・短軸の長さを計測して、遺構や採集した遺物も含めて1/2,500の都市計画図に記録した。各平場と遺物採集地点にはそれぞれ番号を振った(図2・表1)。また、ポイントとなると思われる地点や、遺構、遺物は極力写真撮影をした。

(2) 平場や遺構の概要

菩提寺の境内範囲をどこまでと考えるか。前出の寛政四(1792)年作成『村絵図』には、「山六町歩 東西百廿間 南北百八十間 松柴立平山 是ハ菩提寺と申天台宗扣」と記されている。六町歩は約6万㎡、百廿間は約220m、百八十間は約330mということになるが、我々は近世以前、おそらく中世には存在したであろう菩提寺の姿を明らかにしたいと考えているので、この記述よりも広い範囲を踏査することにした。具体的には東西300m、南北600mを調査範囲とした。地形は、東西方向に延びる尾根と谷が南北に連続しており、西には北山川が北から南へと流れている。調査範囲が広いので、便宜上、菩提寺北地区、菩提寺地区、菩提寺南地区の3地区に分け、更に6つの尾根と5つの谷にそれぞれ名前をつけた(図2・表1)。

以下、調査の概要を報告する。

ア 菩提寺北地区

北A尾根・北B尾根 雑木林内に若干の平場が確認できたが、いずれも近現代の造成のようである。地形などから判断して、旧境内地とは考えられない。

北B東西谷 菩提寺本堂の裏手に当たる。以前は沢であったが、10年程前に埋め立てられた

そうで、大規模な造成がなされている。

イ 菩提寺地区

観音坊尾根

平場1は、東西50m、南北37.5mを測り、菩提寺の平場の中で最大の面積を有する。再建された本堂と恵比須堂、これに挟まれて庫裏が建っている。現本堂の基壇には一部被熱痕が見られるので、旧本堂の基壇であったと考えられる。本堂周辺には旧本堂のものと思われる礎石らしき石がいくつか見られる。本堂脇で大窯期初期の重圈皿1点を採集した(図3)。

平場2には、かつては庫裏が建っていたそうだが、前項で記したように伊勢湾台風で被害を受けたために取り壊されたとのことである。この庫裏がいつごろ建てられたものであったかは不明であるが、1949年米軍撮影の航空写真には建物が写っており、この時点では存在していたことがわかる。礎石がないか調べてみたが、落ち葉が厚く堆積していて見つめることができなかった。

平場8、9は、平場1の東側の斜面を上ったところに位置し、平場としては狭いが、前述の不動明王祠が建っており、弘法信仰の地蔵が点在している。御嶽山信仰に関わる石碑もあるが、これは上品野のある家で祀っていたものをここへ移したものだということである。この2つの平場をつなぐ道がふた手に分かれて延びている。西南方向に向かう道は、後述する中央東西谷北斜面にある平場群に続いており、ここにも地蔵が点在することから、弘法信仰による地蔵参拝のための道と考えられる。この地蔵がいつの時代からあるかは定かではないが、菩提寺が天台宗の寺院であることと、地蔵が弘法信仰に基づくものであることを考え合わせれば、明治・大正期、遡っても近世末のものではないかと考える。もう一本の東方向に延びる道の先には、平場は確認できなかったが、尾根が削平されているのかもしれない。

平場26～29は、庫裏のあった平場2の下段に位置し、後述する水田と思われる平場とは離れているので、寺の施設があったとしてもおかしくはない。径30～40cm程の石が点在している。ただし、この平場に下りるための道は見つからなかった。

観音坊尾根西斜面

平場 30～32・35～40 は、水田跡と思われる。地元住民や菩提寺総代太田氏によると、50 年程前までは参道の両側、特に西側は水田が棚田のように北山川まで続いていたとのことである。北山川沿いにも水田がひろがっていて、水田に行くための道もあったそうであるが、その証言通りに水田跡と思われる平場に沿って道を確認した。平場は現在でも水が浮いている。ちなみに、1949 年米軍撮影の航空写真には、北山川沿いに水田と思われる平場の広がりが見られている。

平場 33、34 は、周辺の水田と思われる平場とは性格が異なるようである。平場 33 の東尾根側に、段状に上がる南北幅 3.5 m、東西奥行 3.2 m、深さ 1.6 m の張り出し部分があり、入口痕跡と思われる石材が 3 個ある。その他にも石が何個か見られる。張り出し部分の奥に祠があったか。遺物を採集することはできなかったため年代は特定できないが、境内地に残る数少ない遺構である。

中央東西谷南斜面

平場 6、7 は境内地の中でも大きな平場である。特に平場 6 は東西 34.3 m、南北 15.2 m を測り、斜面を削って造成されているようである。平場の西端には外周に沿って溝があり、石材が集中する地点が 1 ヶ所ある。中世墓とも考えられるが、後述する狛犬形の遺物がこの平場から下へ転落したと考えられることから、かつては社のような施設があったのかもしれない。この東側にある平場 7 も斜面に造成されているように思われる。両平場の南側に沿って道が確認でき、参道につながるようになっていく。

平場 19・23～25 は連なっており、平場 23 北側に斜面を上って仁王門尾根上にある平場へとつながる道を確認した。

平場 67～69 が東西に連なっており、それぞれ斜面を削って造成されているようである。この平場に沿って道が確認できる。平場 67 とその北斜面下の沢との間で陶製の動物（狛犬か）の一部と思われる遺物を採集した（採集遺物の項参照）。平場 6 から平場 67 へ転落した可能性が高く、平場 6 にあったとすれば、前述の通り、平場 6 の性格を検討するうえでの貴重

な手がかりとなるかもしれない。

平場 70 は平場 69 の南東上段に位置し、この平場の南側にも道が確認できる。この道は、前述の平場 6、7 南側の道につながっている。

中央東西谷北斜面

平場 10・13・14 は、前述の平場 8・9 から下る道沿いの平場である。道沿いに地蔵が連なっている。

平場 11 は、平場 10・13・14 の道から少し外れた平場で、溜池が見下ろせる位置にある。溜池の西側に堰が築かれており、そこから谷へと水が流れている。ちなみに、明治十七（1884）年作成の地籍図にもこの溜池は描かれている。この地籍図では、溜池の西側は大部分が田となっている。

平場 41～66 は、水田跡と思われる。平場 46 東に隣接して湧水点があり、土留めの石積みが見られる。中央東西谷東方にある溜池から流れ込む水と湧水とが合流して沢を形成し、北山川へと流れている。この沢沿いに段々に平場が続いており、尾根側に石積みも見られる。現状は竹林または雑木林となっているが、「水田が棚田のように北山川まで続いていた」との地元住民の証言と合致する。この場所は、前出の地籍図でも大部分が田あるいは荒田となっている。

平場 43 で遺物を採集（図 2 中の③）、平場 60・66 南下の沢でも多くの遺物を採集した（図 2 中の④）。詳細は次項に記すが、鎌倉初期の遺物が採集できたことは、菩提寺の成立年代を検討するうえでの重要な手がかりとなりそうである。沢の最下流で遺物を採集したことから、遺物が上流から流れてきたことは明白であり、この一帯の水田以前の姿がどのようなものであったか今後の研究課題となる。

中央東西谷谷底

平場 15・16・18 も水田跡と思われる。1949 年米軍撮影の航空写真にも水田と思われる平場の広がりが見られており、前出の地籍図では田となっている。平場 15 は溜池から水が東西に流れており、この沢で遺物を採集した（図 2 中の①）。

また、平場 16 の東尾根側に土留めの石積みを確認した。平場 18 の南側には池があり、池の中には小祠がある。住職の山川氏によれば、

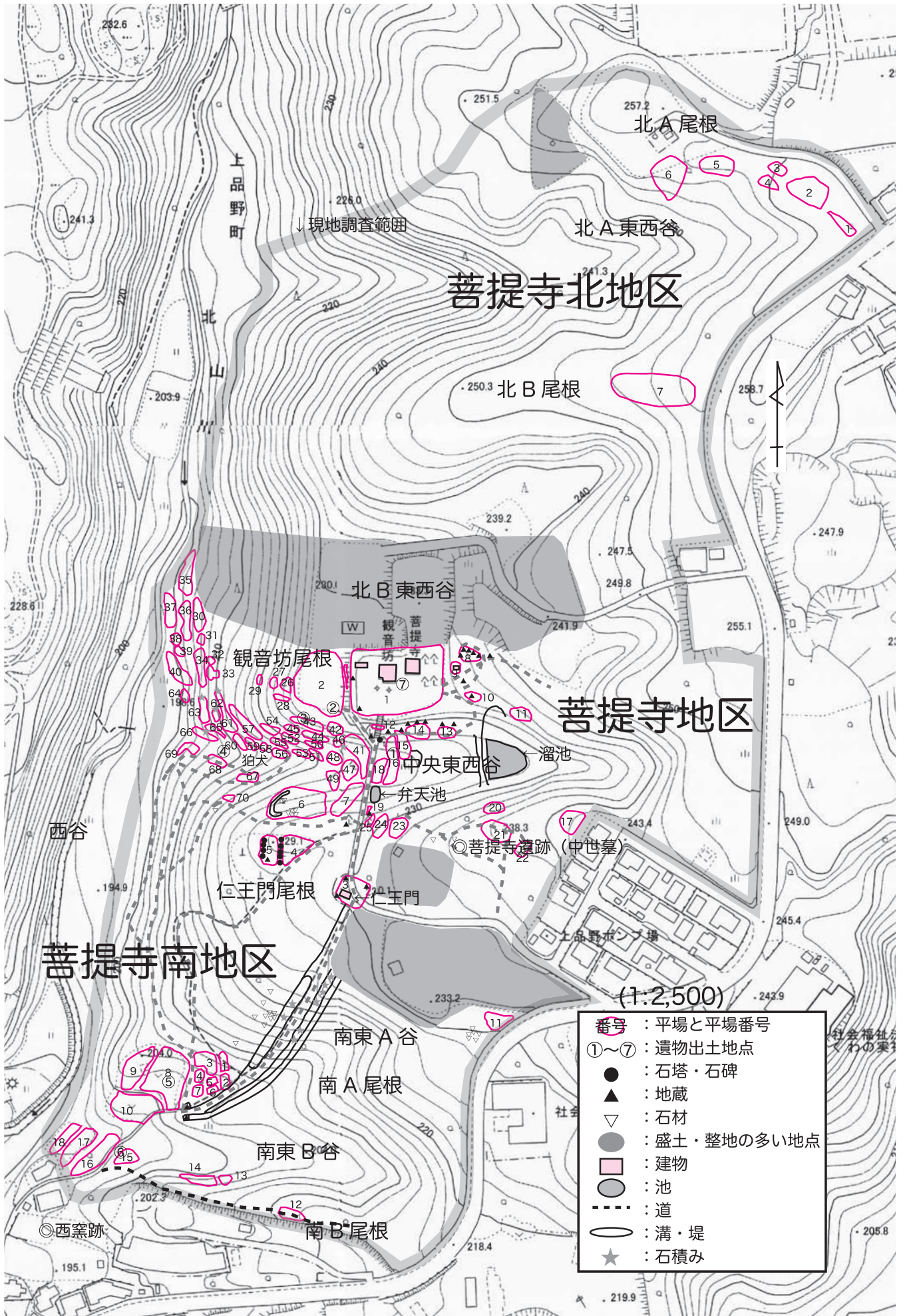


図2 菩提寺付近の平場と遺物採集地点 (1:2500)

表1 菩提寺付近の平場一覧

地区	平場番号	長軸(m)	短軸(m)	平場方向	位置	備考
菩提寺	1	50	37.5	EW	観音坊尾根	観音坊(11.1m×10.9m)、菩提寺本堂
菩提寺	2	37.5	28.2	EW	観音坊尾根	庫裏跡地
菩提寺	3	16	12.1	EW	仁王門尾根	仁王門(6.5m×4.5m)
菩提寺	4	16.2	14.7	EW	仁王門尾根	現代の墓地
菩提寺	5	10.3	8.2	NS	仁王門尾根	寺院中興等石塔あり
菩提寺	6	34.3	15.2	EW	中央東西谷南斜面	西側に溝あり、石材が集中する地点1ヶ所あり
菩提寺	7	27.3	6	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	8	13.1	10.5	EW	観音坊尾根	御嶽山石碑、地藏16番~19番
菩提寺	9	6	3.2	NS	観音坊尾根	現不動明王祠(昭和61年)、旧出雲両福神奉安石碑(大正4年、寛順)
菩提寺	10	8.9	3.8	EW	中央東西谷北斜面	地藏13番
菩提寺	11	9.6	4.1	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	12	8.6	2	EW	中央東西谷北斜面	参道奥石階段途中
菩提寺	13	8.4	6	EW	中央東西谷北斜面	地藏11番・12番
菩提寺	14	12.5	6.7	EW	中央東西谷北斜面	地藏8番~10番
菩提寺	15	17	8.2	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡、北尾根側に地藏7番
菩提寺	16	26.5	11.3	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡、北尾根側に地藏6番、東尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	17	13.8	11.1	NS	仁王門尾根	現代住宅地の西隣接地、新しい造成の可能性あり
菩提寺	18	10	8.4	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	19	7	4.1	NS	中央東西谷南斜面	地藏5番
菩提寺	20	11.9	6.9	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	21	17.9	12.4	EW	仁王門尾根	
菩提寺	22	8.2	7.8	NS	仁王門尾根	
菩提寺	23	10.4	5.5	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	24	14.6	8.9	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	25	6.7	3.1	NS	中央東西谷南斜面	
菩提寺	26	12.6	7.5	NS	観音坊尾根	
菩提寺	27	5.2	3.7	NS	観音坊尾根	
菩提寺	28	9.2	6.4	EW	観音坊尾根	
菩提寺	29	4.6	2.7	NS	観音坊尾根	
菩提寺	30	18.2	6	NS	観音坊尾根	
菩提寺	31	6.3	4.1	NS	観音坊尾根	
菩提寺	32	5.5	2.5	NS	観音坊尾根	
菩提寺	33	6	3.7	NS	観音坊尾根	東尾根側に階段状に上がる南北幅3.5m、東西奥行3.2m、深さ1.6mの張り出し部があり、入口根跡と思われる石材3個あり
菩提寺	34	22.4	4.9	NS	観音坊尾根	
菩提寺	35	18	6	NS	北谷南西斜面	旧水田跡
菩提寺	36	22.4	6.5	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	37	18.4	9.3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	38	5.3	3.8	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	39	6.4	3.3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	40	23.8	6.2	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	41	24.3	8.6	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	42	9.5	6.2	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	43	18	5.3	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	44	12.5	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	45	7.8	2.1	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	46	4.4	4	EW	中央東西谷北斜面	東に隣接して湧水点あり、土留めの石積みあり
菩提寺	47	9	5.5	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	48	3.8	3.3	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	49	11	6.2	NS	中央東西谷谷底	旧水田跡
菩提寺	50	2.8	2.7	NS	中央東西谷北斜面	

地区	平場番号	長軸(m)	短軸(m)	平場方向	位置	備考
菩提寺	51	5.8	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	52	7.1	3.3	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	53	6.3	2.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	54	10.6	4	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	55	6.6	1.8	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	56	10.4	4.5	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	57	29	5	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	58	6	5.5	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	59	6.6	3.8	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	60	10	3.6	NS	中央東西谷北斜面	
菩提寺	61	24.3	5.3	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	62	8.7	3.9	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	63	14.7	6.1	NS	中央東西谷北斜面	北尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	64	7.5	3	NS	観音坊尾根西斜面	旧水田跡
菩提寺	65	11	2.4	EW	中央東西谷北斜面	
菩提寺	66	12.6	5.1	NS	中央東西谷北斜面	北東尾根側に土留めの石積みあり
菩提寺	67	16.2	6	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	68	8	4.4	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	69	10.6	3.8	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	70	6.4	3.5	EW	中央東西谷南斜面	
菩提寺	池	8.4	7.6	NS	中央東西谷谷底	弁天様か天神様の祠が池上にあり
菩提寺北	1	16.8	3	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	2	19.3	18.5	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	3	8.5	5.2	NS	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	4	9.5	7.8	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	5	16	9	EW	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	6	25	19.3	NS	北A尾根	雑木林、東西の道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺北	7	46.2	17.8	EW	北B尾根	雑木林、現在の幹線道に沿って存在する、新しいか?
菩提寺南	1	10.8	4	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林、肥え溜めあり
菩提寺南	2	10.6	2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	3	10.9	8.6	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	4	8.1	5.5	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	5	5.5	5.2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	6	5.5	5.2	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	7	8.1	5	NS	仁王門尾根南斜面	雑木林
菩提寺南	8	27.4	24.4	NS	仁王門尾根南斜面	畑地
菩提寺南	9	27.4	8.3	NS	仁王門尾根南斜面	畑地
菩提寺南	10	20.2	13.2	EW	仁王門尾根南斜面	旧畑地
菩提寺南	11	18.4	10	EW	南東A谷南斜面	雑木林、南10mの地点に石材の集積あり
菩提寺南	12	15.4	6.2	EW	南B尾根	旧水田跡か
菩提寺南	13	6	5.4	EW	南東B谷南斜面	旧水田跡か
菩提寺南	14	20.2	4.9	EW	南東B谷南斜面	旧水田跡か
菩提寺南	15	11.7	10	NS	南東B谷南斜面	旧水田跡
菩提寺南	16	25.8	5.5	EW	南東B谷南斜面	竹藪、旧畑地
菩提寺南	17	16	7.2	EW	南東B谷南斜面	竹藪、旧畑地
菩提寺南	18	15.5	11.7	NS	南東B谷南斜面	竹藪、旧畑地

弁財天が祀られているとのことである*。

仁王門尾根

平場3には仁王門が建っている。詳細は前項(菩提寺の文化財)に記したが、仁王門前に地蔵と石碑がある。石碑正面には「立太子禮紀念樹」、向かって左側面には「大正五年□□□」、右側面には建立者名(窯の組合か)が刻まれていて、その両脇に記念樹と思しき木が植わっている。平場4は、現代の墓地で、その西隣の平場5に石塔や歴代住職の墓などが置かれている。平場21・22の尾根上西側下に集石を確認し、平場と集石部分を結ぶような道も確認した。過去に瀬戸市教育委員会が調査をした菩提寺遺跡かと思われる。

菩提寺遺跡について、『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』(瀬戸市教育委員会編1977)で「上品野菩提寺の南側丘陵斜面上に所在する。斜面をカットした回廊状の平坦面があり、集石も一部みられる。四耳壺や常滑の壺の破片がみられる。中世墓群である可能性が高い。」と紹介している。記述中の「回廊状の平坦面」が今回確認した平場と集石部分を結ぶ道だと思われる。

ウ 菩提寺南地区

仁王門尾根南斜面

平場1～7の現状は雑木林であるが、段々になっており、また畝も見られることから畑の跡だと思われる。これらの平場の西側に道があり、平場3と平場8の間で分かれている。右手は現在の墓地へつながる道、左手は北山川沿いの旧水田へつながる道になっている。旧水田へつながる道は途中で枝分かれしており、一本は中央東西谷南斜面にある平場6につながっている。平場7の南側、参道の両脇に石積みがされており、それぞれに地蔵が置かれている。かつては山門のような門があったかとも想像できるが遺物は採集できず、想像の域を出ない。

平場8～10は畑地で、現在も耕作されている。平場8で遺物を採集した(図2中の⑤)。遺物の多さから、寺に付随する施設があったとも考

*瀬戸市史編纂委員会 2004 『瀬戸市史 民俗調査報告書 四 品野地区』では、「弁財社が祀られている」という記述と「天神社が祀られている」という記述が見られる。

えられる。

参道 参道は階段状に石が積まれており、その両脇には排水路が見られるが、東側の排水路は段々に水が流れるように造成された石積みも残っている(写真5)。西側の排水路は不明瞭で、水路を塞ぐよう巨石が見られる。その巨石の位置から3メートル程西側に入ったところに参道と並行して石列が見られる。

南東A谷南斜面

平場11は雑木林で、南10mの地点に集石を確認した。造成地に近いが、遺構の可能性もある。

南東B谷南斜面

平場13・14は、水田跡のようで、現在もぬかるんでいる。

平場15も水田跡のようである。遺物を採集した(図2中の⑥)。平場15の南辺を通る道があり、この道が平場12とつながっている。

平場16～18は竹藪で段々になっている。畝も残っており、畑跡かと思われる。(伊奈和彦)(3)採集遺物(図3)

菩提寺の調査中に地点①～地点⑧の8ヶ所において、中世から近代にかけての遺物を表面採集した。以下地点毎の概要を述べる。

地点①：菩提寺地区中央東西谷谷底参道東水田跡

中世後半期の匣鉢1点、土師器の焙烙らしき破片1点を採集した。

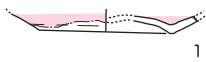
地点②：菩提寺地区観音坊尾根平場2

近世後期の鉄釉土瓶の底部(図3の1)1点

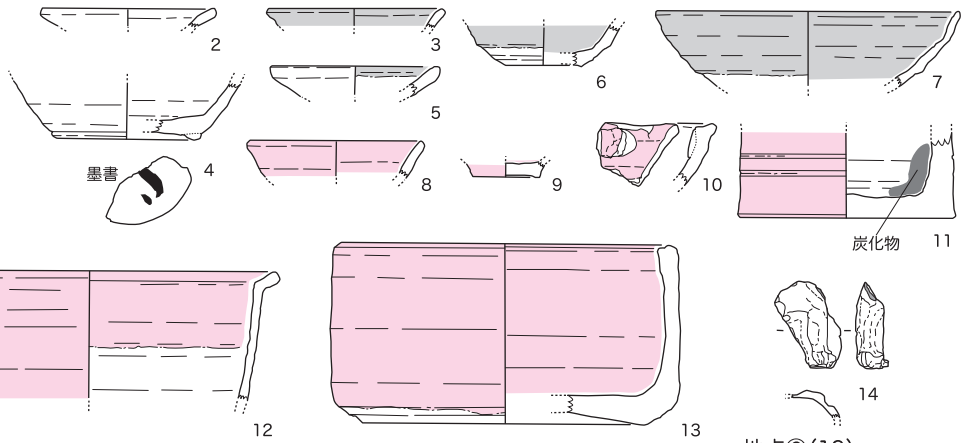


写真5 菩提寺参道

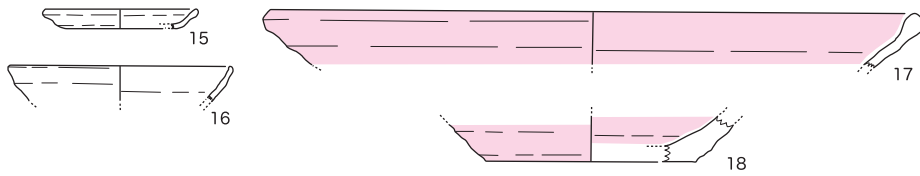
地点②(1)



地点④(2~14)



地点⑤(15~18)



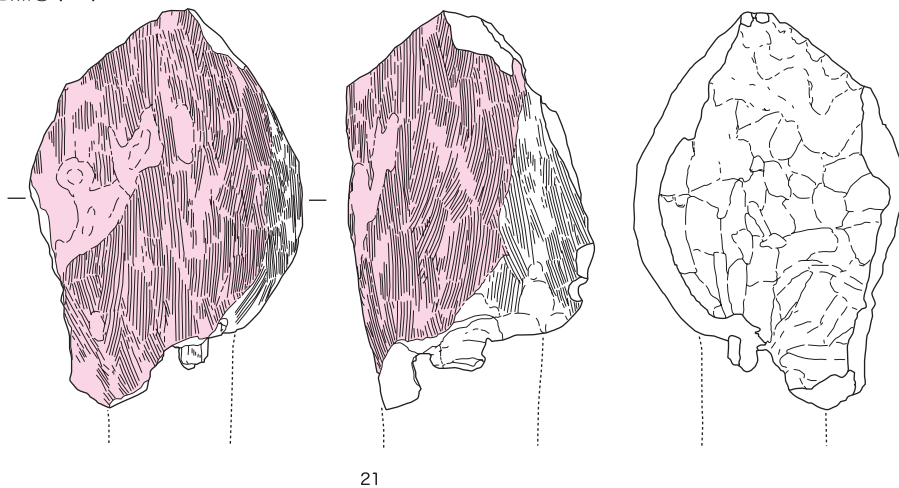
地点⑥(19)



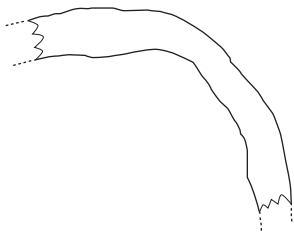
地点⑦(20)



地点⑧(21)



21



■ : 灰釉・自然釉 ■ : 鎊釉・鉄釉 ■ : コバルト

図3 採集した遺物 (1:4)

を採集した。

地点③：菩提寺地区中央東西谷北斜面平場 43

古瀬戸期の鉄釉壺の破片を 1 点採集した。

地点④：菩提寺地区中央東西谷谷底

尾張型山茶碗の小皿 2 点（図 3 の 2・3）と碗 1 点（図 3 の 4）、があり、碗は藤澤編年の第 5 型式～第 6 型式のものである。古瀬戸後期から大窯期の陶器として縁釉皿 1 点（図 3 の 5）、灰釉丸碗 1 点（図 3 の 6）、灰釉平碗 1 点（図 3 の 7）、錆釉仏供 1 点（図 3 の 8）、天目茶碗の底部（図 3 の 9）1 点、錆釉内耳鍋 1 点（図 3 の 10）、鉄釉平瓶 1 点（図 3 の 11）、鉄釉鉢（図 3 の 12）1 点、匣鉢（図 3 の 13）1 点、錆釉播鉢 1 点があり、他に近代以後の磁器製動物形の置物（図 3 の 14）1 点があり、最も多くの遺物が採集された。

地点⑤：菩提寺南地区仁王門尾根平場 8（畑地）

尾張型山茶碗 1 点、東濃型山茶碗の小皿 1 点（図 3 の 15）と碗 1 点（図 3 の 16）、古瀬戸後期～大窯期の錆釉播鉢 1 点（図 3 の 17）と錆釉鍋 1 点（図 3 の 18、釜・土瓶の可能性もあり）があり、比較的多くの遺物が採集できた。14 世紀後半以後の東濃型山茶碗 2 点が採集できた点は、中世前半期において古窯とは関係のない生活関連の遺物として貴重である。

地点⑥：菩提寺南地区南東 B 谷南斜面平場 15 付近（竹藪）

東濃型山茶碗 1 点（図 3 の 19）を採集した。

地点⑦：菩提寺地区観音坊尾根平場 1 観音坊の南東

大窯期初期の重圈皿 1 点（図 3 の 20）を採集した。菩提寺の主要境内にて採集できた遺物として貴重である。

地点⑧：菩提寺地区中央東西谷南斜面

陶製の狛犬か猿形の右胸から右足付根部分の破片 1 点（図 3 の 21）を採集した。全体に刷毛による獣毛の表現があり、前面から側面にかけて錆釉が施されている。この陶器片は比較的大型で、明らかに斜面からの出土であり、平場 6 か平場 67 から転落した破片の可能性が高いものである。

小結

表面採集遺物は中世前半期（12 世紀末～13 世紀）と中世後半期（15 世紀～16 世紀前半）

の大きく 2 時期に分けることができ、他に近世以後の遺物が散見される。また地点⑧で出土した陶製狛犬片のように祠等の存在を推定できる資料もあった。（蔭山誠一）

まとめと今後の課題

（1）調査のまとめ

文献資料に乏しく、残存する遺構も皆無に等しい菩提寺の姿を少しでも明らかにしたいという今回の我々の試みは困難を極めた。しかし、少ない資料をあたり、現地踏査、遺物採集、聞き取り調査を丹念に行うことでお互いを補完し、空白を埋める作業によってある程度その姿を浮かび上がらせることができた。

文献記録からは、慶長年間以前には菩提寺ないしは観音堂が存在していたことがわかった。更に現地踏査によって中世前半期まで遡る生活の痕跡を確認した。現本堂を中心とする菩提寺地区と南側の菩提寺南地区で遺物を採集したことから、菩提寺に関連する建物はこのエリア内にあったと推定できる。特に、中央東西谷を流れる沢沿いで多くの遺物を採集できたので、沢の上流に当たる平場に堂宇が建っていたのかもしれない。現本堂よりも北側の菩提寺北地区では遺物が採集できなかったが、現本堂裏手の谷は大規模な造成によって埋め立てられているため、遺構の有無は確認できない。

ところで、瀬戸市教育委員会が菩提寺遺跡で採集した遺物を確認すると、6 型式後半の尾張型山茶碗 1 点、7 型式の東濃型山茶碗 2 点、同小皿 2 点、古瀬戸前期の四耳壺 10 点、古瀬戸後期の卸目付大皿 1 点、大窯期以降の匣鉢 1 点、常滑産甕 1 点、平瓦 1 点、五輪塔の上部（空輪と風輪部）1 点である（写真 6）。今回我々が現地踏査で採集した遺物の年代と共通している。遺物の性格としては、今回の調査での採集遺物は、中世に遡る生活の営みを感じさせる遺物が含まれており、菩提寺遺跡での採集遺物は墓地の性格を示すものである。

このことからだけでは中世以前に菩提寺ないし観音堂が存在したことは立証できないが、前述したように、菩提寺の平場の中で最大の面積を有する観音坊尾根平場 1 の現本堂脇で大窯

期初期の重圈皿を採集したことは、文献の記述通り 16 世紀末には観音堂あるいは菩提寺に関連した建物がこの場に存在したことの有力な裏付けとなるだろう。

次に観音堂と菩提寺の関係であるが、文献記録の項でも触れたように、『徇行記』には、観音堂が「漸々ニ破壊」したために本尊が菩提寺に安置されたとの記述がある*。この本尊とは、昭和四（1929）年に焼失した菩提寺本尊の千手観音像を指しているのだろうか。観音堂と菩提寺の関係についての記録はわずかで、詳細を窺い知ることができない。

では、観音堂とは何だったのか。藤木久志氏は、その著書『中世民衆の世界 - 村の生活と掟』の中で、中世には各村で共同管理する惣堂（村堂）が建てられ、村の寄合いや宗教的行事に使われるなど、自立する中世村落（惣村）のシンボリックな役割を果たしたとしている。観音堂とは、まさにこの惣堂ではなかったか。当時の惣堂は、堂守の僧がいるか、行事の都度他寺院から僧を招くかで、管理はあくまで村が行い、村の長老（オトナ）によって差配されたようである。実は、現在の菩提寺も、住職はいるが普段は無住であり、管理は上品野町の住民が行っている。戦前以前からの慣習であるそうだが、6名の役員の中から総代が選ばれ、総代を中心にして行事が執り行われている。まさに中世の形そのものではないだろうか。（伊奈和彦・宇佐見守・蔭山誠一）

（2）今後の課題

考察を進めていく過程でいくつか課題が出てきたので、それを紹介して結びとしたい。

今回の調査では、寺の縁起にある 8 世紀の創建を示すような痕跡は見つけれず、古代の様子はわからなかった。では、それは全くの伝説に過ぎないのだろうか。菩提寺周辺では近年、当センターの調査などにより古代集落の存在が明らかになりつつある**。特に上品野蟹川遺跡と上品野遺跡では、「山寺」「山」「門」「文室門」などと書かれた墨書土器が出土している。また、桑下城跡では須恵質の瓦塔片（屋蓋

* 『尾張徇行記』の完成は文政五（1822）年である。

** 上品野遺跡、上品野蟹川遺跡、上品野西金地遺跡、桑下城跡など。



写真 6 菩提寺遺跡の採集遺物

部 10 点）が出土しており、この付近に古代の宗教施設が存在していたことを暗示させる。伝承に基づく菩提寺の創建時期と重なり、興味深い。

次に、採集遺物についてである。現地踏査で採集した遺物は中世前半期（12 世紀末～13 世紀）と中世後半期（15 世紀～16 世紀前半）に大別できるが、中世中頃、14 世紀の遺物が見つからなかった。これは何を意味するのだろうか。菩提寺ないし観音堂が中世半ばに一度衰えてその後再興されたということか*。あるいは、中世半ばまではこの地は墓域であって、中世後半になってから寺や堂が建立されたと捉えるか。いずれにしても、中世後半以前にこの地で大きな変容があったと想像できる。近隣に古代の宗教施設があったのではないかという推測や、桑下城の築城時期ともからめて考察する必要がありそうである。

菩提寺を考察するうえで、近隣の窯跡との関係も気になる場所である。菩提寺近くには複数の窯跡が存在するが、菩提寺境内で採集した遺物の年代と近隣の窯の年代が一致していることに注目したい。それぞれ紹介すると、尾張型山茶碗の窯として上品野 E 窯跡、古瀬戸後期から大窯期の窯として西窯跡、桑下東窯跡、桑下窯跡があげられる。特に西窯跡は菩提寺の門前に存在し、何らかの関係があってもよいように思われる。

今回の調査によって菩提寺ないし観音堂と桑下城は、16 世紀後半の時期に同時に存在して

* 参道の石段下にある東照上人の開基を記した石碑には、弘治元（1555）年に養海が中興したと記されている。

いた可能性が高いことがわかったが、両者の関係については、桑下城の主とされる永井（長江）氏*や、品野城との関係も含めて文献には全く見られない。在地の有力者であったと考えられる永井（長江）氏が菩提寺の保護者だったのではないかと考えてみたが、伝承すら無い状況である。菩提寺と西窯、近隣の他の窯との関係や、桑下城との関係については現在のところ推測の域を出ず、今後の課題となった。

最後に一点、桑下城跡の南側を東西に流れる水野川に架かる観音橋という橋が存在する。桑下城跡に隣接し、城跡南西部に位置するのだが、この橋は菩提寺の参道につながっており、前出の村絵図にもそれと思しき橋が見られる。また、かんのん道という道が中馬街道から菩提

*多くの地誌が松平内膳（正）家老永井民部を城主としているが、長江氏という説もある。（このことは、宇佐見守 2009 「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要第 10 号』財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター に詳しい。）

寺参道につながる道として存在し*、この道の途中に観音橋があったようである。ちなみにこの道は桑下城跡の西端を通っており、この部分は切通しのようにになっている。18 世紀末には存在している「かんのん道」や「観音橋」が中世まで遡れるか否か、観音堂との関係も興味深い。この点についても今後の研究に譲ることとする。本稿を参考として更なる調査が広がれば幸いである。（伊奈和彦・宇佐見守）

末筆となったが、本稿の執筆にあたっては、菩提寺住職山川純生氏、菩提寺総代太田錠治氏に多大なるご協力をいただいた。また、菩提寺遺跡やその出土遺物については、財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センターの岡本直久氏にご教示いただいた。紙面を借りて感謝申し上げます。

*瀬戸市史編纂委員会編 1985 『瀬戸市史 資料編一 村絵図』の解説で紹介されている。

引用文献

- 『尾張御行記』 1984 『名古屋叢書続編 第五巻 尾張御行記（2）』愛知県郷土資料刊行会
『寛文村々覚書』 1983 『名古屋叢書続編 第一巻 寛文村々覚書（上）』愛知県郷土資料刊行会
『春日井郡上品野村 地籍字分全図』1885 愛知県公文書館蔵
『張州雑志』 1976 『張州雑志 第十二巻』愛知県郷土資料刊行会
『張州府志』 1974 『張州府志 全』愛知県郷土資料刊行会

参考文献

- 愛知県史編纂委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
安藤政二郎 1956 『改訂増補 瀬戸ところどころ今昔物語』大瀬戸新聞社
岩原 剛、野澤則幸、中島啓太 2009 「財賀寺旧境内地の調査 - 三河における山寺の研究 1 -」『三河考古第 20 号』三河考古学談話会
宇佐見守 2009 「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要第 10 号』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘・早野浩二 2006 「上品野西金地遺跡」『年報 平成 18 年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘・宇佐見守・武部真木 2009 「桑下城跡」『年報 平成 20 年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁 2005 『上品野遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
瀬戸市史編纂委員会 1985 『瀬戸市史 資料編一 村絵図』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2004 『瀬戸市史 民俗調査報告書四 品野地区』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2006 『瀬戸市史 民俗編』愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会 2007 『瀬戸市史 通史編 上』愛知県瀬戸市
瀬戸市教育委員会 1997 『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』愛知県瀬戸市
武部真木 2008 『上品野蟹川遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 142 集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
武部真木 2011 『上品野 E 窯跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 170 集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
藤木久志 2010 『中世民衆の世界 - 村の生活と掟』岩波新書
藤沢良祐 1994 「山茶碗の現状と課題」『研究紀要第 3 号』三重県埋蔵文化財センター